
The World With All **ウィゾール**

からス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The World With All ウィゾール

【Nコード】

N4551X

【作者名】

カラス

【あらすじ】

普通の人より頭のネジが10本くらい足りないだけで、ごく普通の少年、一宮一樹かずみや いつきの将来の夢は「幸せになること」。そんな彼がひよんなことから世界で7000万台の売り上げたVRMMO The World With All 通称”ウィゾール”をプレイすることになる。しかしそのゲームは狂気と艱難辛苦へのパースポートだった。限度無き自由を与えられた6383万2416人のプレイヤーたちは今日もリアリティーとアンリアリティーの狭間で生き続ける。

同サイトでのVRMMOに触発され勢いで書いた小説です。
ひとりでも多くの人に楽しい時間を過ごしていただけると幸いです。
誤字脱字、ちよっとした感想、どんなことでも感想をくれると
作者が舞い上がりますのでよろしくお願いします。

1) 超高額バイトの代役(前書き)

二作目です。

勢いに任せた拙作ですがよろしければ見ていってください。

1) 超高額バイトの代役

将来の夢を書きなさい。

昨日、先生にA4のプリントを渡された生徒たちが「え〜、みんなはなに〜」とか「きまってないよ〜」とか言ってるなか、ぼくは青いシャープペンシルを一度も止めることなく最後まで書き上げ、その完成度に思わず達成感に満ちたため息をついた。

授業が終わりそれを提出した俺は自分の夢を再確認し、心の中で目的意識が強めたことを確かに感じながら帰路についた。

そして翌日、朝っぱらから職員室に呼び出された。目前には椅子に座ってこちらを見据える担任の先生だ。いつもながらのゴツイ体格が中々に威圧的である。

「おまえ、これはどういうつもりだ？」

「ぼくの将来の夢です！」

なぜ呼び出されたかわからなかったが、どうやら昨日の将来の夢を書いたプリントについてらしい。おそらくあまりの出来の良さに感動し、直々に何か言いたいのだろう。

あれに書いた内容はウソ偽りなく真摯な思いで書かれている。だから自然と応対の言葉も大きくなる。

しかし先生は大きな声が響いて頭が痛いのか、こめかみ押さえる。

「先生、二日酔いですか？」

「頭が痛くなる生徒がいるせいだろうか！」

バアンと机を叩いて先生ががなる。

ううむ、カルシウムが足りていないのかな？ 毎日の牛乳は大切だ。ぼくも朝に1Lは飲んで学校に登校しているからキレルことなんてない。ぼくをキレさせたら大したもんですよ。

「おまえ、これを音読できるか？」

そういつて渡されたのは話題のプリント。自身の夢を他人、しかも職員室という複数の大人たちがいる場所で明かすのは普通の人にとっては自殺したくなるほどに恥ずかしいこと……らしい。ぼくにはその感覚がわからないけどね。

「当然です！」

先生からプリントをひつたくるようにして受け取り職員室中に響き渡るような声で音読を開始する。

「私、一宮一樹かずみや いっしきの将来の夢は幸せになることです。具体的に述べるならば美人で気立がよく私を愛してくれる一生の伴侶を得ます。そして彼女と共に幸せになれるようお金を稼ぐ努力を欠かしません。最終的には庭付きの白い一軒家を購入し、3人の子供たちと大きなペットに囲まれるというプロセスを経るために行動していきます。その計画プランとしては」

「もういい！ もういいから！ 俺が悪かったっ！ だからもう読むのを止めてくれっ！」

体を使って先生が必死に音読の阻止に入る。自分で読めといった

のに理不尽ではないだろうか。ここから具体的に現在進行中の計画について語るところだったのに。

「聞かされるこっちの身になってくれ。自分のことでもないのに死んでしまいそうだった！」

なぜ？ という疑問を抱きながら周囲を見渡すと職員室にいた先生たち全員がこちらを見ながらなにかしらの行動で固まっていた。

コピー機の前でプリントを落としている先生。和菓子を口に含んだまま噛まない先生。ポッドからコップに永遠とお湯を注ぎ続ける先生。床は水浸しで湯気を出している。

「おまえ本当に高校生だよな？ 小学生の間違いじゃないよな？」

「心はいつも少年であるのが人生の秘訣だと思ってます！」

自分の信条を明かす。ついでにサムズアップと笑顔も付ける。しかしそれに対する反応は疲れたようなため息ひとつだった。

「先生、お疲れですか？ 大変ですね、教師って」

「ああ、俺は今まで生きてきて一番教師の大変さが身に染みている」

驚きの言葉だ。

ぼくはこの学校で目の前の先生を嫌っていると文句を言う生徒を聞いたことがない。厳しいながらもジョークもわかる人だし、生徒に対して理解もある。本人も生徒たちと関わるのが楽しいのか活き活きと仕事しているのが他人のぼくでも分かる。将来はこの人のように心の底から楽しみながら仕事をしたいものだ。

それはともかく、そんな先生に教師の大変さを思い知らさせるとはどんな事態なのやら、もしかしてとんでもない問題児なのか？
しかし目立った問題児はこの学校にいないような……………。

「とりあえずもういい。教室に戻って授業を受けてこい」

「はあ。で、この呼び出しにはなんの意味が」

「とつとと行けえっ！」

「サー・イエツサー！」

軍曹のような大音声に体が反射で敬礼したあと回れ右して出口まで駆け出していく。結局最後まで理由はわからなかった。

十 十 十 十 十

間の抜けた電子音が鳴り響き、今季最後の授業終了が告げられた。SHRでは適当な挨拶を全員が交わしながら教室から一人、また一人と出ていく。

「おっ、いたいた。間に合ったぜー。一樹！」

「よっす源ちゃん。なんか用か？」

それに続こうと鞆に少ない荷物を入れようとしていたところに友人の声が入りこいた。佐上源さかみげん、ぼくの一番の親友だ。源ちゃんは剣道で鍛え上げたご自慢の巨躯で近寄ってくる。

「いやさー、前言ってった冬休みのバイトあるじゃん」

「あー、たしかゲームのモニターだっけ？」

源ちゃんは以前、今日から始まる冬休みに1月1日発売の大作ゲ

ームのモニターをするのだと感涙しながら語っていた。なんでも世界で合計7000万台も発売されたゲームにも関わらず予約開始3秒で売り切れてしまうほどの人気商品だそうだ。

これはゲーム業界にとって非現実的なまでに異例中の異例だといふ前から熱く語られたっけか。

源ちゃんは小遣い全てをはいてそれを予約しようとしたが失敗。数年前から情報が出るたびに噛り付いていた身としてはかなりショックだったらしく、一時期はかなり鬱が入っていた。しかしそれもゲーム制作の本社が募集した三日間モニターのバイトに合格したことによって一転した。

先日までなど鬱病患者が診たらそれだけで人生に価値が見いだせそうなくらいの幸せオーラを発していた。

「それなんだけどさ、ゲームが手に入ったわ」

「おっ、やったじゃん。これでセーブデータの件は気にしないでいいな」

モニターをするにあたって本社に直接赴いてそこでゲームをするのだそうだが、そこでやって作ったデータの持ち帰りは不可なのだそうだ。2か月も待てば再度売り出されるだろうゲーム機のことを考えるとそれは痛い。

しかし、ゲームを手に入れたのであればそれを気にする必要もなく自宅でゲームをプレイできるのでからモニターにこだわる必要はなくなる。が、

「ん？ でもバイトの約束をしたんだったらちゃんと行かないとい

けないだろ。約束を破るなんて男どころか人として最低だぞ」
「わかってるよ。だからこそお前に頼みたいんだよ」

ちゅちゅち。と指を振って意味ありげに言う。

「一樹、三箇日はバイト入れてないんだろ？」

「ああ、商店街も閉まっちゃってるからな」

探せばないこともないのだが、年中バイトやらなんやらで忙しい生活をしているのだから正月ぐらいはゆっくり休もうと思つての選択だ。

「だったらよ。一樹が代わりに俺のバイト受けてくれないか」

「えっ、そんな勝手に変えていいのか？」

「先方には昨日電話して代役OKって言われたから大丈夫だ。しかも一樹なら安心して俺の代役を任せられる」

「いや、照れるなあ」

褒められると悪い気はしない。というか有頂天に上ってしまう。

しかたない。正月は休む予定だったが三日間ゲームができるバイトなんて夢のようだ。しかもやったことのない仕事だから新たな道に踏み出せるのは何よりも嬉しい。

「不肖、一宮一樹！ その代役受けさせていただきます！」

「よろしい！ 貴様ならやり遂げられると信じているぞ」

「サー・イエッサー！」

バカな三文芝居を打ちながら二人で笑いあう。

「そついや労働条件は？」

「最低一日14時間プレイで日給60,000円。あと追加料金もあつたりするとか」

「夢のような日給だっ！」

今までバイトは数多やってきたがそこまでの日給は見たことがない。いや、映画の撮影で火だるまになる市民役をやった時は日給30万だったかな？

とにかく日給60,000円が3日間ということは60,000×3でイコール……………180,000円なり！しかもさらに追加料金ということは三日で200,000円を超えることも不可能ではなくて、

……………じゅるり。

「ふふ、ふふふ、これで我が悲願にまた一步近づく」

「うわー中二くせー」

おっと、思わぬ大金の予感に涎を垂らしそうになってしまった。いかんいかん。

しかし棚から牡丹餅の展開だ。まさかゆっくり休むつもりだった三箇日に大口のバイトが転がり込んでくるとは、ぼくもつくづく運がいい。やはり日頃の行いがいいのかな。

「んじゃ、会社の名前と住所、それと電話番号は送っとくわ。いや、一樹がいてくれてほんと助かったよ」

「それを言うならばくもだよ」

「もしおまえがモニターで自由に行動できるんなら俺と一緒に遊ぼ

うぜ」

「オツケー」

それから取り留めもない話をしながらぼくたちは帰路についた。

のちに降りかかる重い、重い怨嗟と狂気、そして恐怖の嵐に巻き込まれるなど知らずに。

1) 超高額バイトの代役(後書き)

見て行ってくれた方、どうもありがとうございます。

え〜と、VRMMOものと言っておきながらそれを始めるのは第4話からです。しかも1話初期設定だけで終わっちゃっし。すいません。

でも第1章だけならすでに書き終わっているので順次出していこうと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

2 (引きこもりの少女とVRMMO) 前書き

ヒロイン候補の登場です。

男だらけの小説にする気は毛頭ありません。

2) 引きこもりの少女とVRMMO

「自宅よ！ ぼくは帰ってきたぞっ！」

扉をバンツと開けて大声を上げながら部屋に突入する。部屋の中は朝学校に出た時と変わらぬ六畳一間の簡素な部屋だ。ここを出て5時間も経っていないのだから当然と言えば当然である。

築25年を迎えるボロごほんごほん……趣き深いアパートの一室である。

僕はネクタイを緩めながら靴を脱ぎ、部屋へと入る。後ろからはキイイイイッパタンと音を立てながら閉まる。昼はそうでもないが深夜の真っ暗な中でこの音を聞くと結構心臓に悪い。ましてやこの部屋の前の住人は首吊

コンコンツ、ガチャ、キイイイイイ

「お帰りイツキ」

「お帰りシイナ。今日も相変わらず可愛らしいね。あとお風呂に入ればもうっ最高！ 具体的に言うならば昼食にチャーハンと野菜炒め、そして卵スープを出したくなるぐらい可愛くなるよっ！」

「……………お風呂入るからお湯沸かして」

「おまかせあれっ！」

ノックはするのに家主の返事は気にせず、しかも自分が部屋に入ってきたはずであるのに”お帰り”と口にする小柄な美少女の名前は和泉詩菜。

同じアパートの隣室に住む家の中をこよなく愛する人である。

え、わからない？ うん、かっこよく言えば”社会の歯車に刃向かう者”、それっぽく言うなら”自宅警備員”、馴れ馴れしく言えば”ヒッキー”、ありていに言ってしまうば”引きこもり”かな。

ぼくは大急ぎで風呂場に飛んでゆき水道の栓を開ける。ホースから勢いよく水が湧き出しステンレスの浴槽に溜まっていく。15分もすればいっぱいになるであろう。昨日はお風呂に入らなかったシイナに入ってもらおうと浴槽を昨日のうちに掃除しておいたからすぐに入れるようになるぞ。

さて、料理に取り掛かるかな。

緩めたネクタイを取り、制服と一緒にハンガーにかけて壁に吊るす。そういえばここはちょうど前の住人が首を吊っていた

「イツキは今日から冬休みなのか？」

「うん、そうだよ」

「そうか、そうか」

小声で満足そうにそう呟くとシイナは着替えを取りに行くために再び扉を”キイイイイイパタン”といわせて出て行った。

十 十 十 十 十

名は体を表す。

シイナを見ているとつくづくその言葉が思い浮かぶ。

「はい、髪拭くよー」
「ん」

2枚のタオルで髪を挟んでシイナの長い髪の水気を拭き取っている。お風呂に入ったことで少しぼさぼさとしていた彼女の髪は潤いを取り戻し、艶やかで全女性が嫉妬しそうなまでに輝く髪となっていた。

「んじゃ、ドライヤーも」
「ん」

マイナスイオンを放出するという売り文句だったと思われるドライヤーで髪が傷まないよう適切な距離から温風を当てる。乾いてくるにしたがって我が家の清潔感あふれる柑橘系シャンプーの香りが鼻腔をくすぐる。

ドライヤーの風で髪が揺れるたびに香るそれは鼻腔だけではなく男心をなんともくすぐってくれる。

和泉詩菜

その名の通り、詩にしたいぐらいに美しい少女で菜の花のように見守りたくなる雰囲気纏っている。そして俗人には触れられない森の中の泉のような神聖さを併せ持った少女である。

しかしこの両親が今のシイナを見れば「名前に”働”の文字を入れていけば」と本気で悩むかもしれない。ぼくは全然気にしないけどね。

「はい、もういいよ」
「ん、ありがとイツキ」
「どういたしまして」

青と白のジャージに着なおしているシイナは立ち上がって昼食が鎮座する炬燵机めがけて飛びついた。

「はやくはやく」
「はいはい。それじゃ、いただきます」
「いただきます」

メニューは宣告した通りのチャーハンにあまりの野菜を使った野菜炒め、そして卵スープ。定番の昼食メニューだ。

「味はどう?」
「んむんむ……こく。イツキが作る料理は全部おいしい」
「えへへ、それほどでも」

これでもバイトで厨房を何度も任されたことがあるので料理には少し自信がある。しかも褒めてくれたのがシイナのような美少女なのだから元気嬉しさ100倍である。

しかしシイナが食事をする姿は相変わらず可愛らしい。小柄な体に似合わずもくもくと食べ、頬を膨らませて嘔下^{えんげ}する姿は小動物チックで思わず身悶えしたくなる。

もきゅもきゅ食べていたシイナはプラスチックのレンゲを逆さに置いて水をごきゅごきゅ飲むと口を開いた。

「イツキは明日何か予定はあるのか?」

湯上りだからか顔が少し赤い。ぼくの部屋にある暖房器具といえ
ば炬燵だけ。ハロゲンヒーターやクーラーなどといった気の利いた
文明の利器はない。古いアパートということもあって部屋はかなり
寒くなる。

半纏はんてんでも着せなくては。風邪をひいてはせつかくのクリスマス・
イブがつまらない。衣装ケースをあさりながら明日の予定を思い出
して答える。

「バイトだね」

「明後日は？」

「バイトだね」

「し、明々後日は？」

「バイ」

「冬休みではないのか！」

パンツ、とシイナが机を叩き、担任の先生とも変わらぬ威圧感を
発しながら怒鳴る。

「いや、そりゃ冬休みだからバイトいっぱい入れるよ」

「ばかもの！ 冬休みというものは怠惰にグータラ生きるものだぞ。
私なんて1年前から冬休みだからグータラと生きているぞ」

「いや、それはただの登校拒否だから。しかも夏休みはないの？
おっ、あつたあつた」

探し物である紺色の半纏を見つけて引っ張り出す。そして熱くな
って何故か睨み付けてくるイズミにそれをかける。

「湯上りだから着といて。クーラーはぼくの部屋にないんだから。」

それと顔も少し赤いよ」

「　っ、うつつ」

何事か呻くとシイナは顔を隠すように掌で顔を覆ってしまった。むっ、可愛いイズミの顔が見えない。が、それも一瞬のこと。何か重大なことを思い出したかのように顔を跳ね上げた。

「　　そういえばイツキ！　たしか三箇日は休むとか言っていただろう」
「　　あゝ、三箇日はゲームのバイトで丸三日家を空けることになって……」

「　　は？　家を……空ける」

「　　うん。かなり割のいいバイ　」

「　　わたしのご飯はどうなるのだ！」

パンツと再び机が叩かれる。今度はかなり強く叩いたせいかわろそうな顔をして右手を抑えている。ああ、可愛いなあ。

　　ぼくが中学2年生の頃辺りからシイナは夕食を僕の家でとることが習慣となっている。といってももそれまでシイナは出前で夕食を済ませていたのだから別段問題ないはずなのだが……。そう思いながらも自分の食事を楽しみにしてくれているシイナの様子に思わず頬がにやける。

　　ほんわり癒されながら質問に答える。

「　　そこんとは大丈夫。おせちとシイナの大好きなクリームシチューを作っていくから温めて食べて」

「　　ク、クリームシチュー！　　そ、そうか、それならば……って、そういう意味ではない！」

ばんばんばんっ

幼子が駄々をこねるように机を叩く。ほんわか、また癒される。

「ん、そういえばゲームのバイトと言ったか？」

「そうだよ。ほら、前言ったと思うけど源ちゃんを受けるはずだった 모니터のバイトをぼくが代役で行くんだ。……ほら」

源ちゃんから送られてきたバイト先の会社名やらの情報が書かれた携帯電話のメールを見せる。

「たしかここは……元日に発売されるVRMMOの会社だったな」
「VRMMO？」

恥ずかしながら、ゲームに関する知識は今を現代とするならば僕の知識は弥生時代並みの格差がある。

バイト漬けだったからなあ。これでも一応遊んでるつもりなんだけどもう少し遊びにも手をだしてみようかな……

「Massively Multiplayer Online
Role-Playing Game 複数同時参加型オンラインRPG、通称MMO。そしてVirtual Reality
仮想現実、通称VRを合わせた名称だ」

驚くほどネイティブな発音で単語がちらちらと飛び出てくる。3年近く一緒にいるが見たことない一面だった。

「イツキにも分かりやすくいうとだ、ドクエパーティーの一人一人をみんなて操って世界を旅しようという感じだ」

「おおつ、それはつまり、かの殺戮神父の行動をAIに任せなくてもいってことだね」

「う、うむ、間違っではない」

「それはなんと画期的な！」

”いのちをだいじに”を選んでも敵を殺そうと効きもしない殺戮呪文を連発してくれた殺戮神父を仲間が操作してくれるなんて、なんて素晴らしい！ボスに殺戮呪文をかましてくれたときは幼少の心ながら馬車から捨てたくなったものだ。しかも一度や二度ではない。

「で、VRってのは？」

「元々軍事技術だったVRをゲームに転化してゲームに五感を導入したようなものだと思えばいい」

「味とか匂いとか感触とかがリアルに体験できるのか？」

「実際にはわたしもやったことがないからわからない。それを導入した初めてのゲームが今回イツキがモニターするやつだからな。しかし各種メディアにはそう告知されているし、実際に体験したユーザーたちの反応はものすごいものだ。7000万台全てが3秒で売り切れたことがみな期待を表しているな」

かなり軽い気持ちで引き受けたがどうやらものすごいゲームだったそうだ。といってもぼくのゲーム感はあるスーパーな家庭ゲーム機から全く進んでいないのでいまいち実感しづらい。

「ああ、そういえば源ちゃんができたら一緒に遊ぼうって言ったのは多人数同時参加型のゲームだから言ったのか。なつとく」

うん、みんなでわいわいRPGができるというのはなんとというか燃える。これは期待できそうだ。いまからモニターのバイトが楽し

みである。

「……………そうか」

「うん？ どうしたのシイナ」

シイナの眩きをぼくが不思議に思ったのと同じ、シイナは矢のよう
に部屋から飛び出していった。

あまりに突然の出来事に”ぽかーん”となってしまう3分ほど身
動きが取れなかった。見る人が見ればみな間抜けと評するだろう。
いや、精巧な置物と評するかもしれない。

キイイイイパタン

再び扉の音が開いたとき、そこには満面の笑みを浮かべながらV
サインをしたシイナがいた。

「ふふ、わたしも手に入れたぞVRMMO”The World
With All” 通称”ウィゾール”をなっ！」

「えっ！ どうやって？ 売り切れたんじゃないの」

「世の中いろいろ方法があるのだよイツキ」

ふふん。と誇るように胸をそらして仁王立ちする。うん、偉ぶる
態度もそうだけど控えめな胸もまた可愛らしい。

「とにかくこれでわたしもゲームに参加する。だから一緒に遊ぶぞ
イツキ！」

「まあ仕事だから自由に行動できるかわからないけど、できたら
いっしょにやろうシイナ」

これで源ちゃん、シイナとパーティーの半分が決まったも同然である。しかしシイナとはバイトの関係上あんまり遊ぶことができないのでこの機会は素直に嬉しい。

「あ、そうだシイナ。イヴだからケーキ買ってくるけど、何が食べたい？」

「テイラミスだ！」

「わかった。それじゃあ帰ったら冷蔵庫に入れとくから食べといて」

これからクリスマス・イヴのバイト連戦が始まるのだ。稼ぎ時だけあって時給は普段よりかなりいい。だから多少の贅沢は許されるが、買ってくると言ったのにシイナの顔は俯いていた。

「……ってる」

「え？ なに？」

「帰ってくるまで待ってるから、一緒に食べよう」

「……うん、ありがとう」

ぼくは壁にかけてあったロングコートをとって寒い外に出た。だが寒さに負けないほどに顔と心はあったかく。微笑みが絶えない。

さて、それじゃあ久しぶりにゲームをするんだから勘を戻すために押し入れにしまつてあるスーパーな家庭ゲーム機で夜中に練習するかな。

その深夜、バイトから帰ってきた少年がスーパーな家庭ゲーム機のスイッチを着けると”でろでろでろでろでろでろでろでろでろ”という懐かしいBGMとともに少年の絶叫、そして少女の笑い声が聞こえ

たのは語るまでもないお話。

2) 引きこもりの少女とVRMMO(後書き)

第1話でも分かると思いますが主人公はバイト戦士であります。すごいですよ、憧れます。年中パソコンピコピコして週に2、3回しかバイト入れてない身としてはマジで憧れます。自分もえっさほいさ働ける精神を磨きたいものです。

といっても土日は休みたいですけどねwww

今回も読んでくれた方々、ありがとうございます。次もどうぞよろしく願います。

誤字修正

10/11 xアルミ浴槽 ステンレス浴槽

なんだアルミ浴槽ってwww。自分で気づいて吹いた。

3 (義姉さんと紅い瞳の乙女)前書き

わー女の子いばーい。ひょうげんむつかしー

3) 義姉さんと紅い瞳の乙女

冒険の書全てが消し飛んでからまる7日間。

いろいろあつって忙しかった。

クリスマスのバイト連載で本物そっくりなトナカイの扮装で二足歩行したら子供が泣きだして保健所がやってきたから蹴散らしたり。(獵友会の人間がやってきたときはまじでやばかった) サンタの服装をしたお姉さんから何故か情熱的に鞭で打たれたり、(えっ、痛いだけだよ。べ、べつに新たな道が見えたりなんかしなかったんだからね！ はふうん)、そしていちゃいちゃいちゃいちゃいちゃいちゃいちやと人生の伴侶はもう見つけたと言わんばかりに街中で戯れる恋人同士に怨念をぶついたりと忙しかった。(くそっ、お前らなんか顔が皺くちやになるまで一緒に過ごして同じ墓に入って死んでしまえ！)

クリスマスが終われば正月に備えて店舗の大掃除などで朝から夜まで駆けずり回り、おせち作りのバイトなどもやった。ほかにもたくさん。とにかく忙しかった。

休んだと言えば深夜にシイナと二人で”スーパーな赤帽子でヒゲを生やした配管工の世界”をやったぐらいだろうか。いや、あれは楽しかった。ほんと神ゲーだよあれは、データ吹っ飛んでたけどね。

今日もバイトを終えて愛しき我が家に帰宅したぼくは明日のモニターに備えて早く寝ようと思ひ、布団を敷こうとしたところで音が

から」

「……ぱ、……パパパツ、……Perdon?」

「その聞き方はあんまり丁寧じゃないわね。丁寧な聞き方はI beg your pardon? よ。覚えておきなさい」

「うん、ありが って違っよ！ さっきなんて言ったの、もう一回言って！」

「あんたを弄びに行くから」

「変わってる、変わってるよ！」

最悪だった。間違いなく今年で最悪の出来事である。

我が義姉はなかなかにお転婆というか（良い意味で）、ぼくをからかいてくれるというか（良い意味で）、そしてかなりクレイジーと
いうか（悪い意味で）。

正直、義姉さんが来ることで冬休み明けに学校へ普通に通えるか
怪しく思えてくる。

だってゲーム”道路闘士?”をぼくと対戦して負けたらリアルに
Fightしだすんだもん。しかも一方的且つ勝利した瞬間に”YOU
WIN PERFECT”とナレーションが入りそうな感じ
で。本当に大人げないよ。

「でも、三箇日にバイトが入ってるから義姉さんの命令と言っても
その日は無理だよ」

「あら偶然、わたしも三箇日はバイトが入ってるの。あんたの家に
よるのはそのついでだから問題ないわ」

問題であってほしかった。

声高々に宣言しよう。ぼくは女の子が大好きだ！ 特に美少女。特に美少女！ ここ、大事だから二度言いました。二度どころか三度でもいう所存である。

そして義姉さんも超絶美少女だ。モデル顔負けの眉目秀麗な容貌、鍛えられていながら筋肉を感じさせぬ柔らかさで無駄のない美しさを内包するスタイルは今まで見たどの女性よりも美しい。誰もが振り返るその艶やかな立姿はすごい。すごいと思う。

だけど、無理！ あの人だけは気さくな対応ができない。いつもいつも調子を狂わされて弄ばされる。

「とにかく、4日からしばらくの間、泊まらせてもらうわね、いっつき。ふふっ」

ああっ、鬱だ。

十 十 十 十 十

電車を乗り継ぐこと数本。ぼくは都心の街へとやってきた。

理由は当然、ゲーム会社”クラスター”でのバイトを受けるためだ。

あたりに乱立する天を突くようなビルの一つに正面から乗り込む。気分は道場破りである。しかし、入口に立っていた警備員らしき人の腕の太さを見れば一瞬でそんな気持ちも萎えた。

同じ人間とは思えぬほどの太さだった。すげえよ、人間鍛えりやあそこまでいけるんだなあ。と妙に感心してしまった。

とりあえず、受付らしきところにいる見目麗しい女性に話しかける。

「すみません、一緒にお茶でもどうですか？」

……

……

……

警備員を呼ばれた。

あの太い腕の先についた岩のような拳が振りかぶられる前にぼくがモニターだとわかってもらえて本当によかった。たぶんあれに殴られたら素手でも死ぬる。

「で、お茶の件は？」

「君が年収2000万稼げるようになったら考えてあげるわ」

「2000万ジンバブエドル以上あるからお茶行こうか！」

「2000万ドル稼げるようになったら考えてあげるわ」

さすがは受付嬢。なかなかガードが堅い。ちなみに2000万ジンバブエドルは10円もあればおつりが返ってくるよ。(豆知識)

「このたびはモニターを引き受けてくれて誠にありがとうございます。それではすぐに係りの者が案内に参りますので、そちらの席でお待ちくださいませ」

その言葉を聞いてとりあえず人心地つく。

これでもバイト慣れはしてるつもりだが、こういう大きな会社でのバイトはやはり緊張する。それも初めての部類の内容なのがそれに拍車をかける。

高級そうなソファアの背もたれに少しだけ体重を預け、息を吐き、吸う。空気清浄機が働いているのか空気は澄んでいて、排気ガスのような濁った匂いは全くしない。

「漆原 ウツハラ 紅音様 ベニネ」

うるし、ばら？ 珍しい苗字だな。

ふと気になりカツカツと几帳面そうな性格が窺える足音の主を見やると、

「……………」

義姉さんやシイナにも全く劣らぬ超絶美少女 いや、絶世のそして奇抜な乙女がいた。

苗字の如く漆を塗ったかのように漆黒で艶やかな長髪。人の願望が直接作ったかのように整った目鼻。コートの上からでも形の良さがわかりそうな女性的膨らみと腰の細さ。そして育ちの違いを自分で攻めてしまいそうなほどに優雅な歩き方。なにより黒で統一された衣服である。その姿はカラスを連想させる。普通の人を着れば似合わないそれも彼女は完璧以上に着こなしていた。

どこをとっても非の打ちどころのない乙女だ。そして何より印象的で、最も目を奪われたのが

ずっと見つめ続けるぼくを怪訝に思ったのか歩きながら彼女がぼくに視線をよこす。

紅い、焰の猛々しき熱と薔薇のような情熱、そして血の柔らかな暖かさを併せ持ったかのようなその紅い瞳がぼくに向けられる。

なにも言えず、なにも行動できない。

彼女はそんなぼくを素通りして受付へたどり着きどこかへと案内されていった。

彼女がどこかへ行ってから、ぼくはどれだけのあいだ茫然としていただろうか。その状態から元に戻ったのは声がかけてからだった。

「一宮一樹さん」

「え、あ、なんですか」

「お待ちせして申し訳ありませんでした。私が今回、あなた様を案内させていただく由水遙ゆみずはるかと申します。以後よろしく願います」

「これはご丁寧ありがとうございます。こちらこそよろしく願います」

いつの間にか横に立っていたお姉さんとあいさつを交わす。

少し呆けていたためか反応に遅れたが、彼女もかなりの美人さんだった。乙女というよりは優しいお姉さんの女性的な女性といった感じの人だ。我が義姉さんとはえらい違いである。

「それではさっそくモニターに入りたいと思います。ついてきてく

「ださい」

由水さんは歩き出したのでそれに続く。長いであろう髪を綺麗にバレッタで纏めていて、うなじが見えるのが非常にチャームポイントな人である。おもわず飛びつきた。って仕事だから駄目である。いや、仕事外だったら良いというわけでも、しかし……

カチャリ、

うちの家とは似ても似つかない小さな音を立てて扉が開く。

数分歩いて着いた場所には超ハイテクな椅子と言った感じのものが中央に置かれ、その隣に数台PCとモニターが置かれている。

「どうぞ、腰かけてください」

薦められたのはそちらの椅子ではなくて普通の業務用の椅子だった。

「まずは簡単な説明からさせていただきます」

「おねがいします」

ぼくの返答に軽く頷いてくれる。こういう小さな動作がありがたい。

「今回モニターしてもらっているのは我が社の製品”ウィズール”です。キャッチコピーは”限度無き自由”。世界初のVRMMOです」

淀みなき流麗な口調で次々と喋られる。なんというか声の綺麗な人だなあ。ずっと聞いてたくなる。

「今回モニターしてもらおう大きな項目は痛みレベルの実装、オペレーター付与の二つです。ここまでで質問はありませんか？」

「その二つってどういう意味ですか？」

「簡略的に言わせてもらえば前者は体感する痛みの強さを上げて試してみる。後者は私があなたの冒険を別視点で見て助言をさせてもらうというものです」

なるほど、つまり痛すぎるかどうかの実験台というわけか、ふむふむ………え？

「痛いだなんて聞いてないんですけど」

「ご安心ください」

天使の微笑みのような柔らかい笑みがぼくの緊張を解きほぐしてくれる。ほっ、そう言うなら大丈夫か。

「死にませんので」

「不安すぎるっ！」

なにっ、死なないから大丈夫ってなにっ！ 世の中死ぬよりひどいこといっぱいあるよ。ていうか死ねないのに痛みだけあるってゲームという名の拷問じゃね！

「しかし痛みレベルのモニターをしていただけなのであれば日給は半額以下に」

「やりますとも。痛みだろうが悪の大魔王だろうがあなたと一緒に倒して見せますよ！」

うん。お金は大切である。多少の痛みぐらいどっつてことないさ

あ。しかもこの綺麗な声がオペレーターに入ってくれるなら至れり
尽くせりである。

「それではさっそくお願いいたします」

あの超ハイテクそうな椅子が示され、それに座る。座るといっよ
り寝るに近い体勢になる。作りがいいのか、沈んだ分が押し返して
くる低反発素材だ。なかなかの寝心地である。

「初プレイ時は設定で3時間は戻ることができませんのでご了承承
ださい」

「えっ、ゲームは1時間ごとに15分休まなきゃいけないんじゃないの！？」

「……………あなたのオペレートはなかなか苦戦しそうですね」

ぼくの疑問はそっちのけで頭に宇宙服のヘルメットに似たものが
被せられる。不思議と重みはなく、ヒンヤリとした感覚が肌を伝わ
る。

そのままですべてとわかれと言われたのでじっとしているとロビー
で会った黒の服装と紅い瞳をした彼女を思い出した。

綺麗な娘だったなあ。また、会えないかな。たしか名前は……

「モニターNO.8、一宮一樹さん、ダイブ」

キュウウウウウン

いつ聞いても綺麗な由水さんの声が聞こえてから機械が動作する
未来チックな音が聞こえ、意識が一瞬にして遠のいて行った。まる

で覚めない眠りに落ちていくように。

3 (義姉さんと紅い瞳の乙女(後書き))

”スーパーな家庭ゲーム機”ってほんと簡単にデータが吹き飛びますよね。私も昔、兄がドラ エ？やっていたところに物理的干渉を加えてしまったがためにゲームが停止して再起動したらあの音楽が……

あの音を3連続で聞いて放心した兄の顔が忘れられません。あれで我を忘れて怒鳴らなかつたんだからできた人である。

とまあ思い出はさておき、今回もお読みくださった皆様方、ありがとうございました。次回も早めに更新しますので何卒よろしくお願ひします。

次回は初期設定回です！

4 (初期設定と初期操作 (前書き))

ようやくゲームの世界に入れました。

4) 初期設定と初期操作

何も無い空間で目が覚めた。

何も無いというのは語弊があるか。ただ青いという色があるのみ。どぎつい青ではなく染みこんだかのように薄い青。和の世界を思わせる。

「初期設定をします。」

”ポコンツ”と軽快な効果音とともに現れたそれを読み終わると同時に次の文章が現れた。

「種族を設定してください」

- ・ヒューマン
- ・ドラグーン
- ・エルフ
- ・ビースター
- ・ドワーフ
- ・デーモン

6つの選択肢が浮かび上がり、首を捻る。

「ドラグーン？ 竜騎士って種族なのか？」

『ドラグーンとは竜人のことです』

「おわあ！ びっくりしたあ」

脳内に突然声が反響したためむちゃくちゃ驚いた。なるほどこうやってオペレーターとして案内してくれるわけね。でも心臓が悪い。

「なんか未体験な会話方法だから気持ち悪いな」

『そうですか。貴重な意見ありがとうございます。ですが昨今では

意識チャットはだいぶ一般的なものとなってきたので避けては通れない道かと』

「じゃあ、慣れるしかないか」

うん、ガラガラな男の声だったら着信拒否にする方法を必死に探すだろうが由水さんみたいに綺麗な声だったら我慢してでも聞きたい。

「で、種族って何？」

『はい、自分の初期種族をここで決めることができます。種族によって異なる育ち方とスキルを持っていますのでゲームをするにあたって重要なファクターとなります。が、極めて初期の方から種族は変えられるので今は気軽に選んでもよろしいかと』

「おっけー、じゃあヒューマンで」

ポンツ。ジャキーン

念じるだけでポンツとヒューマンの欄が選ばれ、大仰なエフェクトとSEを出しながらヒューマンの文字がぼくのプロフィールらしきものの種族欄に埋め込まれる。

『全く悩まないのはさすがですね。ちなみにヒューマンは全種族中で最も補助役に徹しやすい種族です』

説明を聞くに、ヒューマンは全種族中で持久力、敏捷、器用、運の上がり方が二番目に上がりやすいのだそうだ。代わりに筋力や体力、知力が大抵の種よりもかなり劣るので典型的な壁役や攻撃役には向かないらしい。

うむ、運が上がりやすいというのはいいことだ。人間やっぱり努

力も必要だけど時の運も必要だ。

「職業を設定してください」

- ・ウォーリアー
- ・アーチャー
- ・ウィザード
- ・ルーンフェンサー
- ・シーフ
- ・ファイター
- ・プリースト
- ・テイマー

今度は8つの選択肢だ。しかし昔から思っていたのだが……

「この中で実質的な職業って僧侶だけじゃない？ 他のやつらはプー太郎って書いた方がいいんじゃない？」

『それは言わないお約束です』

「いやいや、特にシーフがだめだよ！ 悪い印象しかないのに誰が選ぶんだよ！」

ポントツ。ジャキーン

『……プロフィール画面にシーフが勢いよく入ったのはどういうことですか？ 言い訳があるなら聞きますよ』

「そ、そんなたいした理由はないよ。ただ、かの大泥棒のように女の子の心も盗めるかなあ、とかなんてホント少しも、コレッポッチも………思ってた」

ぼくのいいところは決して嘘をつかないところである（テストに出るぐらい大事！）。

しかし、念じただけで選ばれてしまうからさりげなく選べなかった。ハイテクの落とし穴だ。陰謀に違いない。

『そんな特殊スキルあるわけないでしょう』
「まじでっ！」

がっかりであった。まあ今ならやり直せるらしいがぼくは浮気はしない男である。選んだなら筋は通す男である。だから優柔不断に選びなおしたりしない。

「ぼくがかっこいい！」

『なかなか愉快的なナルシストさんのようですね』

「ナルシストの自覚はないけどフェミニストの自覚ならあるよ」

『なかなか愉快的な変態のようですね』

「あれっ、フェミニストって言わなかったっけ？」

華麗にスルーしてくれた。まったく、スルーされるのもそれはそれで趣き深いな。癖になりそうだ。

「ステータスを振り分けてください」

体力	HP	20 / 20
魔力	MP	10 / 10
攻撃力	STR	10
持続力	VIT	10
敏捷	SPD	10
知力	INT	10
精神	MND	10
器用	DEX	10
運	LUCK	10
ボーナス		10

『ボーナスポイント分だけステータスをあげられます。ちなみにこ

のゲーム、ウィゾールのレベルアップで上がるステータスは種族、職業、称号の3つで変動し、レベルアップ毎に5ポイントのボーナスが貰えます」

「つまり自分好みのキャラがつけれると」

『そうです』

ふむ、つまりは極振りして極端なキャラを作ること可能か。

「……たった17年の人生で語るのはおこがましいとは思っけどさ。リアルでのぼくの経験上、逃げ足と運さえよければ人生何とかやってけるんだよね」

『え、あの、何考えてるんですか？』

ポンツ ジャキーン

「ステータスが決定しました」

体力	HP	20 / 20
魔力	MP	10 / 10
攻撃力	STR	10
持続力	VIT	10
敏捷	SPD	15
知力	INT	10
精神	MND	10
器用	DEX	10
運	LUCK	15
ボーナス		10

『ああっ、何やってんですか！ こんな極振り初めて見ますよー！』

「そこに痺れる？」

『憧れませんか！』

ああいかん。会話の応酬が楽しすぎる。これはウキウキワクワクの3日間になりそうだ。

「名前を決めてください」

新たなテキストはこちらに名前付けを命じるものだった。

なまえ、ナマエ、名前かあ、……………さすがに本名はまずいか。

うーん、呼ばれてちゃんと反応できそうなのにしなないといけないから、名前を改造するべきか。

一樹 イツキ いつき い、つ、き い、つ、き イツキ！

おお、イツキなら大丈夫そうだ。よし、これでいこう。えーと、かつこよくローマ字表記で

ポンツ、カイーン

「IKKIはすでに登録されております。名前を変えてください」

硬質サウンドエフェクトなSEと派手な視覚エフェクトを発しながら新たなテキストと選択画面が戻ってきた。なかなかいい感じに名前が決まっただけあって苛立ちも一塩である。

ふ、しかし毎日牛乳一本飲む男、一宮一樹。カルシウムの恩恵を与っているおかげでこの程度のことです。同じ名前を入れられないなどというゲームの狭い心とは違って、ぼくは寛容にも名前をカタカナにして登録してやる。なんと心深き男。

そして幾筋も降りかかる燦然たる光に呑み込まれた。

十 十 十 十 十

町のざわめき、新鮮な空気の香り、足から伝わる石の硬い感触。

目の前にあげていた腕をゆっくりと下していくと、そこにはファンタジー世界があった。

円状に大きく広がる広場の中央に立っていたぼくが見渡すそこには石造りな街並みと行きかう幾多の人々がいた。

中世ヨーロッパを彷彿とさせる市民の格好をしたヒューマンが即席の露店で大声を張り上げて客引きをしたり、「兄ちゃん玉金ついてんのかい？ もうちょっと高い買い物もんしてっておくれよ」見るからに腕っ節の強そうな鎧を被ったデーモンらしき人物が酒を飲んでいたり、「くっそたれがあ！ ポーカーに負けたら朝から飲まずにはおれんわ！」耳の長いイケメン人間（エルフかな？）が誰かに話しかけていたり「どうですかお兄さん。この壺綺麗でしょう？ そうなんですよ！ さすがです。これの素晴らしさがわかるだなんてあなたは良い星の下に生まれている。これをたった1万ラズで買えばその運氣も倍增され」「とさまざまな人種と役職の人たちで街が賑わっている。

うん、活気があって非常に良さそうな街である。というよりゲームの世界がこんなに進んでいたとは、自分より年上のゲーム機でしか遊んだことのないからなにもかもかもが未知の世界である。オラ、ワクワクすっぞ！

『CE O委員会はなんでこれを12歳以上対象で通したんでしょ
うかねえ……』

何やら嘆息をつく由水さんの声が頭に響くがあまりのゲームの出来に耽美のため息をついているのだろう。うむ、いい出来だ。

「ねえママ、あのお兄ちゃん勇者さんごっこしてるよ」

「ほんとねえ、大きいのに不思議ねえ」

ほう、歳を食っても遊び心を忘れぬとは中々感心の若者だ。そいつは何処にいるのかな？と思って男の子を見ると、その子が見ているのはどう考えてもぼく。

なぜ？ と思って自分の格好を見ると。

服装は安価そうな麻のシャツとズボン。そして右手にはいつの間にか細い木の棒（小枝、先端に葉っぱがついているのが可愛い）が握られていて、左手にはお鍋の木蓋が装着されている。

なるほど、たしかに勇者さんごっこである。わくくらすえ まお
く てやく やったく まおう は たおれた せかい に へい
わ が

「これただの痛い子だよね！」

『精神年齢にピッタシだと思えますか？』

「せめてヒノキノボウだろう！」

『突っ込みどころはそこですか、そうですね。とにかく、現在のあなたの顔はあなた自身のものと同じ顔をしています。もし顔のグラフィック変更がしたい場合は市場の右手にある化粧屋に行けば初回のみ無償で請け負ってくれますが、どういたしますか？』

顔の変更か、うん。別にいいかな。けっこうキュートな顔してるつもりだし。周りからは精神の成長を捨ててきたような顔といつも言われている。純真な子供のように愛くるしいと評判なのだ。いちいち変える必要もないだろう。

「べつにいいや。それよりもはやく進めよう」

『こちらとしてもその方がはかどるので助かります。それでは右手でフィンガーナップをしてください』

ぺちん

あつ、失敗した。へにやれた音がしたことに若干の恥ずかしさを感じたところで目の前にクリアブルーの画面が表示された。インデックスらしきところにはステータス、スキル、イベントリ、マップ、チャット、レポート、コンフィグ、ヘルプ、ログアウトの文字。メニュー画面だろう。

『それがあなたのメニュー画面です。他人からはあなたが視認をONにしない限り見えないのでご安心ください。それではインデックスのスキルを選択してください。その右隅にSP5とあるはずですよ』

”スキルに行く”と頭が認識した途端、画面が切り替わり理路整然と並んだ単語が現れる。押すより早く反応するから気持ち悪いといつかなんといつか。まあ、人間慣れだね。

「うん、あるよ」

『はい。それを一定量消費することで技スキルを会得することができます。SPポイントはレベルアップ毎にしか追加されませんので

お気を付けください。そして会得したスキルはあらゆる条件を満たすことでレベルアップしていきます」

このズラズラつと並んだ一覧はスキルか、よく見りゃスキルごとに消費SPって横に書いてあるわ。

「論より証拠、スキルを手に入れてみてください。こういうゲームの定番としては最初の戦闘技をまず一つ」

おっ、”盗む”がある。これで気になる女の子のハートもゲットだぜ！ということポチツとな。

ピロリロリン、ポコンッ

「盗賊系統専用スキル”盗む”を会得しました。残りSPは0です。」

「あなたは人の話を全く聞きませんねっ！」
「だって欲しかったんだもん」

ぼくは打算が苦手なので感情で動くタイプなのだ。

「まったく、あなたはもう少し落ち着いて」

由水さんのお小言にちゃんと耳を傾けながらスキルのページを開く。そこには技能スキルの欄に”盗む”の文字があった。Lv・1と書いてあるがスキルもレベルが上がるのだろうか？もしそうだとするならば、かの名作”戦略的鬼”を思い起こさせる仕様である。なかなかやりこみがいがありそうだ。

ほかに”万里を駆ける呟き”という条件のところにヒューマン

Lv・1と書かれたスキルがあった。これが種族専用スキルなのだろう。

『まあ、盗賊系統にほぼ必須のスキルだからよかったです。スキルの選択は重要な分岐点なんですから慎重に行った方がいいですよ』
「いや、つってもぼく3日間だけのプレイだし。楽しめた方がいいかなと」

『……………』

なんだろう、この間は。例えるならばそのことをすっかり忘れて全力でサポートする気満々になってた自分が恥ずかしい。みたいな感じた。

『お、おほん。それでは痛みレベルの設定から入りましょうか』

声が若干上ずっている。ああ、クールなお姉さん系のキャラを保とうとしていた人の恥ずかしがる声ってなんか萌えるなあ。

『このゲーム”ウィゾール”では現在痛みに関する感覚は10分の1以下となっています。今後それを個人の意思である程度設定できるようにするために痛みレベルのテストをしてほしいのです』

「つまり実際に痛みレベルを上げて痛い目会ってくれと？」
『非常にわかりやすい要約だと思います。現国の成績がよろしいのでしょうね』

それほどでも。ぼくは褒められて育つタイプだから褒められる分には嬉しくて仕方がない。もうこれだったらいくらでも痛い目に合っちゃう。ん？ うまいこと乗せられてる？ 細けえこたあいいんだよ！

『では、初回から痛みレベルを5、リアルの2分の1までに引き上げます。街の南側から外に出てモンスターと戦ってください』

「あれ？ 防具とかは買わないの？ ぼく貧相な麻の服しかないよ」
『痛みのテストをするのに防御力の高い装備をしてどうするんですか。大丈夫です能天気なあなたならば死にませんから』

「……………」

なんでだろう。褒められて伸びるはずのぼくでもこれを褒められているとは思えない。これは言われてなくても防具を買ってから外に向かおうかなと頭によぎった時、

『ちなみに痛みレベルを10まで上げてテストをしてもらえる場合、オプシオンとしてバイト料金が10万円プラスされます』

「ばつちこーい！ 痛みレベル5なんて屁でもないよ。レベル10に引き上げちゃて！」

『ご協力ありがとうございます。……………扱いやすい子だわ（ぼそつ）』

なにか眩かれた気がするがそんなことは全く気にならないぜ。10万円。10万円の追加料金である。それだけあれば通帳のお金がまた大きく追加される。楽しみだなあ。

この時、ぼくは浮かれていた。天にも昇る気持ちと言っているほどに。しかしこの選択がのちに地獄を見せるとも知らずに…………

4) 初期設定と初期操作(後書き)

基本主人公はアホです。

今回もお読みいただき誠にありがとうございました。
次回より主人公が初の戦闘を行います。お楽しみに。

5 (初死亡と初勝利(前書き))

戦闘です！ 初戦闘です！

もう作者もめっちゃテンション高いです！

5) 初死亡と初勝利

石造りの街並みを飛び出し、跳ね橋を渡って飛び出した外界は日本では見られることのない平原が広がっていた。いや、北海道では見れるのかな？ でも行ったことないし。

見渡す限りに人工物は無く、地平線まで視界を遮る物が全くと言っていいほどない。感動である。久しく忘れていた光景だ。

しかし、こう、なんとというか感動を邪魔するといつかなんといつか……

「由水さん、なんか視力が落ちてる気がするんだけど」

「申し訳ありません。ゲームの性質上、初期能力は統一する必要がありますがあるので視力は平均の1.2になるようになっていきます。最初は慣れないでしょうがそれは我慢してもらおうほかありません。現実での視力が下がることはないのでご安心ください」

なるほど、視力で実力に差が出ないようにするための配慮か。当然だろうが静止視力と一緒に動体視力も落ちている。目は人の情報基点だけあってそれが損なわれるのは肉体的にも精神的にも結構キツイ。

ほかにも筋力とかも普段より落ちてる気がする。なんかここまでちよつと走ったぐらいで息が上がってしまった。普段なら5キロを全力疾走してやっと息が上がるぐらいなのに。

汗が額から一滴垂れ落ちる。汗が出る徒労感、息が肺から込み上げてくる切迫感、足を休ませたくなる重い疲労感。とてもではない

がゲームとは思えないほどの感覚だ。これでは現実と大差ない。

『一宮様』

「一樹って呼んでよ。美人さんに名前を呼び捨てて呼ばれた方がヤル気出るから」

『……わ、わかりました一樹』

思わずガッツポーズ。澄んだ声で名前を呼び捨てにされると地平線を見たとき以上の感動が押し寄せてくる。ぼくにとって所詮綺麗な自然など女の子の前では霞んでしまうものなのだ。

『疲れていますか？』

「情けないことにけっこう息が上がってる」

『それは痛みレベルを引き上げた効果です。できることなら症状の詳細な説明をお願いします』

どうやらこの疲労感を感じるのはぼくだけのようだ。

「現実の疲労感と全然変わらないよ。正直なところ現実も何かのゲームなのかと勘違いしちゃいそうぐらいの再現度」

『面白い表現ですね。……おそらく痛みレベルが設定できるとしてもほとんどの人はレベルを引き上げないでしょうね』

「なんで？」

世の中いろんな人がいる。好きな人をついいじめたくなる人もいれば、いじめられたいくなる人もいる。需要がないようには思えないが。ちなみにぼくはどっちでもいける。ホントぼくって優秀。

『ゲームに限らず作品というのは総じて現実にはない一面が求められることがほとんど常です。たとえばゲームならお姫様が何度も悪

者に攫ひらわれて無事に助けられたり。映画であるなら未来から殺人ロボットのやつてくるとか、絵画であるなら時計がチーズのようになっていたりとか。現実では絶対にありえないことなのに絶大なる評価を得ています』

たしかに、作品にはそういった一面があるように思う。誰もが自分とは離れた非現実の世界を楽しもうと心に思いながら作品を見ているように思う。由水さんの弁舌は続く。

『でありながらも人は作品に現実感も要求します。死んだ人間がただ何となく生き返ったという現象がゲームで起これば苦情の電話が鳴りやみません。というか実際に起こった場合はバグなので申し訳ありません。ですがこれが魔法の力で蘇ったとなれば話は変わってきます。その生き返りはいったんの説明が付き、プレイヤーも満足はしないかもしれませんが一応の納得をします。全く現実的でないにも関わらずです』

ともに現実的な側面で見れば非現実的なのに受け取られ方が異なる。たしかに不思議だ。

「作品での現実的と非現実的の境目は曖昧ってこと？」

『そういう結論もありますが、私が言いたいのは受け取られ方のことです。もしリアリティーを追及してロボットゲームや飛行機ゲームでボタンを40も50も付けたら、覚えるべきことが100も200もあれば一発でクソゲー認定されます。逆に1ボタンで全てが行えるのはあまりにつまらない。故にこれまたクソゲー認定です』

「つまり人は適度な現実感と非現実感を作品に求めている」と

「私の持論ですがね。話を戻すと人は現実の辛い点、痛みや徒労感を多分に味わうことをもってしてまでゲームをしようとは思わないでしょう。実際にネットゲームで対人関係に悩んでゲームを止める

人もいます。必要なのは適度なリアリティーと適度なアンリアリティーです」

うーん、なかなか考えさせられる意見だ。頭の弱いぼくにはちょっと厳しいけど。でも……

「痛みや徒労感が辛いだけなんてのは間違いだよ」

「……その思考の根拠はなんですか」

「痛みも徒労感も確かに押し掛かる時は辛いかもしれないけど、それが過去になつた時は辛いとは違う感慨があるよ」

「……………」

「それにMの人もいるし」

「そのセリフが無かつたら少しはカッコよかつたんですけどね」

「そりゃ残念」

会話中も一定の歩行スピードで景色が後ろへと流れていく。草原地帯に点々と立つ木がいい目印だ。しかし全然敵がないな。と思つたとき、十数メートル先にある木の茂みから何かが飛び出してきた。

「ようやくモンスターがポップしましたね」

「……えーと、気のせいかな。ぼくにはモンスターが熊のように見えるんだけど」

「キラーベアーと書いてあるのが見えませんか？ この辺で一番強いモンスターですよ。さあ、戦ってください」

グオオオという呻きが涎を垂らす強暴そうな歯が生え揃つた口から洩れる。2メートルはありそうな巨躯な体長。前肢に付いた傷ついた爪、左手には何やら紅い液体がついていてそれをペロリと熊が舐める。なるほどケチャップですね。粘性のないケチャップですね。

わかります。

などという現実逃避からは意識を戻す。そして自分のもっともやるべき最善の行動をとる。すなわち 闘争！

ではなく逃走です。テヘッ

「むりむりむりむりっ！ふつう最初に戦う敵って可愛いモンスターって相場が決まってるんだろ！」

ボーナスを半分つき込んだSPDが役に立つ時が来た。疲労感？
知るか！ 街まで走り抜け！ じゃないと死んで喰われるわ。

しかしまわりこまれた！？

全力ダッシュで街に戻り続けると、熊とは思えぬバカげた突進速度でまわりこまれる。あれれ、人間って持久力では生物の中でも結構優秀だったと思うんだけど気のせいかな。いや、これこそがゲームに求められる非現実か

グワアアアア

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ
あああ！」

会社の警備員以上に太い腕が高速で振り下ろされ視界が暗転した。

びろびろぴん

「頭が砕け散るといふ貴重な痛みの経験を味わった」

「文字通り頭に痛みを刻みこまれた」

「トラウマを手に入れた」

「フロントムペインを手に入れた」

「速攻で捨てた」

十 十 十 十 十

初の死亡を味わい、気付いた時には最初にいた石造りの広場で仰向けに寝そべっていた。どうやらここが初期位置として登録されているようだ。

しかしあの痛みはマジでやばかった。軽くトラウマというかフロントムペインで悩まされてもおかしくないレベルである。とてもではないがMだからという理由で薦められるレベルではなかった。というかぼくじゃなかったらショック死するかもしれん。

「ね、ねえ防具着ていい？」

『却下です』

「……………だよね」

はあ、うじうじしててもしょうがないまた行くか。日給分以上の仕事をするのがぼくのポリシーである。絶対に感心するようなデータを提供してやる。

『ちなみに死んだ場合。ペナルティーとして蓄積経験値と所持金額が大幅に減少します。それと低確率で持ち物のいくつかをロストします。あなたはレベルが1で持ち金も少ないので今のところ死ぬの

はほとんどデメリットなしです』

痛みというデメリットがあったけどね。いや、これもいつか思い出となるよね。自分で言ったことを思い出し、納得させる。ちなみに装備品は何も落としてなかった。別に木の枝と鍋の木蓋を落とそうがどうでもいい。とかつても思っけど気にしない。

それから十分ほどのような感じで痛かったかを報告して、またあの死地に赴くことにした。

十 十 十 十 十

「リアルすぎる！」

記念すべき”初死に”した場所に戻ってきたぼくを待っていたのは赤く染まった緑の芝生だった。しかも逃げようとスタートダッシュを切った時に付いた足跡まで残ってるし。そこにリアリティーだすぐらいなら熊の持久力にリアリティー尽くせと物申したい気分である。

『言い忘れましたが出血もモニターの検査項目に入っています。ですのでこれで一つ項目が減りました。バイト代にオプションで2000円追加されます』

「ひゃっほおおお！ 死んでよかったああああ！！」

人として何かおかしい気がしないこともないがたいした違和感ではないので問題ないかな。

歡喜に震えていたところに後ろから足音が聞こえた。振り向くと

緑色の子供？ らしき生き物がいた。疑問形なのは身長が1mほどしかないのと顔がやたら強暴そうというか整形に失敗した感じというか、まあそんな感じの顔をしているからである。そして右手には身長とは不釣り合いな長さの棍棒。

さっきの熊と同じく体の少し上にゴブリンの文字と緑のゲージがあるところを見るに、モンスターなのだろう。

『ゴブリンです。戦ってください』
「言われずとも！」

十メートルほどの距離を詰めるために走る。ゴブリンもこちらの戦意に反応したのかカパツと口を開けてアングアアアとしわがれ声で吼える。

へっ、隙だらけだぜ。

ゴブリンとの距離が3mに迫った時、大きく跳躍する。そのまま踏みつけ

ヒョイ、ゴスッ

「いでっ！」

なんかあっさりと躲されて着地したところを棍棒で弁慶の泣き所を殴られる。めっちゃ痛い。しかし敵の力が弱いからかまだ耐えられる。視界の隅の方に突然映ったHPのゲージも十分の程度しか減っていない。

『あなたは何をしようとしているんですか！』

「いや、この前まで」スーパーな赤い配管工の世界”プレイしてたからついでが」

『ばかですか？ ばかですね。失礼しました』

あれ、なんかさつきから急激に反応が冷たいものになっていく気がするのは気のせいかな。はっ！ これが巷で人気のツンデ

ガスンツ

「はっが！」

愉快なことを考えている場合ではなかった。横腹にぶち込まれた棍棒がめっちゃくちゃ痛い。しかもさっきのは本気じゃなかったらしく倍近くの力で殴られた。痛い、マジで痛い。シヤレにらんレベルです。しかもHPが一気に削られてもう三分の一ぐらいしか残ってない。色なんて目に優しい緑から警戒色の黄色になっている。

くっそ、これでもいろいろなゲームをクリアしてきたプライドがあるんだ。こんな低級モンスターにやられてたまるか。

”なにくそっ”の精神で右手に握られた頼もしき相棒を振るう。風さえも裂きそつな速度で振るわれたそれは”ペチツ”という壮大な音を立てて相手のHPを五十分の一も減らした。

いける、いけるぞ！

木の枝で叩かれ苛立ったのか、ゴブリンはフンガアアと叫びながら棍棒を先よりも更に早く振るう。それを冷静に見極め、左手に装着された丸い木蓋の外円で敵の腕をそらす。

ゴズンツという音が地面から聞こえ、がら空きとなったゴブリンの体めがけて連撃を放つ。

ぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺち

ドラマーにでもなったような気分である。あれと違つのは叩くか突くかの違い程度くらいだろう。え？ 音も違つて？ 気にするな小さい違いである。

今の猛攻撃でゴブリンのHPは五分の四ぐらいまでに減っている。よしっ。これをあと四回繰り返せばゴブリンを倒せ

「敵とこつちの攻撃力差おかしくないっ!？」

今更ながらに気付いた。威力どころかビジュアルですらも冒険者であるぼくのほうが劣っている気がする。木の棒で突きまくる主人公とか嫌すぎる。

『木の棒の攻撃力は19ですからね。リアリティーに溢れていますよね』

「そこはリアルに作るんだ！ ていうかそれだと実質ぼくの攻撃力1かよ！」

ゴブリンがこちらに背を向けるようにして回転棍棒攻撃を繰り返す。遠心力の助力を受けて威力を増すそれは痛そうだ。当たればね。

体を後方へと逸らす。胸先を通過しようとする棍棒を下から木蓋で突き上げる。鈍い殴打音と共に棍棒が跳ね上がりゴブリンがつられて姿勢を崩す。

そこに自慢のミドル（敵の大きさにハイ？）キック。いつもより鈍い反応しかできない体だが脳からの命令を的確に受け、腰から足、腕の振り、完璧な軌跡を描きながらゴブリンの顔面に足の甲が打ち込まれる。

ギイイイイイイ！

木の枝とは桁違いの威力が奴のHPを勢いよく削っていき、ゴブリンが2メートルほど吹き飛ぶ。あまりの威力に取りこぼしたのか棍棒が手放される。木の枝を何のためらいもなく捨て、棍棒を掴みとる。

右手に収めたそれはゴブリン用のためか少し短い気がする。しかし木の枝以下ということはないだろう。

『ゴブリンが逃走しますよ』

「させるかっ」

こちらを振り返ろうともせず一心不乱に短い足を交互して逃げる健気な姿に生物の生存本能を感じさせられたがこちらも情けをかけるつもりはない。

手に入れたばかりの棍棒を振りかぶり投擲。

メキャットという非常に頭から出してはいけない効果音を出しながらゴブリンが大地に意思なく崩れ落ちる。非常に軽い傾倒音が耳に届き、破碎音が続く。

ゴブリンの体が緑からクリスタルのような透明に変色し、中心から砕け散るようにして破裂したのだ。そして残った跡にはゴブリン

の体はなく、白く輝く球が宙にふわふわと浮かんでいた。

『運がいいですね。レアアイテムです』

あれがアイテムかと思っていると、軽快なBGMが流れ、テキストがポップされた。結構カッコイイBGMである。さすがは世界に注目されるゲームである。音楽にも金をかけているのだろう。

「レベルが上がりました。称号”初勝利”を獲得しました」

「おっ、なんかゲットした」

称号に書かれた勝利の二文字によつやく自分の勝利が実感を伴つて心に響く。

とりあえずゴブリンがドロップしたアイテムを回収しておこうと白い球を手取る。手に取ったその上に文字が浮かぶ。

【ゴブリンの誇り】 3

『おめでとつございます』

「ふふ、さすがぼく。日頃の行いがいいからだな」

『あなたの日頃の行いは非常に気になりますますがそれはいいです。ひとまず説明に入らせてもらいます』

事務的な口調で伝えられるのは結構な情報量だった。

「アイテムの横にある星の数字がレア度です。そして先ほど獲得した称号ですがメニューを開いてステータスページを開いてください」

言われたとおりにページを開くとレベルが上がったためか最初に

設定したステータスから多少だが変化があった。

NAME ; 一樹
LV ; 2
JOB ; 盗賊
TITLE ; 駆け出し冒険者
BADST : Pain?
STATUS

体力	HP	36 / 50
魔力	MP	44 / 44
攻撃力	STR	13
持久力	VIT	15
敏捷	SPD	21
知力	INT	10
精神	MND	14
器用	DEX	16
運	LUCK	22
ボーナス		5

ボーナスを使い切ったはずなのに5ポイント増えているし、ステータスもだいたい成長している。SPDとLUCKがいっぱい成長しているのが嬉しくて仕方ない。非常にぼく好みである。

「INTが全く成長していないあたりあなたそっくりですね」
「なんかそのセリフ、生まれてきた子供に言ってるみたいだね」
「……あなたのような子供を持つ親は大変でしょうね」
「……き、きついなあ」

若干のラグの後に言われた言葉はかなり辛辣だった。心にグサツときた。グサツと。

めずらしく凹んでいる心を癒そうとボーナスをステータスにつき込む。相変わらずSPDとLUCK振りである。ふいふ、すでにSPDとLUCKが当初の二倍以上になっていることが何となく誇らしい。

『また無茶な振り方を……まあいいです。それで称号に関してですが、称号の欄を選択してください』

言われるがままに選択し、新たに小さな画面がポップする。そこには”冒険者見習い”のほかに”初勝利”の文字が。つまり手に入れた称号はここに入っていくのか。

盗賊見習いに意識を向けると説明が浮かび上がる。取得条件とレベルアップ時上昇能力値、そしてコメントだそうだ。しかし全て何も書かれていない。が、”初勝利”の方はそんなことなくちゃんと書かれていた。

半ば予想通りというかそれ以外ありえないだろう獲得条件が”モンスターに勝利すること”で上昇能力値が”STR+1、VIT+1”となっている。コメントには”1歩を踏み出す勇氣ある者よ。2歩、3歩と進み続け、高みを目指せ”と書かれている。うむ、なかなか中二心をくすぐるセリフである。しかし、

「SPDとLUCKがあがるのはないのか。がっくし」

『ですがつけているのとつけていないのでは大きな違いとなってきますので着けといた方がいいですよ』

「由水さんがそう言うなら」

称号を操作して”初勝利”を身に着ける。

『それではアイテムの出し入れについて説明します。アイテムペー
ジ隅の方に”weight”の文字と横に数字がありますよね』

ある。Weight 100という文字がポツンとある。

『それがインベントリに収納できるアイテムの限度重量です。それ
以下であればいくつかの例外を除けば幾つもアイテムを入れられ重
さによるデメリットも消え失せます』

「つまりは限度ありの四次 ポケットと」

『そのとおりです。ついでしまい方と取り出し方ですが、しまい方
はアイテムに手を合わせて”インベントリ”ということと収納され
ます。取り出し方はメニューを開いて取り出したいアイテムを念じ
ることで取り出すことができます』

とりあえず実践あるのみなので右手でゴブリンの誇りを持ちなが
ら「インベントリ」というとフツと煙のように球が消え、アイテム
欄を見るとそこにゴブリンの誇りが映っていた。そのままゴ布林
の誇りを取り出そうと念ずると再び右手に球の感触が戻った。

「なんとというか、便利だなあ」

『一先ずはこれだけ覚えればプレイにまず支障はないでしょう。で
は戦闘を継続してデータの採取をよろしくお願いします』

「はいはい」

5) 初死亡と初勝利(後書き)

……せ、戦闘です。血沸き肉躍る……戦闘です(小声)。コメディーになった気がしない、ことも、ないですが……

え〜と、今回も読んでくださった方々、どうもありがとうございます。おかげでお気に入り件数も初めて二桁達しそうです。どうもありがとうございます。

一件登録が上がるたびに作者の顔はニヤニヤです。モニターに映る顔が気持ち悪いことこの上なしです。

次回は戦闘こそないですが起承転結で言うところの起の終盤に入っていくこととなります。

もしよろしければ次回の更新時もよろしくお願いします。

2011,10,21

ステータスとその周辺会話を多少変更
称号に関する記述を変更

6 (創られし神の椅子) (前書き)

— 先ず物語の展開が固まってきました。

修正 前話までのテキストのカギ括弧であつた『』 を止めて「」にしました。 じゃないとオペレーターの人のセリフとかぶっちゃってわかりづらいと今更気づいた。 いや、これってもしかして作者の技量でどうにかすべきとこだったのか……うん。

6) 創られし神の椅子

長かった。長かった。というか疲れた。

2時間近くにも及ぶモンスターたちとの戦闘は非常に疲れるものだった。最初のゴブリンと戦ったあたりから鈍い体に慣れてきたのか、多少ながらも思うように動けるようになり、それ以降ノーダメージでの敵撃破が連続した。

しかしモニターとしてそれはダメらしく、適当にダメージを食らってください。と言われたので、じゃあHPも減ってるから一回殺されて全快しようかな。と思ったときに限ってあの熊が現れて今度は噛み殺された。なかなかへビーな体験である。というかもう熊と戦いたくない。あいつだけ別格すぎるもん。がたがたぶるぶる。

なんやかんやありながら、その後も狩りをしたりされたりしながらでデータ集めは順調に進んだ。ほかにオプシオンのあるデータを提供したので更にバイト代が1万追加されてウハウハである。熊にトラウマ植えつけられたけどね。しくしく。

とまあ、七転八倒あった結果、現在のレベルは3。そしてスキルポイントが6あったので、”エネミーサーチ”を入手した。これは名前通り索敵をするスキルで、これのおかげで熊をそうそうに見つけて接触せずに逃げることが幾度もあった。MPが必要だから乱用はできないけどね。

そんな感じでいっぱい戦闘していっぱい疲れたぼくは由水さんの許可を得て街へと休憩に向かい、現在城門をくぐったところだ。く

ぐった瞬間、門番に「お帰りなさい」って言われた時にはビビった。突然話しかけてくるんだもん。

でも話せるとわかって、何度か話しかけてみると「わたしはレンズス町の門番なんですよ」しか言わなくなつた。やっぱりいくら技術が進んでもゲームなんだなと安心できた。

そんなこんなで初期位置である広場まで戻ってきたのだが……

「なんだありや」

『何やら広場にほとんどの人が集まっていますね』

円形に象られた石の広場はものすごく広く、市場が揃うものすごく活気あふれる場所だ。しかし今の活気は少し雰囲気が違う。ぼくと同じ麻の服を着たエルフに話しかけた。名前とHPバーしか浮かんでいないからNPCかプレイヤーかの判断がつかないが、その貧ゴホン……清貧を重んじる格好は初期プレイヤーのそれだろうと思つての選択だ。

エルフのプレイヤーは少し高揚しているらしく、身振り手振りを交えながら手短かに話してくれた。

「ウィゾール主要製作者の一人、加崎さんが演説するんだよ」

だそうだ。なるほど偉人のお言葉が聞けるとは、みんなが騒いで集まるのも無理はない。これほどのゲームを作ったのだから、特別な感性の持ち主なのだろう。ぜひとも見分を広めるために聞かせてもらおう。

『そんなイベントは予定されていないはずなのですが』

「急遽やることにしたんじゃない？ 独断かもしれないけど」
『それだとちよつと上がごたごたしそつで面倒ですね』

周りの人ばかりが「きたぞ」「あの人が」と次第に囁き始めた。

広場の中央、演説用なのか木製の壇が置かれている。それに上ろうとしている眼鏡とスーツ姿のヒューマンがひとり。名前のところに加崎と書かれていることから彼が製作者なのだろう。

みんなよほど聞きたいのか広場には3000を超えるだろう人ばかりで隙間なく埋め尽くされ、人によつては周りの家の屋根に乗っている。おそらくここにいる人たちは全員が全員、人が入ったプレイヤーなのだろう。さすがにこれは圧巻である。

壇上に来た加崎さんは眼鏡のブリッジを指で押し上げ、清々しい顔で広場を見渡す。それだけで広場から喧騒が消え失せ、静寂が訪れる。

「みなさん、こんにちは。わたしがウィゾール主要製作者の一人、加崎です。まずはお礼を言わせてください。ウィゾールをプレイしていただけで誠にありがとうございます。関係者各位、歓喜の涙でハンカチが手放せぬ毎日であります」

失笑が広場に広がる。どうやら気さくな人のようだ。

「インタビューなどで知っている方もいらつしゆるでしょう。私たち主要制作陣の60人の半分は私の同郷の友でもあり別の道を志した者たちです。偶然私はゲームの分野でしたが、彼らは個々人が金融、政治、食品、音楽、歴史、軍事ありとあらゆる分野での専門家となりました。もう半分は私がゲームを作るにあたつて尊敬する方

々です」

「えっ、主要制作陣のほとんどってゲームの世界を知らない人たちなのか」

『はい、そうですよ。彼らが精力的に専門的な知識を提供してくれたおかげでウィゾールは完成したのです』

正直、驚きの連続である。しかしあらゆる専門家たちの視点を取り入れるという意味ではこれ以上頼もしい後盾はないだろう。

「話は変わりますが、私は幼少時代から神様になりたいという夢を持っておりました。ああ、みなさん。ここは笑うところですよ」

いまのカミングアウトで笑える人はいるのだろうか。やはり奇特な感性の持ち主のようだ。

「本来なら叶わぬ夢。ですが私たちは作ったのですウィゾール世界を管理する神の椅子とでもいべき肩書と皆の様子をうかがえる神の視点を！ これで私の夢は叶いました。皆様、本当にありがとうございます」

なかなか際どい発言をする人だ。人によっては反感を持つ人もいるのではないかな。

しかし、驚きの演説は続く。

「初動販売数7000万台という快挙を成しえ、現在12時のアクセス状況は6383万2416台！ 実に9割以上です！ これほどリアルとアンリアルの境界を曖昧にしたゲームがあったらどうか。否！ あるわけがない」

聴く者の心を熱く揺さぶるような演説。聴衆は次第に心が浮き足だしたのか、ざわざわと騒ぎ、高揚を抑えられなくなっている。

「みなさん！ ウィゾールのテーマは！！」

「「「「「限度無き自由だあああああああああ！」「」「」

地響きかと思うような音が広場を埋め尽くし、皆が腕を天に突き上げて叫ぶ。戦争に赴く騎士の気迫にも負けぬその歓喜の叫びだ。

「すげーよウィゾール」「食い物に味があるなんて感動した！」「おまえら天才だよ。ありがとう！」「製作乙！」「大枚はたいたかいがあつた！」「廃人になるまでやりこむぜ！」「有給使い切つてやる！」

堰を切ったかのような感動の言葉が投げかけられる。皆一様に感謝の言葉が感動の言葉ばかりだ。それほどにこのゲームはすごいのだらう。

「そうです。 ” 限度無き自由 ” ！これが揺らぐことなきコンセプト！」「

加崎さんも演説に熱が入ってきたのか大仰な身振りを手振りを交えて訴えかけるかのように告白していく。

「だから私たちはあなた方に自由を与える！ そう！

不自由という自由も！」

一瞬にして声が熱の入ったものから象をも凍らせそうな冷たい言葉に変質した。

あいつの目 やばい。

ぼくはあらゆる人物と関わってきた。一度話せばまず相手を忘れることはない。それゆえか相手を見る目も自然と鍛えられてきた。その鍛えた審美眼が直感的に危険を告げる。

あいつはヤバい。

清々しかった顔と夢見る少年のような瞳など元からなかったと思わせるほどに黒い狂気が加崎さんの濁った瞳に渦巻いている。それを皆に向け、嘲笑うかのように口を弓の形に屈曲させる。なにを口にせずとも相手を黙らせるオドロオドロしい腐臭にも似た近寄りかたさを放つ。

「さあ、世界を創りし私たち神が宣言しよう。デスゲームの始まりだ！」

ポコンッ、唐突にテキストがポップする。そこには

「エラー、痛みレベルを？にできませんでした。そのまま固定します。」

「帰還借金の項目が追加されました。現実に帰還できるまであと1億ラス。あと1億ラスでゲームオーバーとなります。ご利用は計画的に、返却はお早めに」

「神経回路制限が解放されました。RリアルEアAルLルが使用可能となります」
「復活結晶屋が利用できるようになりました」

「原則が追加されました」

「NPCの行動制限が解除されました」

「ログアウト機能が破損しました。以後、ログアウトできません」

「倫理コードが全て解除されました」

「称号”名誉ある国民”と”束縛されぬ囚人”^{ブリスナー}を獲得」

次々と浮かび上がるテキスト。それはほくだけでないのか誰もが瞳を小刻みに動かし文字を追っている。

その誰もが表情で語っている。飛んで喜ぶような良い知らせでないことを。

『人間そうそううまいこといかねえもんだ』

ふと、むかし先生から聞いたその言葉が思い返された。

6 (創られし神の椅子) (後書き)

物語の原則とでもいうべき部分に触れてまいりました。

次回もこれに引き続き、コメディーな部分は皆無の予定です。

読者の皆様方、今回もありがとうございます。一日のユニーク数が100を超えそうな勢いで大変うれしいです。皆様の退屈を少しでも紛らわせるような作品を作っていきたいと思えます。

7 (碎ける命 (前書き))

すいません。いつも通りの時に投稿しようとしてたんですけどバ
イトの疲れで寝ちゃってました。申し訳ない。

7) 碎ける命

「どづいうことだよっ！」

顔を真っ赤に怒らせ、鼻息を見えそうなくらい荒くしながら怒鳴ったのは筋肉質な男だった。しかし加崎さんは男のそんな態度に臆することなく朗々と語る。

「説明不足でしたね。では重要なことだけをお話ししましょう」

至って気取ることなく恐ろしいほどに自然体で一度周囲を見渡す。彼は満足そうに微笑むと手を横に広げた。

「端的に申し上げますと、あなた方は現実に帰還する方法を失いました。無事に帰還したければ帰還借金額をゼロにしなければなりません」

「借金だと!？」

「ええそうです。先ほどテキストにも表示されたでしょう。そのことです。ちなみに、利息は年20%。毎日6万円も稼げれば利息は払えますよ」

「法外だっ、しかもそんなもの払う義理はない！」

先の男とは違う勇氣ある男性プレイヤーが刃向かう。

「別に払ってもらわなくとも結構です。その代わり、放置してれば4年ほどで2億を超過しますよ」

どう、なってるんだ。状況がまるで理解できない。突然デスゲー

ム？　と言われたり、ログアウトできなくなったり、借金を背負わされたりと。正直なところ借金は個人的嫌いなものランキングのトップ10に入るので非常に苛立たしい。ハンコを押した覚えもないのに横暴である。

「由水さん」

『……………』

「由水さん！」

『はっ、はい。な、なんですか？』

「ごめん、ちょっと説明してほしいんだけど、デスゲームって何？」

周りに怪しまれない程度の声量で喋る。といってもこの異常事態にぼくを気にするだけの注意力を持つ人もいないだろうが。

『近頃人気の高い作品設定の一つです。VRゲームをしていたら突然ログアウトできなくなり、その世界での死が現実の死でもある。』

リアリティーの極致とも言えます。ですが、ホントにそんなことをするなんて……ありえない。きつとなにかの冗談　』

「残念だけど、あいつの目はそんな冗談言ってるようには見えないよ」

つまりはぼくはこのゲームから抜け出せない、死ぬか、借金を返すかしないと、ということか。

「ちなみにデスゲームと言いましたが、ゲームオーバーになっても現実の肉体が死ぬわけではありませんのでご安心ください」

突然飛び出したその言葉に広場中が安堵の空気で包まれた。「やっぱり運営のいたずらだって」「だよな、デスゲームだなんて」「一瞬マジかと思っちゃったよ」

「死ぬのは人としての精神です。もしそうならば一生赤ん坊のような人生を送ることになります。ですが大丈夫ですよ。今の世の中、生きるだけなら国が保証してくれます。しかも親兄弟、恋人、もしくは伴侶の世話を一身に受けられますよ」

が、その緩んだ空気を何のためらいもなく叩き壊した。

彼が言ったことは一瞬で理解できた。そして理解できたことに反吐が出そうになるぐらいに汚物にまみれた汚い手法だった。

ここからの離脱を求め、自ら死のうとも待つているのは安らかな死ではない。在るのは変り果てた自分の精神、そして親しい人たちに甚大な迷惑をかけるという恥、居たたまれなさ、そして悲しみと恐怖。

逃げ場のひとつすら許さないそのえげつない手口に歯軋りが鳴り、拳が砕けそうになるぐらいの握力で空虚を握りしめる。

「ふざけんじゃねえ！」

怒鳴った男が辛抱溜まらずに壇上まで駆け上がり加崎の胸倉を掴もうと襲いかかる。しかし襲われる当人は平然とし、距離が詰まるうとも焦りの表情一つ浮かべない。

「みなさん、認知してください。これが、新たな世界です」

宣告するように眩き、両手を上下に開き、時がスローモーションになったのかと錯覚するほどにゆっくりと打ち合わせた。

ぱちん

「ぶち殺してやるっ！」

壇上に上り詰めた男が手に持った青銅の剣を振りかぶる。しかし彼の腕は　　ガラスのように透明になっていた。

氷にヒビが入るような不安にさせる音が鳴る。続けて楽器のように澄んだ大きな音が耳朶を打った。

「あ、う、う、うで　　俺の腕がああああああああ！」

ヒビが入った腕は振り下ろされることなく爆散の如く砕け散り、四方へとそれを散らした。

命の輝きをそのまま表現したような輝きを放つそれが無数の欠片となって宙を舞い、地に落ち、幻想的なまでに美しい音を奏でながら跳ね返り、チリになって薄れていった。

「おめでとうございますガンダルさん。あなたがウィゾール始まって最初の脱落者であり、この皆に現状を知らしめる重役、贄にえに選ばれました」

加崎は常人には到底理解不能なこと言いながら体全体の色素が透明になっていく男　　ガンダルさんへと腕を掲げる。そして神の無慈悲さを思い知らせるかのように容赦なく指を鳴らす。

幾十もの亀裂がガンダルさんの体に走り、先ほどよりも綺麗な音を連続して立てる。

「な、なんだよ！ いったいなんな
」
「さようなら。ガンダルさん。新しい人生の船出を表面上応援して
るよ」

悪意に満ちた見送りの送辞が合図だったのかガンダルさんの体が
砕け散る。天まで上る彼の欠片はシャンデリア以上の豪華な光で晴
天なる広場を包む。降り積もるかと思えば、変わらず薄れて消えて
いく。

それはどこか降っては溶けていく初雪のように儚い。それゆえ芸
術的な美しさすら感じさせるその光景に誰もが見惚れ、最悪且つ最
恐の現状を把握した。

「うそだ、うそだつ、うそだああああああ！」「そんな、こん
なのあるわけないっ！」「責任者、責任者出てこいよ！」「夢だよ、
夢に違いない、そうだよ、夢だよ」「誰か嘘だと言ってえええええ
えええええええええ！」

広場が収集のつかない混沌に満ち、誰もが精神を狂わせる。ここ
にあの演説を聞いて冷静でいられる人間が何人いるのだろうか。マ
イペースで能天気と言われるべくすら不安、絶望と表現するのだろ
う陰鬱な気持ちで満たされる。

「由水さんはこのゲームを少しはやった？」
『え、ええ。実際に体験しておかないとオペレートはできないから、
序盤だけなら』

「1億稼ぐのにどれぐらいかかりそう？」
『……後半になるほど金額は増えるはずですから断定はできません
が、………最短でも………3年は』

最短でも三年は現実に帰ることができない。最後に振り絞つてだされたらう声が悲壮感に満ちていたことがどうしようもない未来を想像させ胸を締め付ける。

「ああ、それと皆様に帰還するためのヒントを差し上げましょう」

誰も聞いている余裕がないだろうなか、加崎は相変わらず狂気を浮かべた顔で口を開く。

「プレイヤー同士での殺し合いはいくらでもできますよ。そして人を呪わば穴二つ。この言葉をよく考えてプレイしてください。私は中央、神の国で楽しませてもらいますから。それでは」

広場を混沌に突き落とした張本人は事態の收拾つけることなくどこへなりとも消え去って行った。そのことがより一層広場を狂わせる。

「ど、どうすればいいんだよっ!」「俺が知るわけないだろう!」「1億つてどうやって稼げばいいんだよ……」「明日はデートなのっ」「妻が、子供が、家族がいるんだぞ、おれにはっ!」

誰かが収めなければならぬ。でなければ狂気は止まらず、精神の全てがそれに侵されてしまうだろう。

誰かが、誰かが止めなくてはいけない。この悪しき流れを。

その時、ふと一番に気にするべきだろうことが思い浮かぶ。できるか? いや、できずとも誰かがやらなくちゃいけない。だったらぼくが。

「由水さん、ぼく以外にモニターの仕事を受けた人はいますか」
『あなたを入れて全世界で30人いるわ、でもこの街にはいないわ』

その答えに覚悟を決めた。

ここでやればぼくは英雄だ。そうだ英雄だ。ぼくは特別なんだ。
世界で一番すごいんだ。今だけでもいい。思え、そう信じ込め！

狂気の増埜まじけと化し、次第に雰囲気荒んだものへと変貌していく
広場をかくぐって加崎がいた演説台までたどり着く。その段差に
足をかけた瞬間、千を超える人々の視線が一気に注がれる。

緊張に唾を呑み込み、喉が鳴る。仕事で人の注目を浴びることは
多々あれど、ここまで負の感情に満ちた人々の視線を千も浴びるの
はいくら記憶を掘り返してもない。

踏み出せつ、進めつ、言つてのける！ これを今できるのはぼく
だけだ、ぼくだけだ。みんなも話を聞けば協力してくれるはず。正
しいに決まってる。それに英雄だ。英雄になれるんだ。だったらな
れよ。ぼくはすごいんだっ！

自分の実力なんて自分が一番知ってる。とてもではないがヒーロ
ーなどと呼ばれていいような人生を歩んでいない。それでもこうや
って心に言わせなくては足を進められない。

『一樹！ なにをするつもりですか！ 今は現状を冷静に』

由水さんの美しい言葉が脳内で聞こえるがそれに返事を返すのに
回す思考力は残っていない。思考、根性、度胸、それら全てを精神
力に回さなければやっていられない。

自らを奮い立たせ、重い重い足をやつのことで上げ、段を進め、上り詰める。その時には広場全員の視線が集まり、数千もの視線の圧力を感じる。視線にこれだけの重みがあったのだなと場違いな感慨に浸りながら、一声を振り絞る。

「み、みなさんっ！ 俺はクラスター社でモニターのバイトをしている一樹です！」

舐められないように一人称を”ぼく”から”俺”に変更して少しでも気を強く持とうとしたのだが、たいした差はなかったかもしれない。

クラスター社

その名前を聞いて向けられていた狂気が殺気が変わったような気がした。それほどに視線の重みが増した。どいつもこいつも物騒なことを考えているに違いない顔をしていて警察に見つかれば職質は確実である。

ははっ

自身のその軽い考えに心の中で笑みが零れた。少し自分のペースを取り戻した気がした。その気持ちを奪われぬうちに捲し立てる。

「怪しいと思う！ 話すら聞きたくないと思う！ だけど俺だって閉じ込められた！ でも今はやらなくちゃいけないことがある。それはあなた方のリアルでの住所を聞くです」

大半の人間は不思議そうな顔をするが明らかにその意味をくみ取

つてくれた人物たちがいるのもこの視点からではよくわかった。加崎がどれほどの優越感でこの場に立っていたのか手に取るように分かる。

「俺はモニターとしてオペレーター機能が実装されてる。だから現実の人と直接会話できてる。その人が言うにはさっきのイベントは予定されてないもの。加崎たちの独断ということが分かった」

会社ぐるみでのことかもしれないが、そんなことは分からない。だから少しでも希望が見える内容を提示した。

「俺たちはしばらく帰れないかもしれない。だったら数日の間でも現実の体が保護を受けないと餓死なりなんなりで死んでしまう。だから俺に教えてくれればオペレーターが警察に連絡してくれる。だから」

「おまえ、加崎の手先だな！」

突然ひとりの罵声が上がる。

「えっ？」

その広場という広い湖に投げられた一石は途方もない大津波を生み出した。

「そつだ！ 俺たちをここから逃がさないために。死すら許さなくするためにお前が雇われたんだろ！」 「殺せっ！ 殺してしまえっ！」「ぶち殺せっ！」「殺せ！」

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せっ！

「ちがつ」

予期しなかった殺せコールの嵐。数万を超えるその怒りと怨嗟の籠ったその嵐を目の当たりにし、自分の樂觀さに頭を打ちつけたくなった。

不安定になっっている今こそ急いで流れを少しでも上向きに変えようと思つてのことだった。しかしそれは消え失せた敵に対するどうしようもない殺意を向けるのに格好の相手となる者の出現以外の何物でもない。

多くの者たちははけ口が欲しいのだ。どうしようもない怒り、恐怖、悲しみ、それら全てをぶつける確固とした相手が。

そう気付いた時と背中に焼けるような痛みが盾に刻まれたのは同時だった。

「死ねえ！」

「がつ！」

視界が一瞬にして赤く染まる。HPバーをみると残りが2しかない。誰かに斬られたということだけは鮮明に理解しながら後ろを振り返る。

粗悪な片手剣とぼくと同様の麻の服を赤でところどころ染めたひよる長の男がいた。それを見て自分がかかりの出血をしていることに気が付く。

動揺のせいで一切と言つていいほど周囲への集中を欠いていた。おかげで接近を全く察知することができなかった。迂闊というほか

ないだろう。

出血のためかもしれないが、自然と突然の恐怖に息が荒くなる。見ることができぬ背中への傷が熱い。外気に触れてひりつくという段階をすつとばした痛みへの打ち回りがなくなる。しかしできない。目の前にいる男たちにそんな姿を見せたところで凶行が止まるわけではない。生存本能が痛みを押さえつける。

「殺れつ、殺つちまえ！」 「いいぞ、殺せ！」 「死んで償え！」

声の渦に囚われる中、ぼたりぼたりと壇上に落ちる紅い滴の音がイヤに耳に残る。

それは壇上を紅く染め上げ、次第に広がっていく。麻で作られた靴が血を吸ってしめる感触がリアルすぎて吐き気すら覚える。向けられる殺意も込み上げる死への恐怖も全てが全てリアリティーに満ちている。

ホントにこれがゲームなのか？ いや、これからはもうここそがぼくの、ぼくたちの現実なのだ。

周りから絶大なる声援を受けたことで意気が上がり。人を殺すということすらも躊躇いなく行える目で男がぼくを見る。頭上に浮かぶ名前はREZZU。

レッズは血に濡れた刃を突出し、腰へと据え、突撃してきた。

3メートルも距離がないここで避けられようはずもない。壇の下に降りようとも待っているのは血に飢えた鮫にも似た人々なのだか
ら。

全ての退路が断たれ、粗悪な剣の切っ先が抵抗なく胸を貫き、根元まで押し込まれる。

「が、ぶ、かはっ！」

口から吐き出された鮮血が宙を彩り、相手の頬を汚す。しかしレツズの顔は汚れたことへの嫌悪ではなく殺したことへの愉悦で口の端が曲がっていた。

全身からガンダルさんが砕け散った時と同じ澄んでいながらも心を不安にさせる脆い音が体内から響く。見ずとも自分の現状が理解できた。

『いつき、イツキ、一樹！ 返事をしてください、一樹！』

由水さんの相変わらず綺麗な声がすり減らした精神を癒してくれる。ああ、ホントに綺麗な声だ。きつとこれから鳴るだろう命の音色にも似た幻想的な音よりも綺麗に違いない。

といつても、ぼくの命の音は綺麗じゃないだろうな。だって褒められた人生を送ってこなかったのだから……

『一樹！』

胸から外への力がかかり、全身を震撼させ、身が割れるような痛みが走り

ぼくは砕け散った。

7) 砕ける命(後書き)

「勝った！ 第三部完！」とか男が言ったりすることはないのでこの小説を楽しみにしていただいている仏様のような読者様は安心してください。まあ、そうなった場合は男の負けフラグですが。

今回も小説をお読みくださった皆様方、どうもありがとうございます。次回も明日更新する予定なのでどうぞよろしくお願ひします。

8 (紅い瞳の黒き聖皇騎士乙女(前書き))

すいません。またやっちゃいました。

8) 紅い瞳の黒き聖皇騎士乙女

いたい、痛い、痛いっ！

痛みには常人より慣れていているつもりだった。それでも剣を突き刺された痛み、そして体が中から爆散する痛みはそんな自負心を吹き飛ばすのに十分な威力だった。

………なんでだ、なぜぼくは思考できている？ 痛いと感じられている。精神が元のままでいる？ 加崎の言葉を鵜呑みにするならばぼくの頭はどうにかなってしまい、まともな思考すらできないのではなかったのか、

痛みが次第に薄れていき正常な感覚が戻ってくる。ゲームでは砕け散ったはずの腕や足の存在が感じられる。今なら血の流れ一つ一つを認識できる気がする。

”ポンッ”という効果音が鳴ったことにぼくはまだゲームの世界にしていることを確信し、目を開ける。そこには殺された時と同じ光景が広がっている。

波紋を生むほどに流された血だまり。血を吸った靴の気持ち悪さ。大量の血で真っ赤な剣を突き出したまま、啞然とした顔をしているレッズ。

間違いなくあの剣は普通のRPGなら呪われているなという考えが浮かぶ。

あれ？ そういえば異なっている点もある。ぼくから生まれた血

そして命を散らす悲しげで美しい音が響き渡る。

が、今度のそれはぼくの内からではなかった。目の前のレッズからだった。

「……………ああ」

感嘆とも呼ぶべき声がぼくの口漏れ出る。

艶やかな黒髪と紅いマントを勢いでたなびかせながら、長大な黒剣でレッズの胸を寸断した少女は殺人という行為すらもが彼女の美しさを彩るオプションのように見えた。そして特徴的な赤い瞳と頭上に浮かぶ”AKANE”の文字。

風のように颯爽と現れぼくを助けてくれた人はクラスター社の受付で見かけた絶世の乙女、漆原紅音だった。

とてもゲーム序盤で手に入るとは思えない黒服の上に装着した血のように紅く、洗練されながらも露出があるという不可思議なデザインの防具と背中に背負った重厚な盾。そしてレッズを一刀のもとに下すほどの攻撃力を誇る黒剣。桁違いの強さだ。

レッズが砕け、光る粒子となったそれを背景に乙女はぼくへと振り向き、燃えるように紅い瞳でぼくを見据える。その瞳に込められた思いは……………怒り、だろうか。わからない。

漆原さんは身の丈半分以上はありそうな黒剣を壇上に突き刺し、問うた。

「あなたがモニターでオペレーターがついているというのは本当？」

凜として冷たさを感じる声音だった。それはまるで一匹狼の気高さを連想させる。

「あ、ああ。嘘は絶対につかない」

「そう。じゃあ、信じさせてもらおうわ」

言葉を交わした直後、壇上に光る粒子が集まりだした。それは人の形を象り、上と下を分断されたはずのレッズが生まれた。

「……………え、な、何が、どうなってんだ」

生まれたレッズは黙って見つめてくる人々の視線に見苦しいぐらゐに狼狽える。

「見ましたか皆さん。加崎が最後に言っていた『プレイヤー同士での殺し合いはいくらでもできる』という言葉の意味が分かりましたか？」

答えを促す教師のような聞き方に広場全員が戸惑う。構わず彼女は続けた。

「プレイヤー同士での殺し合いではゲームオーバーになりません。つまりはこの一樹さんは本当に本社のバイトでオペレーターのテスト生だと思えます。もし彼の言葉が信じられないのなら無視すればいい。ですが信じる信じないに関わらずあなた方は言わなければいけないはずですよ。なぜなら人は食事をとらなければ……死にますよ？ 嘘でもなんでもなく、ね」

だれも何も言わない広場で彼女の凜とした声は何処までも響いた。

「もし言いたいのであれば、こここの1丁目にある宿屋のカウンターにしっかりと並んで来なさい。守れない者の住所は聞きません。それではお待ちしています」

言うが早いか、彼女は突き刺していた黒剣を腰の鞘に戻し、ついでにぼくを”ひよい”と肩に担ぎ……………担ぐ？

「はっ！」

恐るべき重圧が体にのしかかる。それが高速移動でのGだとわかったのは跳躍した彼女の体が自由落下に身を任せ始めた時だった。

「のわあああああああああああああ！」

「うるさい。少し黙って」

「い、イエス・ママ！」

それから何度も跳躍し、宿屋へとたどり着いた時には若干死にそうだった。

車酔いならぬ人酔いとはカッコも何もあつたものではない。せめてこれが雑踏の多さに酔うのであればクールな主人公らしいのになあ。

「店主、20000ラス払う、宿屋を一日貸切にしてくれ。至急だ」

「な、そんな急な要望は」

「40000だ」

「喜んで用意させていただきます。お客様」

ものすごくあっさりと宿屋を店主から貸切る彼女。

『大丈夫ですか一樹!』

由水さんの焦った声が聞こえる。なんだか数分前にも聞いたはずなのに恐ろしく過去のようなことに思える。

「うん、何とか大丈夫。一時は死ぬかと思ったけど」

実際死んだけどね。

『あなたはバカですか！ 自ら死地に自ら赴くなど動物でもしませんよ!』

厳しい文句がつけられる。反論の仕様もない。でも……

「ごめん、でも必要なことだと思ったんだ。そういえば事後承諾になっちゃったけどみんなの住所を警察に伝えてもらってもいい？

あとこの事件のことをマスコミになりなんなり教えてくれないか？」

『海外モニターからの報告ですすでに警察へと通報され、現在マスコミでも大々的に放送されています』

それはすごい。ぼくたちがデスゲームを宣言されてまだ30分と経っていないのに。

『これだけの不祥事、我が社も隠蔽できるなどとは一片も思っていないのでしよう。迅速な対応です』

「それもそうか」

下手に隠そうものなら世界からのパッシングは避けられない。まあ、どちらにせよクラスタ社にまともな未来はないだろう。

『それを考えると確かに一樹の行動は素晴らしいものでした。末端である一社員の感謝で申し訳ありませんがお礼を言わせてください。ありがとうございます』

「へへん、どういたしまして」

『ですが無茶をしすぎです！ 胸を刺し貫かれた時など心臓が止まるかと思いましたが！』

「ううっ、それはごめんなさい」

有頂天になって伸びようとしていた鼻があっさりたたき折られる。天狗になれる日は遠いようだ。

「どうやらオペレーターがついてるっていうのは本当のようね。それとも精神異常でもきたしてるのかしら？」

脳からではない声に振り返る。

長々と由水さんと話していたため他人からは独り言でハイになりたりロウになったりしているように見えたことだろう。すっげー恥ずかしい。

「なんて嘘よ。あなた本社のロビーでわたしを見てた人よね。よろしく」

「覚えててくれたの！」

人に顔を覚えてもらうのは嬉しいことだ。それが絶世の乙女で自分が見惚れた人なのだから余計に嬉しい。思わず脳内でトリプルアケセルしてしまいたいぐらい嬉しい。ひゃっほおおお、くるくるくるくる。おっと余計に一回転してしまった。まあそれぐらい嬉しいのだ。

「ええ、精神の成長を忘れたような能天気面をぶら下げてたから覚えてたの」

「ありがとう、よく言われるよ!」

「……………なかなか愉快なバカみたいね」

「えっ、なんていったの?」

「独り言、気にしないで。それよりも彼らが来るわ、オペレーターに準備させなさい」

漆原さんは吹きさらしの木窓から外を眺め、顎で広場の方向を指し示す。そっちには砂糖に群がる蟻のような集団がこっちに向かってきていた。いや、蟻の方がましかもしれない。彼らは押し合いへし合い我先にと押し寄せてきていた。

「現状も言葉も解することができないのかしら、あの愚者たちは」
呆れたように首を振ると、

「わたしは彼らを整列させる。だから君はカウンターでなすべきことをしなさい。わかったわね?」

「それって漆原さんが危険じゃないのか!??」

彼女の實力は広場で見たが押し寄せる人数は数千にも及ぶのだ。到底彼女ひとりで収められる人数ではない。しかし彼女の言葉に怯えはない。

「安心しなさい。彼らはリアルな痛みがあることを少しでも知れば一気に大人しくなるわ。それにわたしは聖皇騎士 インペリアルナイト だから」

インペリアルナイト？ 職業のことだろうか。しかしそんな職業あつただろうか？

「あと苗字で呼ばないで、ちゃんと上にAKANEって書いてあるでしょ」

彼女は鞘から鮮やかに黒剣を引き抜くと外へとむかう。

「ああ、そういえば言い忘れてたわ」

「なにを？」

「広場でのこと、ナイスガッツ」

振り返ることなくそれだけ言うと彼女は外へと出て行った。

「さあ、矯正してあげるわ……………暴徒ども」

そこから先はとてもではないが現実とは思えない光景が広がり続けた。紅音さんの華奢な腕で身の丈半分以上もある黒剣を振り回し数千の大群を止め、一時の安寧を作り出したのだ。

刃向かおうとする者は一刀のもとに斬り伏せ、口論しようとする者は相手にすらしなかった。たった一人の少女にありとあらゆる人たちが押さえつけられ、薙ぎ倒されていった。

流麗且つ堅固、そしてなにより周到なる戦術を駆使する彼女の強さを前にしては暴徒と化している数千の大群ですら押し勝つことはできなかった。

結果、今この時ばかりの秩序が作られ、ぼくは3982人の住所を由水さんに伝えることができた。

総額借金1億ラス。

8) 紅い瞳の黒き聖皇騎士乙女(後書き)

短い死亡フラグでした。主人公補正とかではないのでご注意ください。

今回も目を通していただいた皆様方、どうもありがとうございます。
す。

前回言っていたにもかかわらず、また0時を超えた投稿申し訳ありません。

次回からは少し現実の世界へと視点が映ることになっていきます。

9) 狂気 of 笑顔と囚人 プリズナー (前書き)

由水さん視点です。

9) 狂気的笑顔と囚人 プリズナー

「所長、レンズス町にいるウィゾールプレイヤーたちの現住所リストです！」

「俺に回さなくていいつ、そのまんま警察に突き出せ！」

一樹のオペレーターとして活動を始めてから丸1日が経とうとしていた。クラスター本社は騒がしいどころの話ではなく、戦争真っ只中のような混沌と騒乱に満ち溢れたものとなっていた。

事件発生から4時間後には警察総動員による社内捜査が入り、いまではスーツの紺とは違う制服の紺が社内どこでも見受けられる。

社内にある電話は軒並み鳴りやむことがない。回線に負荷がかかり一部地域では電話がつかない状態になっているほどだ。

そして外には警察が押しとどめている怒号を放つ人々の波でどこまでも埋まり、防音ガラスの上限を超えた音量がわずかに伝わってくる。

「馬鹿野郎、馬鹿野郎、馬鹿野郎！」「息子をどうしてくれるんだ！」「出てこい！ 謝罪しろ！」「死んで詫びろ！」

今朝には彼らの数人から火炎瓶が投げつけられた。その者たちは逮捕されたいが社内にいるわたしたちは警察が守ってくれていようと不安で仕方ない。

もはや本当に戦争なのかと錯覚してしまう現状だ。実際、外国にある幾つもの支部の内、一つは警察の警護を受けて尚、炎上してし

まったところもある。

誰もかれもが顔を青ざめさせながらも必死に仕事をしている。あの暴徒が蔓延^{はびこ}る外を帰るぐらいなら不眠不休で働いていた方がはるかにましなのだ。

かくいうわたしも昨日から一睡もしていない。ずっと一樹のオペレートをするためにPCに張り付き、音声認識ソフトで押し寄せるプレイヤーの住所を1日ばかりで聞き続けたからだ。

あのソフトとAKANEさんの援護がもしなかったらと考えるとゾツとする。3982人全員から住所を聞き出すのを1人平均1分と仮定しても、軽く2日半はかかる計算になる。そして彼女の押さえつける力がなければいつまでたっても終わらなかつたであろう。

「すみません！ 3982名のユーザーの住所です。お受け取りください」

「分かりました。おい、至急、主任に連絡して救出班にまわせっ！ 買い取り住所とかぶってないところだけでいいからな！」

「はいっ！」

警察の人たちも切羽詰った大声を上げながら動き回る。全世界で6000万弱の人が囚われ、世界は狂ってしまったのだ。彼らの平穩はしばらく訪れないだろう。いや、誰にも平穩などしばらく訪れないだろう。

「所長！ 部長からの内線3番です！」

「つなげ！」

所長が荒々しく受話器を取り耳を当てる。

「お電話代わり……は？ いったい……それは、っ！ そんな……」
所長の青ざめていた顔が間隔をあけるたびに青さがどんどん深ま
っていく。すでに色すらない蒼白となっている。

「て、テレビを付けるっ！ はやくっ！」

課ごとに配布されている21型液晶テレビのリモコンを即座に見
つけ電源を付ける。最初についたチャンネルはニュースだった。と
いつても現在、ニュース以外をやっているチャンネルはない。

どうやら空港の監視カメラの映像を流しているようだ。キャスタ
ーの話す内容は

「今日の午後3時頃、不祥事を起こしたクラスター社の社長や理事
会のメンバーといった重役たちが既に国内にはいないことが空港の
監視カメラの映像より発覚いたしました。行先については警察たち
も捜索中との」

画面に映る映像はクラスター社の社紹介パンフットに映る重役た
ちが軒並み時間を別にして映っていた。その誰もが日本から一刻も
早く抜け出そうと必死の様子で走っている。

滑稽だった。どうしようもないぐらいに滑稽だった。入社式の時
に大人とは何か？ それは責任感ある行動とか高尚なことを言っ
ていた人たちの無様な姿がどうしようもないぐらいに滑稽だった。

しかし、笑えない。笑えるどころか形容しようもない気持ちが溢
れ、頬を濡らしていく。

社員は誰も何も言わない。一緒にニュースを見た警察たちは同情するような目でわたしたちを見つめてくる。

社員の誰かが悲しみで鼻をすすった。その音がこの部屋にいる全員の絶望を貯蓄した心のダムを決壊させた。

「あああああああああああああああああああああ！」

男女関係なく慟哭した。普段は硬派で冷徹な課長ですら顔を崩して泣き崩れている。

わたしはみつともなく泣き叫びたくなかったから声を抑えようとした。だが無理だった。口から洩れる泣き声はどこまでも大きくなり、止まることなど知らないようだった。

憧れの先輩に告白し、フラれた時よりも深い絶望に身を落とされた気がした。視界が滲み、ぼやけた世界しか見えない。まるで混沌とした現状を表現したようなその視界がどうしようもないくらい憎たらしい。

『ですが、現在主犯格と目されている60名の主要製作者たちは事件発生からパスポートを用いての移動はしていないことが判明いたしました。そのうちの一人はなんと未　えっ！　り、臨時ニュースが入りました！　ウィゾールから解放されたプレイヤーと思しき人物との接触に成功いたしました！　金本さん、よろしく願います』

「なっ！　本署のやつらは何やってるんだ！　番組をやめさせる！」

隣の部署で待機している警部が怒鳴り散らす。

画面が生活感のある狭い部屋の一室に変わる。そこにはむずがる赤ん坊のように布団の上で手足を振り回しながら泣き喚く男がいた。

そのゴツイ顔に見覚えがあった。広場で加崎に贄として選ばれたガンダルというゲーム名のプレイヤーとそっくりなのだ。

画面下に管藤井樽さんかんとせいいたる（25）、独身、会社員の文字が表示される。

どうみても個人情報保護法を遵守しているようには見えない。

現場のリポーターは泣き声に負けぬ大きな声で実況し始めた。

「はい、彼はウィゾールを友人の前で装着したのが昨日の午前10時です。そしてその2時間後に突然目覚め、このような行動をとっている模様です。おそらくクラスター社が発表したゲーム内でゲームオーバーになると人体になんらかの症状が出るかもしれない。の症状とはこれのことだと思われ」

「貴様ら何をしている！」

「っ！ やめろっ、マスメディアは国家権力に屈せぬ！」

「放送を止めろっ！」

突入してきた警察の手によってリポーターが押さえつけられ実況者から画面が移った。

「現在、全世界で病院に搬送された”プリズナー”の方々は932万3214名。全プリズナーの約1割半です。プリズナーを発見した場合は早急に警察へと連絡して決してゲーム機を触ろうとしない

でください』

プリズナー

プレイヤーたちがデスゲームとなったゲーム内で最初に手に入れた称号”束縛されぬ囚人”の所得条件が”ログアウト禁止になる”だったためにプレイヤーたち自身が自分たちをそう呼び始め、いつの間にかメディアでもそう呼ばれる事態になっていた。

どうしようもなく泣き続けている間もどんどんとニュースは進み、絶望的な話ばかりを伝え続ける。

1時間も泣いただろうか、流す水分を失ったからか疲れたからでなくなつたのかも分からないぐらいに消耗した頃になってようやくくまともな思考力が戻ってきた。

わたしはあの責任から逃れるために無様に逃げ去る奴らのようには絶対になりたくない。だからやるべきことだけは果たそう。そう思い、一樹に万全のオペレートを行うために休息をとろうと仮眠室に向かおうとしたとき、更に臨時ニュースが入った。

『み、皆様、臨時ニュースです！ 主犯格と思しき国内の32名の内31名が検挙されました！ うち一人はウィゾールの最高開発責任者である加崎悠仁氏かきゆうひとです！』

衝撃で画面から目が離せなかった。

ゲームの広場にてあそこまで堂々とデスゲームの開催を宣言し、狂気じみた思想を垂れ流した彼がこんな、こんな短時間に検挙されるなど信じられなかった。

画面が報道ステーションから移り変わり警察車両から被疑者たち31人が出てきた。その先頭に立ち、雨のように絶えることなく焚きつけられるフラッシュに目をすがめる人物は間違いなく加崎で、検挙されたことを表す手錠が腕に嵌められている。

しかし、本来であればスーツなどで顔を隠されるだろうに彼らは一人たりとも隠されていない。警察側が隠さないのではないことは無理やり被せようとする彼らの行動を見ればわかる。問題はそれに抵抗してわざわざ素顔を晒すのはかれら容疑者の意志だ。

どうしようもないぐらい嫌な予感がした。

なぜなら……………

犯罪者とは思えぬほどに堂々と先陣を切る加崎の口元は演説の時のように狂気に満ちた、醜い笑顔を浮かべているのだから。

9) 狂気的笑顔と囚人 プリズナー (後書き)

声が綺麗な由水さん視点です。

いいですよ！ 声が綺麗な女の人って。個人的には大好きです。顔も綺麗な人はもつと大好きです。

作者も友人たちに声”は”良い。と言われます。いや、照れるなあ。えっ、作者の顔？ 顔はどうでもいいじゃないですか。人間大事なのは心ですよ。

今回も読んでいただいた皆様方、感想をつけてくださった方、そして小説を評価していただいた方、大変ありがとうございました。いきなり総合評価が10増えて「新車のスタンド能力か！」とか狼狽えてました。現在は小躍りしております。ヒヤッホオオオオオ！

次回も主人公とは違う別視点枠からのお話となります。

全然ゲームの趣旨を遵守してない気がするのは気のせいです。忘れてください。お願いします。

10) そう、決めた。(前書き)

新キャラ視点です。

警部の仕事を詳しく調べきれなかったので文句を言いたいところが多々あるかもしれませんが大目に見てください。申し訳ありません。

10) そう、決めた。

1月1日12時14分。それが悪夢の始まりを告げる電話のベルが警察署でなった時間だったそうだ。

俺こと秋山あきやま新蔵しんぞう警部は三箇日の一日を勤務し、残りの二日はゆっくりできると多少浮かれていながらも、人手の足りない警備の仕事に精を出していた。

酒を飲んで暴れる奴、些細な争いで殴り合いに発展してしまう奴、混雑のどさくさに紛れて悪事を行おうとする奴。世間にとってはめでたい日ほど忙しくなるのは医者も警察も同じである。

無銭飲食をはたらいた悪漢を捕まえ人心地つこうとしたところに目の前の電話が鳴った。

部下に任せようかとも思ったが、”一つの怠惰が墮落への一歩”が信条の俺は怠惰な心を駆逐して受話器を取る。

「はい、中央警察署犯罪対策課の秋山です」

「秋山警部ですか？ 無駄足になると思いますが一応クラースタースタの方

に赴いてもらえませんか？」
受話器の先から聞こえたのは電話の中継ぎを担当する顔なじみならぬ声なじみの人物だった。

「クラースタースタ？ ていつたらあの……なんだ」

「最近話題のゲームを発売した会社ですよ」

「それだ。で、そこで事件でもあったのか？」

彼は大変な時と大変ではないときの声の出し方を心得ている人物で、今回の申し訳なさそうな声だったので詳しく聞いてみた。

「いえ、あちらの方から通報があつて、内容を要約すると7000万人の人たちがゲームに呑み込まれて帰ってこれないみたいなことを言ってるんです」

理解に苦しむ内容だった。

「はあ？ 頭大丈夫なのかその通報者」

「声は必至そのものだったんですけど、正月で頭の緩んだ狂言通報だとは思いますがしつこいのでよろしくお願いします」

「わかった。ま、無駄足であつてほしいもんだな。世の中平和な方が楽しし楽しい」

しかし馬鹿げてやがる。現実と非現実の境をなくそうとするのは勝手だが人様に迷惑をかけるようでは言語道断だと言わざるを得ない。どうせどこかの誰かがクラスター社を騙つての通報だろう。

部署の者たちに内容を説明し、クラスター社まで赴こうと車を運転していたとき、携帯の着信音がなった。画面には自分の恩師ともいふべき現在の警視長の名が映っていた。

俺は慌てて通話ボタンを押した。

「警視長、お久しぶりで」

「新蔵！ お前はクラスター社に先行して聞き込みを開始しろ。増員は順次送り出す！」

ものすごい大音声だ。過去に犯人を取り逃がした時の大目玉以上に威圧的な声だ。

「警視長、お言葉ですがあの通報は狂言の可能性が
」
「馬鹿野郎！ ラジオを付ける！」

思わず身を竦ませながら消していたラジオをつけて垂れ流されるラジオの内容に耳を傾けた。

『現在クラスター社より発売されたウィゾールを使用している方を見つけた場合は速やかに警察に連絡し保護を申し出てください。繰り返します』

なんだ……これ。

いつの間にやら狂言があったという間に広まり、メディアすら騙されてるのか？ だとすればなんとずさんであきれ果てた世界なのだろう。みんな正月気分で気がたるんでいるのではないかと思っただき、

『既に被害者も出ている模様であります。その詳細な点については未だ警察からの発表はありません』

「なっ！」

「わかったか、今回のことは狂言でも法螺でもなんでもねえ！ しかも嫌な感じまでしゃがる。ビシバシ動け！ あと、ちゃんと活も入れとけよ」

「わかりました！」

自分の迂闊さに戒めを刻むために頬を思い切り叩く。

じーん、とした痛みが頬を走り冬の冷たい風がそれを癒す。

気を引き締め、すでに目の前となったクラスター社に臨むこととした。

十 十 十 十 十

職員たちの空気がどことなく違う。大学を出てまだ2桁と勤務年月が経っていないが少なからず磨かれてきた事件を追う職業ゆえの勘が確かな事件性を嗅ぎ取った。

「も、申し訳ありません。警察の方でお間違いないでしょうか」

受付に行くのと即座にそう尋ねられた。その顔はどうしようもないほどに大きな事件を予測させる。無駄足でないことが分かってため息をつきたくなる。しばらくは休めなさそうだなという落胆もそれに混じる。

警察手帳をロビーの客には見えないように見せる。そこからの行動は迅速ですぐさま応接室に通され、10秒もしない間に責任者らしき人物が現れた。

縁がなくツルも細いシンプルなデザインの眼鏡をかけた好青年と言った印象の男だった。

しかし青年然とした顔とは似合わない人生の含蓄をだいぶ含んだ雰囲気を感じる。

「警部の秋山です」

「クラスタージャゲーム開発部最高開発責任者、加崎悠仁です。よろしくお願ひします」

俺は警察手帳を加崎は胸ポケットについたネームプレートを見せながら答えた。

7000万人を閉じ込めたゲームの開発責任者であるため今回の不祥事に焦っているのか額に汗が浮いている。がどこか嘘くさい演技のようにも見えた。

加崎は眼鏡のブリッジを指で押し上げると、椅子に座って状況説明を始めた。

大量の紙束が机に置かれその一枚を指し示す。

「今から30分前にゲームをプレイしていたプレイヤーたちが現実に帰還できなくなったことが判明いたしました」

「それはなぜなのでしょう？」

「警部はテレビゲームをしたことがおありですか？」

「人並みには。VRMMOのことも人並みには知っている」

ゲームはそこそこやる方だ。といっても忙しい職業なので流行に乗れたことは一度もない。一つのゲームを一年かけてクリアすることなどザラである。

いわばゲームは完全に暇つぶし道具だ。

「ならば話は早いです。ゲームの世界でゲームオーバーになった場合、現実世界で眠ったままの肉体に障害が生まれて目覚めるのです。」

それ故にユーザーは現実に帰りたくとも帰れない」

「なぜそのようなことに！」

当然の疑惑を投げかける。目の前にいる男は総責任者だ。知っていてしかるべき立場にいる人間なのだ。

「主要開発陣の大多数が経営者側を謀って画策したというのが社内での噂です」

自分の恥をさらけ出すような苦い顔をして呻くように呟く。しかしこれもまたどこか嘘くさい。

とりあえず今はそれを言及するより先に現状の把握が優先だった。

「その画策した主要開発陣は今どこに？」

「この本社に第一首謀者がいることは分かっています」

「なっ、そいつは今どこに！」

冷静に現状の把握をしている場合などではなかった。

「落ち着いてください。警備の者たちが総出で探しています。出口も完全にみはつているので警察の応援が来るまでもなく抜け出すことはできません」

「……わかりました」

俺が頼まれたのは現状の把握なのだ。だったらそれに務めるといっものが一番だろう。そう思い直し上げた腰を再び下ろす。

「それで？ ウィゾールは外部からの操作が可能なのか？」

「不可能です。あれは独立したネットワークで繋がれているため外

部からのハッキングは受け付けません。本体を仲介してやろうとすれば即座にゲームオーバーとなってしまう設定に変更されていて」「意地の悪い」

むかつくまでの徹底ぶりに悪態をつかざるを得ない。こんな高度なゲームを使って人質を取ろうとするような連中だ。生半可な方法では解決できないだろう。

「唯一干渉できるのは、現在試験的に行っているモニターたちを介してのオペレートのみです。ゲーム内の状況がわかりますので、そちらに行きましょう」

立ち上がるうとしたとき、内ポケットが震えた。バイブレーションに気付いた加崎も出ることを促すように掌を向けたあと、気を利かせてか部屋から出て行ってくれた。おかげで気兼ねなく重要なことも話せる。

「なんででしょうか警視長。現在聞き込みの途中なのですが」「そつちに送った増援がもうすぐ着く、お前が暫定指揮官として選ばれたからやるべきことをやれ、わかったな」

警視長らしい簡潔な物言い。昔から変わらないそれに返す言葉は即座の「ハイ！」でしかありえない。

「よろしい。それと最重要主犯格の顔写真も手に入れた。そちらに送る。そいつを拿捕すれば全てが分かる」

電話を切つてすぐに送られてきた写メールには”件名：最重要主犯格”の文字。それを開けると顔写真と一人の名前があった。それは……

「……………馬鹿な」

添付された写真には、縁がなくツルの細い眼鏡をかけた若々しい青年の顔をしていた加崎の顔が写っている。その下にはそれが誰であるかを示す”加崎悠仁”の4文字

間違いなかった。

「加崎イイイイイイイイイイイイイイ！」

怒りのままに奴が出て行ったドアを叩き開くとそこには肩で息をする女性職員がいた。制服の胸ポケットには彼女が説明のためだけにこされた經理の人間だということを示すネームプレートがあった。

「お、お待ちして申し訳ありませんでした。今から現状の説明を……………どうかなされましたか？」

心配そうに尋ねてくる。

しかし、今の俺はそれに言葉を返せるほど冷静な思考をしていない。

どういうことだ。あいつ自分が主犯だってわかって俺の前に来たのか？ いや、そんな馬鹿な話があったたまるか。どこの世界に犯人自ら刑事に接触して自分がしたことを説明していくなんてことがあるか。きつと、きつと、きつと何か理由が。それこそ安っぽい刑事ドラマみたいに入り組んだ理由が

ぶるぶるぶるぶる

握っていた携帯がまたも振動する。

「メール？ 送り主は っ！」

送り主はまだ登録されていないアドレスだった。が、その最初の文字には”k a z a k i”の6文字。なんで俺のアドレスを知っていると叫びたい気持ちを抑えて早急に開く。

「……………あの、どうかいたしま」

「まで る」

「えっ？」

メール本文に表示された文字はたった2桁にも及ばないたった9文字。

件名：（*ノ、*）プププのプww

本文

『ドッキリ大成功!!』

ふつつつとした怒りが湧き上がる。マグマのように煮えたぎるその怒りが泡となって弾けるたびに奴のセリフが脳裏に蘇る。

『クラスター社ゲーム開発部最高開発責任者、加崎悠仁です』

『主要開発陣の大多数が経営者側を謀って画策したというのが”社内での噂”です』

『本社に第一首謀者がいることは分かっています』

奴は俺とあってから一度として嘘は言っていないのだ。『本社に
第一首謀者がいることは分かっています』だと？ そりゃそうだろ
う。自分が第一首謀者なのだ。知らないわけがない。

奴は今まで追ってきたどの凄惨な事件の犯人よりも性質が悪く、
頭のネジが吹っ飛んだ野郎だった。だから俺は奴と同じ土俵に立つ
ために9文字で返信する。

宛先：加崎悠仁

件名：

本文

『地獄まで追い詰める』

そう、決めた。

10) そう、決めた。(後書き)

お読みいただいた皆様方、ありがとうございます。次回からは主人公視点の物語に戻ります。

誤字修正、矛盾点、気に入らない点、なんでもいいので感想お待ちしております。感想がないと良いのか悪いのかわからなくてちょっと不安になっちゃう今日この頃。

11) 同じ収容所に囚われし親友たち(前書き)

帰ってきた主人公の巻

11) 同じ収容所に囚われし親友たち

『かず ずき』

貪りむたくなるような心地よい感覚をぶち壊すような野太い声はどこから聞こえる。心地よい感覚が微睡まひみの曖昧さで響く声の音源が頭からという事実が気が付くのに一分も要さなかった。

寝起きはかなりいい方で、二度寝などはあまりしたことがない。

『一宮一樹!』

「んっ……うう、なんですか? 秋山警部」

疲れて泥のように眠っていたところを叩き起こされたので少し苛立ち交じりの声で応対してしまった。

由水さんの人に魅せる美しき声を桜と例えるならば、いま頭に響く野太い声はただただ目立つ向日葵のように思える。まあ向日葵の花は好きだけどさ。”花は”ね。

完全に目を覚まし、現状の確認を始める。

広場でのデスクゲーム宣言がされてから1日が経った。

メニューを開くと右斜め上と下にはそれぞれ数字が書かれており、借金総額表示箇所には100、109、589ラスという微妙?に増えてる借金が、日時表示箇所には20XX・1・3・6:12が……あれ3日?

「ぬおおおおおおお！ 更に1日すぎてるっっっっっっっっっっ
っっっっっっっっっっ」

プレイヤーたちの現住所の名簿を丸1日かけて2日の15時に作り終えたところまでは覚えている。しかしそこからの記憶が一切ない。

宿屋のカウンターで寝ていた状況をかんがみるにそのまま寝てしまったのだろう。かけられた毛布は誰かが冬の寒さを考慮してくれたのだろう。

「つまりはなんだ、ぼくは15時間も眠ってしまったのか！」

睡眠は敵である。その行為自体が嫌いなわけではないが、というよりむしろ好きである。しかし規則正しい生活を心がけるために睡眠は長くとも8時間と戒めているのだが、今回はそれを超過してしまったようだ。シヨック！

「お前が寝た後もいろいろしてたオペレーターの姉ちゃんは今も寝てるんだ。ゆっくりしてる」

「……それもそうか」

秋山警部とはプレイヤーたちの住所を聞いている最中に知り合った。

ぼくと由水さんが激務に襲われている中、空気を読まずに現実の部屋に乗り込んできて、オペレートに割り込んで質問してこようとしたのだ。

まあ、警察という身分上、仕方ないのかもしれない。

『お前に頼まれてた件の報告に来た』

「ホントですかっ！」

プレイヤーたちの住所を手渡す際にあることを頼んでいたのだ。見返りとしてこちらでもできる限りのことをしているので彼もこちらの頼みにすぐ頷いてくれたのを覚えている。

『残念ながら、和泉詩菜と佐上源はお前が教えてくれた住居でプリズナーとなっていた』

「……………」

しかし帰ってきた答えは最悪のものだった。

シイナ、源ちゃんのふたりがプリズナーとなっている確率は非常に高いと覚悟していた。しかしそれが確定した事実だと突きつけられた衝撃は自分でも計り知れないものであった。

視界に映る全ての景色が精彩を欠き、時間が止まったように思える。

まるで世界から隔絶された世界で息をしているような、または夢の中で生きているかのような感覚。

『彼女らは俺が直接救助して大病院に無事搬送した。ご両親への連絡も俺がいれといた』

重苦しく伝える声は半分も耳から伝わってこない。

剣道での大会。裂帛の気合と必殺の一閃で全てを薙ぎ倒し、面を外した時の源ちゃんの笑顔。

帰り道、笑いながらウィゾールで絶対にやりたいことを話す源ちゃん
の楽しいげな笑顔。

ハイテクな自分の部屋でなく寒いぼくの部屋で待っていて、帰宅した
ぼくを迎えてくれたときのとびきり可愛いシイナの笑顔。

一緒にケーキを食べた時の恥ずかしそうな笑顔とティラミスをおぼった
時の幸せそうなシイナの笑顔。

試合で負けた時の泣き顔、ゲームを予約できなかった時の俯いた顔、
小さな口から熱の息を吐く苦しい顔、思い通りにいかぬ現実に泣き崩れる
悲壮な顔。

ありとあらゆる表情の源ちゃんとシイナが脳裏をよぎり続ける。

「うっ、 ああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああー！」

空虚だった心に突然の激流が巻き起こり、感情の波に任せて叫び
続ける。全てを吐き出すように。

近くの花瓶を殴り飛ばし、拳をカウンターに叩きつけ、水差しを
叩き割る。

止めようがなかった。いや、どこか他人事のように止めようと思わなかった。

十 十 十 十 十

『落ち着いたか？』

「……………まあ、なんとか」

かなり暴れた。

麻の靴というぼろい装備を履いている足は割れた花瓶の破片を踏んで血だらけ。血のアートを生む画材道具となっていた。

殴り続けたぼくの拳もまた流れる血によって画材道具となり、カウンター周辺を直接殴りつけて前衛芸術としていた。木の床の茶色に乱雑する赤色が中々にアートのだ。絵画にはあまり精通していないが、素人目の感想で言わせてもらうならば、

「きたなっ」

前衛的過ぎて理解できない。こんなの作ろうと思って作った奴がいるならそいつはきつと狂人にちがいない。そうにちがいない。

ふと視界隅のHPバーを見ると半分近くに減っていた。どんだけ自傷行為が大好きなんだ自分。女の子にいじめられるのは大好きだが1人SMにまで手を出すことはないと信じていたんだぞ自分よ。

頭の中でわけのわからないコントらしきものを繰り返して思考を普段のものへと戻していく。

「ぼくが叫んだところで現状が変わらないのを思い知った」

『ちよつとばかり時間がかったが冷静な判断だな』

同情も情けもかけない淡々とした声音。落ち込んでいるぼくを刺激しないためだろう。その気遣いが嬉しかった。ぼくが女だったら抱かれていたかもしれない。

「よく考えたら二人ともぼくよりしっかりしてる人だって気付いた。それにもし、ピンチになってるんだったら、」

源ちゃんほとんどでもなく友人が多い。腕っ節も立つ。性格は気さくで義理堅く、人に好かれるまさに好漢と呼ぶべきに相応しい人物だ。

シイナもだらしなないように見えて自分が使うすべての費用を自分で稼いでいるらしい。おそらく部屋に散乱するPCを使って何かやっているのだろう。

ああいう稼ぎ方は世間に嫌われがちだが、その業界にも多大なる苦労とリスクがあるとぼくは思っている。だからシイナもあっさりゲームオーバーとなるような人物ではない。

「ぼくが早く助けに行けるようにならなくちゃいけない」

運がある者は何もせずとも転機は訪れる。

万分の一、億分の一、兆分の一。

それほどの確率であつてもそれを引き当てる運があれば何もいない。しかしぼくにそんな強運はない。少なくとも幼少時にそんな運があればつらい経験ひとつせずぼくは生きてこれただろう。

ないならば補う力がある。欲しい結果を手繰り寄せ、集め、奪い取る力が。

泣いても変わらなかった。無駄に足掻いても変わらなかった。傍観するだけでは変わらなかった。

千里の道は一步から。

何かを失いたくないのなら、守りたい抜きたいのなら、考え、動き、掴み取るしかない。

『まっ、がんばれや』

『ふっ』と笑う微かな音が聞こえた。きつとニヒルな笑みを浮かべていることだろう。

『ところで和泉詩菜の救助に行ったとき知つたんだが、お前の家は彼女の隣室なんだつてな』

『そうだよ。家賃3、500円という破格を通り越して革命的値段なんだよ。今まで見てきた物件であそこ以上に安いところはなかったね』

『怪しいと思えよ。あそこは』

『あれ？ 秋山警部知ってるの？ 結構マイナーな事件だったらしいけど』

『知ってるも何もあそこの事件は俺が新米の頃に担当したんだ。思

い出したくもない事件だがな』

ため息交じりに答えられる。

なんとという偶然だろうか。いや、世界は狭いなあ。

『よくもまあ、あれだけの惨劇があった部屋に住めるものだな』

それを思い出したのか僅かにえづくような声が聞こえた。

まあ、ぼく霊感ないからなあ。見た方が人生何かと面白そうだからちよつと残念なんだよな。

『とにかく、オペレーター姉ちゃん昨日のごたごたでまだ起きてこねえ。俺もいろいろと走り回らなきゃならねえ。しばらくは一人でがんばれ』

ごたごたという部分を聞き取ったがそれは止めた。警部は今回の事件ではかなり重要なポストに据えられたらしい。それなのにぼくの頼みを聞き届け、自ら救助に乗り出すのはもはや義理堅いとかのレベルを超えている。

だからこれ以上の迷惑はかけたくなかったし、仕事の邪魔もしたくなかった。

「いろいろとありがとうございました警部」

「堅苦しい言い方はやめろ。ガキは奔放な方が接しやすい」

「わかった。今後も頼りにするよ」

「お互い様だ。そっちの情報はお前たちモニターを介さんと分らんからな」

ヘッドセットを置く音が聞こえ、声が聞こえることはなくなった。
ぼくも行動を、第一歩を踏み出そう。

「とりあえずは、掃除かな」

目の前の暴れたあとを片づけて店主に壊したものの謝罪をするこ
とが最初の行動とはなかなか世知辛いゲームである。

十 十 十 十 十

「くそがあああああああああ！」

一宮一樹との会話を終えて部屋から出た瞬間、なんとか押さえて
いた怒りが再び燃焼し、思うままに壁を殴りつける。

警察としては全く褒められた行為ではない。むしろ器物損壊罪に
問われる危険すらある。しかしそれを考慮しても殴らざるをえない
ほどに怒り狂っていた。

「やりやがったな、加崎イ」

怨念のこもった言霊が吐き出される。この言霊が奴に届き、もが
き苦しませることができればどれほど自分の気が晴れるだろうか。
いや、その程度のことではこの憎しみは晴れないだろう。

俺の気が晴れるのは奴を、加崎を刑務所にぶち込むことでしかあ
りえない。

検挙しておき、証拠も揃い、警察総動員をもってしてあっさりと捕まえたのにも関わらず、やすやすと逃がさざるを得ない状況を作り出した加崎から完膚なきまでに全ての障害をはぎ取ることでは、この憎しみは晴らされない。

「見てろよ加崎イ」

11) 同じ収容所に囚われし親友たち(後書き)

祝！ ユニーク千越え！

ばんざーい、ばんざーい！

このまま延々と感嘆符を付けた文章でめでたい言葉をつづつていきたい気分であります。

それもこれも全ては読者の皆様方のおかげです。誠にありがとうございます。今後も皆様のお時間を少しでも有意義にできるよう頑張っていく所存です。

どんなことでもいいので感想をお待ちしています。

12) 遅いスタートと重き枷(前書き)

作者の勝手な都合で非常に申し訳ないのですが、称号に関する説明を変えさせていただきます。それと連動してステータス部分の細かな数字なども弄ることになります。できる限り迅速に修正いたしますのでどうぞよろしくお願いいたします。

12) 遅いスタートと重き枷

とりあえず即座の掃除のおかげで血はきれいに拭き取れた。花瓶などの備品の損害も店主は気前よく許してくれた。おそらく紅音さんが払った3000ラスはそれでも十分お釣りがくるくらいの大金だったのだろう。

そういえば紅音さんの姿が見えない。最後に見たのは住所を聞く作業が中盤に達した時くらいだったか。ということは丸1日会っていないということになる。

「彼女だつてやることがあるだろうしな」

約一億の金を少しでも早く返さねばならないのだ。誰もがのんびりしているわけにはいかないだろう。

由水さんのサポートはまだ得られないが情報収集をしておこう。と、その前に

「1、2、3、4つ。5、6、7、8つ」

ゲームの中で準備体操が意味あるのかわからないが日課をこなしておかないと体が思うように動かないのだ。

変な格好で寝たせいもあり、体が硬く感じる。体を後ろに捻るたびにパキパキと骨が鳴る。

区切りで吐く息が白い蒸気となって宙に溶けて消える。冬の風物

詩のとひとつとも言えるほどの好きな光景だ。

現在のウィゾール内の気温は現実のそれと大差なく、かなり寒いらしい。らしい、というのは麻の服の特典に”暑さ無効”と”寒さ無効”がついているためだ。

初期装備であるがゆえに貧困な防御力しかないが、貧乏人である初期プレイヤーへの配慮はあるようだ。おそらくこれがなかったら凍死するのだろう。おそろしやおそろしや。

どうやら柔軟の効果はあったようで、あらかたの運動を終えた体は筋肉が適度に弛緩し運動前よりも体の隅々が知覚できる。

しかしいつもとは全く違う感覚の体のためコンディションがどれくらいのものなのか判断しづらい。これは慣れるまで結構な時間が必要そうだ。

「ふっ、せいっ、はっ」

幼少のみぎりより嫌々やらされた武術の型をなぞる。

当時は泣きながらしたそれも今では体調を保ついい運動となっている。デメリットとしては辛かった当時の鍛錬の思い出が甦ることだろうか。

ホントに辛かったよな、毎日泣き泣きやらされたことしか思い出せねえよ。

相手の動きを利用して受け流し、無力化する柔術、合気道。自身の力を効率よく使い、的確に狙いをつける中国拳法。その二つのほ

かにも実践的と思われる全ての動作が入り混じり改良された軍隊格闘術とでもいうべきものだ。

嫌々覚えたと言えど、ぼくの人生を彩る経験の一つである。

打つ、流す、回す、交差、捻り、あらゆる動作の型にひと段落ついたところで一息つく。

モンスター狩りを終えた時はそこそ慣れたと思ったのだが、完全に慣れるのは結構な時間がかかりそうだ。

身長こそ現実の体と寸分たがわぬものの、重心の移動感覚、踏み込む足の最適な場所、体が反射的に察知して動く感覚、丹田から力を隔々に送る感覚、多少の運動で心拍が増えて発汗する感覚、何より大切な体の中心線。。

一般生活の範囲でならばたいした問題ではない程度だがアスリートや武道家の世界ではあつてはならない違いが多々ある。

知り尽くしている自分の体が突如として細部を切り替えられたかのような奇妙な体感。

一朝一夕では元に戻れないなという結論を得て今日の日課を終えた。

「おはようございます紅音さん」

後ろを振り返ればバスケットを抱えた紅音さんがいる。

一昨日と変わらぬ目が染まりそうなほどに紅い瞳、防具、マントを身に着けている。その紅を印象的に際立てる漆のように光沢ある

漆黒の髪と防具下の衣服がなんともいい仕事をしている。

防具と言ってもなぜか露出が過剰なそれは男のエロティズムを刺激するものでむき出しになった肩周辺などデザイン担当に思わずお酒をおごりたくなるくらいである。

「すごいわね。気付かれてとは思わなかったわ」

「足音がしたからね。しかも止まってそれを見る余裕があるのは君ぐらいかなって」

「それは余裕ぶつてるともとれるわね」

「ほかの皆よりあるのは確かでしょ」

会ってから全くと言っていいほど微笑みを絶やさず、自信の底を決して明かそうとしない彼女の強さは明らかに一線を画している。

数千にも及ぶプレイヤーの反抗に対して焦ることなく対処し沈静させた。

全員の痛みレベルが引き上げられ、皆が傷みに恐怖するようになったからといってできるようなことではないだろう。

おそらくとんでもないレベル差があるのかとんでもない性能の装備をしているのだろう。その余裕があるからこそ慌てず騒がず余裕を持った行動ができるのだろう。

彼女は肩を軽く竦めるとバスケットの中からパンを取り出して投げたよこした。

「ただのバカじゃないみたいね」

「それほどでも」

絶世の乙女に褒められて顔を緩んだものにながら受け取ったパンを「いただきます」と手を当ててから千切って口に運ぶ。

味はお世辞にも美味しいとは言えない。パサパサしているし発酵の具合も足りてないからかふつくらとした食感がまるでない。しかも結構苦しいし硬い。

「今はそのパン一個の値段が1ラスよ」

非常にわかりやすい価値観である。あんな製作者でもプレイヤーたちのために精一杯のシステムを構築しようとしたところがちゃんと窺える。といっても奴がした所業が許されるわけではないけどさ。

というか借金額がパン1億個分とかシャレにならないレベルである。絶対ブルジョアの感覚である。中世であればそれだけで王国の資金をだいぶ賄える額であろう。

「あなたは出遅れてるのよ」

「出遅れてる？」

なんのことだろうか。

彼女はバスケットからパンをもう一つ取出し齧る。どう控えめに見てぼくに渡されたものとは比べ物にならないようなモチリ感と香ばしさを放つパンだった。ああ、なんとクルミまで入っている。うらやしい。

「そつ、このゲームで生きていくために必要な力、情報を得るための競争にね」

今度はボトルが投げてよこされる。

透明なそれが日の光を反射しつつ、くるくると回転しながら放物線を描く軌道はなかなか目を楽しませてくれる。

あれ？　　そういえば視力が現実のぼくと同じぐらいに戻ってる。動体視力もまるで問題がない。なんでだ？

疑問を抱きながらもキャッチして軽く嵌められたコルクキャップを外す。中から漏れるのはワインの芳醇な香りなどではなくチャポンという水の音だけ。ボトルを傾け口にすると透明な見た目通りにただの水だった。しかし井戸水独特の清々しい味わいがある。

「聡い人たちは1日目からすでにそれをやってるわ。わたしが見た感じでは最高でもLv.7に達してる人がいるわね」

Lv.7ということはぼくの2倍チョイ上と言ったところか。：
あれ？　2倍差って大きくね？

SLGなどではレベル差が2もあると結構な不利を強いられた経験しかない。

「あなたはこれから辛い目に合うのだから特に頑張らなくてはいけないのにな」

「辛い目？」

「だってあなたにはオペレーターがついてることをみんなが知ってるのよ？　だれもが競争相手である現状でたった一人絶大なるアドバンテージを得ているあなたは格好の標的。だれもパーティーにいれようとは思わないでしょうし、仲をよくしようとも思わないで

しょうね」

そういうことですか。

たしかに絶望的な未来予想である。そして高確率で当たるだろう未来だ。

それを鑑みるにぼくは誰よりも早く情報収集とレベルアップをこなさねばならなかったのだ。のんきに寝ている場合ではなかったのだ。失敗したなあ。

と、さんざん後悔したところで現状が変わるはずもない。それにオペレーターがついていることを明かしたことに後悔はない。あれはしなければならぬ行為だったのだ。だから今すぐ動くことにした。

残ったパンを強引に噛み砕いて水で胃に流し込む。

「ごちそうさまでした。じゃあぼくは情報収集に行ってくるよ。食事ありがとう」

「最初に広場の”結晶屋”に行きなさい」

その名前には見覚えがあった。たしか加崎がデスゲームを宣言した際にポップされたテキストに書かれていたはず。

「とあるアイテムを売ってるから借金してでも買いなさい。間違はなくこのゲームでキーを握るアイテムよ」

決して自分の底を見せない喋り方を幾分か削った声だった。おそらく厚意での言葉であろう。

なぜ彼女がぼくに食事を用意してくれたり助言してくれたりと気遣ってくれるのか不思議ではあったが詮索は無粋だと思えた。

「ありがとう」

だからそれだけを返し広場への道を急いだ。

「がんばって」

背後からかけられたその小さな一言が嬉しかった。

12) 遅いスタートと重き枷(後書き)

称号の件に関してなのですが、詳しく切り詰めていくと「あれ？ 攻撃力とHPが同じになっちゃう組み合わせがあるぞ」とか「あれ？ MPがHPの五倍ぐらいある奴がでちやうぞ」とかいろいろと問題でまくりでしたので、称号はレベルアップの要素から除外し、一種の装備品として扱うことにしました。

作者の向う見ずな設定で誠に申し訳ありませんでした。

早急に訂正に入りますので今後ともウィゾールをよろしくお願ひします。

13) 情報収集

広場には多種多様な人々がいた。その感想は最初にここへ降り立った時と全く変わらない。変わったのは広場に集まった人々の様子だ。

露天飲食店で暗く頂垂れる者、ヤル気に目を輝かせ物を買おうとしている者、泰然自若とした態度で思考にふけている者。活気に満ち溢れていた広場にプレイヤーたちの複雑な心境が入り混じっていた。

といってもあの狂気の宣告からこれほどに落ち着いているならば上々希望はあるように思う。誰もが俯き無気力に過ごすよりは謀略、無謀が横行する生活の方が圧倒的に華があり活気があるだろう。

とにかく”結晶屋”なる場所を探そうとしたところ見つかるまでもなかった。

プレイヤーたちとは違う明るい活気を放つ露天商においても一際忙しそうな店の看板が探している所の名と同じだったのだ。

既に暗い顔をした十数名が並んでいて儲かっでは良そうだがなにやら怪しげな雰囲気がプンプンする。

とにかく情報収集として最後尾に並び、前に並ぶローブを羽織った中肉中背のお兄さん 頭上に浮かぶ名前はZAWAZAWAに話しかけてみた。

「なあ、ここでなに売ってるの？」

「ああ？ 店の名前見りゃわかん……ちっ」

顔を見た瞬間、これでもか言うぐらい堂に入った舌打ちをされた。できることなら舌打ちの見本として辞書や動画共有サイトに投稿したいぐらい見事だった。

なに？ そこまでぼくって嫌われてるの？ いや、それともぼくの愛くるしい顔に思わず賛辞を贈ろうとしたけど、言葉が出てこない自分の語彙力の無さに舌打ちしなくなったのか。そうか後者に違いない。

「自慢のオペレーターに訊きゃあいいじゃねえか」

不正解。どうやら前者だったようだ。

しかしこんなことでめげてたまるかと再度話しかけた。

「いまいないんだって。だから頼むよ、ねっ、ねっ」

手を合わせてねだる。経験則だが彼は強引にねだられると渋りながらも教えてくれるタイプの人間に見える。知識をひけらかすようなタイプではないが教えたがらないというわけでもない。絶妙な中間に位置する人間だ。

この予想はあたった。強引な頼みように相手もうっとうしくなったのか舌打ちをしながらも折れてくれた。

「どうやら殺されても一度だけ復活できるアイテムを売ってくれるらしい」

「フェニックス 尾とか世界樹 葉とかみたいなの？」

「似てるが復活時はこの広場に戻されるらしい」

らしい、らしいと断定でない言葉が続く。それが情報に確信が持てないから来るものなのか、それともそういう話し方を狙っているのかどっちなのだろう。

とにかく今は気にすべきところではないか。

つまりは死んだときの保険なのだろう。何が起こるか分からないモンスターとの戦闘で運悪く殺されたとしてもそのアイテムを持ってさえいればゲームオーバーにはならないのだ。

あれ？　なんかあの悪魔のような男、加崎悠仁が設定したにはえらく緩いように思えるのはほくだけだろうか。だって6,000万弱も人がいるのだ。このゲームがウィードリー並に鬼ゲーだったとしても結構な人数が残りそうな気がする。

しかもあれと違って今回は6人どころか6,000万弱全員が協力してゲームを進めることとて理想としては可能なのだ。それともなにか狙いがあるのだろうか……

疑問が頭を占拠しようとするが、考察は後でもできることだと考えを改め、現在最も気になることを聞くことにした。

「で、いくらなの？」

復活アイテムと言えばそこそこ高いの定石である。

ジャンジャカ買えたり拾えたりするのは中盤になってからであって、金のない序盤などは教会とかで復活させてもらうのがセオリー

だ。

自慢ではないが所持金は21ラスしかない。このゲームは定番だが、モンスターを殺したときには自動的にお金が手に入る。当然モンスターを何匹も殺したから一時期200ラスを超えた時もあるのだが、熊に連続で噛殺！ 圧殺！ 轢殺！ されたばかりは見る間に金額を半分にされていった。とどめに広場でレッズにやられて現在に至る。

パン21個分。中学生のお小遣い並みの全所持金である。といっても節約料理を極めたばかりであれば現実で3週間は食いつなげるね。エッヘン。

たとえばタダでもらえる豚リードとか食パンの耳とかを使って、え？ 健康に悪い？ うん、人間どこかに妥協はいるんだよ。

「1万、らしい」

「……………WHAT？」

思わず聞こえてきた数に耳に手を当てて聞き返す。動揺すると英語で返すのは癖である。

「1万」

もう一度聞いてようやく得心が言った。

「あっ、ジンバブエドルか！ 驚いちゃったよぼく。だって所持金21ラスしかなくてさー、ははっ」

「1万”ラス”だ」

「はは……………は……………HAAAAAAAAA!？」

「ただけ高いんだよ。悪徳とか法外とかいう次元超えてるよ。」

なに、これはプレイヤーの巧みな値引き交渉とかを期待して作られた値段設定なのか。それともショーウィンドウ越しにキラキラした目で見てればトランプペット少年よろしく、タダでいただけるんですか。

「うっせえ声上がんなガキ」

鬱陶しげにため息をつかれる。こつも邪険にされるのはなかなかなか新鮮である。相手が美人な女の子であればもつと新鮮な気持ちで受け止められただろう。

「借金で買えるらしい」

「借金？ …… ああ、なるほど」

つまりは借金を増やす代わりに大抵の物は序盤であつても購入可能ということか。

もし無計画に買いすぎるようであれば、借金の利子によつてあつという間に2億ラスを超えてゲームオーバーとなつてしまう。が、これを有効に使うことでアイテムの入手難度を緩くして他者よりリードすることも可能。というわけか。

「やらしいシステムである。」

「ありがとう、江沢さん」

礼を言つと気持ち悪いものを見るような目で見られた。

「なんでお前、俺の名前を知ってる」

「いや、名前と住所を教えてもらったじゃん」

プレイヤーたちの住所を聞くと同時に名前も全員から聞いていたので彼のことはちゃんと覚えていた。

「たしか最後から3番目ぐらいのところに並んでたよね」
「……………」

絶句していた。

ふふ、これでも人の名前と顔を覚えるのは得意中の得意というか、ゲームで言うスキルに近い領域で習得している。どれぐらいの実用性かというと、普段の会話で歴史上の人物と名前が被る人がいるととっさの反応に困っちゃったりすることもあるぐらいである。

そのおかげで日本史とか世界史とかの成績はほぼトップランクを誇っている。さすがぼく、かつこいい。

まあ、数学とか生物化学とか政治経済とかその他の科目で使えることはあんまりないけどね。

江沢さんはまた見事な舌打ちをすると前を向いて黙りこくってしまった。

気難しい人、というよりは人との関わりをあまり求めないタイプの人ののだろうか。

とりあえずぼくも情報収集にいそしまなければならぬので話し

かけないようにした。

さて、情報収集に必要なのはなにか。

それは目、耳、足。体に入らないものを入れるならば最大の切り札はコネだけだね。

ぼくはこれでも目や耳など体の各部位は結構優秀な能力を保持してる。

どれぐらいすごいかというと数十メートル先で起きたパンチラを最新鋭デジカメもびっくりの画素数で脳内に永久保存できる。そして騒がしい雑踏の中であっても女性の困り声の呟きを聞き分けることができる。鼻はすれ違う女性の香水の匂いを敏感にかぎ分けられる。

唯一舌だけ鈍いが、それは将来、伴侶が作ってくれた料理がどんなものであっても心底おいしいと言えるためにぼくの体が進化したに違いない。さすがぼく、おっとこまえである。

「ちっ」

あまりの男前さにぼくが腕を振り回していたのが江沢さんに見られて舌打ちされた。さすがに目障りだったようだ。自重しよう。

とにかく、自慢の耳に神経の全てを向ける。

目と同じく耳も現実のそれと変わらぬ聴力を維持しているようで違和感はない。

幾千もの靴底が石床を叩く音、景気のいい店主の客引きの声、談笑する男たちの声、戯れる子供たちの高い声、行儀悪く木のジョッキで机を叩く音、金属メタルが石床を跳ねる心地よい音、小声で交わされる声。全てが聞こえてくる。

「馬鹿がさっそくキラーベアーに殺されてやがったが街で復活してた。やっぱり復活結晶がありゃ死なねえみたいだぜ」

「NPCの店でも商品が売り切れる。急いで買った方がいい」

「パーティーは6人まで組めるんだ。一緒に行こうぜ」

「鉄の剣が在庫も豊富にあって便利だ」

「ポーシヨン飲んでもすぐに回復しねえじゃねえか！」

「結晶屋で売ってる回復結晶は即時回復だぞ」

「武器スキル」は上げるスキルの武器を使える職業でその武器を使用しないと上がらないらしいわよ。それと”生産系スキル”はそれぞれの店で手に入ったわよ」

「キル熊が強すぎる。Lv.6のやつらが三人がかりでかかったのに一瞬で殺されてた」

「知ってるか、この世界でやれるんだぜ。お前もやってみりゃ分かるって」

「町だどこからでも酒場の掲示板に書き込みと閲覧ができるみたいよ。あと種族がヒューマンだとスキルで外からでもできるみたい」

「ドラグーンのスータス上昇率が桁違いすぎる。HP、STR、VIT、MNDの上がり方がマジパネエ」

「町の南に”深淵のダンジョン”があつたが、あれはヤバい。弱いやつばかりかと思つたら熊よりやべえ奴が出るぞ」

「小切手はレベルによって使える額とか使用頻度とかが決まってやがる。くそがつ、これじゃ雑魚から巻き上げられねえじゃねえか」

「モンスターが落とすアイテムで”の誇り”ってやつはかなり貴重らしいよ。なんでもテイマー系はそれがないと意味がないって」「道具屋で売ってる”目薬”と”耳薬”である程度まで視力と聴力を増やせるみたいだ」

「レコードでゲームオーバーになった奴の名前が見れるぜ。もう100人ぐらい死んでやがる。ザマア」

「NPCの言動が有限じゃなくなってる。まるで生きてるみたいだ。きもちわりい」

「あんだ、並んでんじゃないのかい」

問いかける声のおかげで集中していた意識が五感全てに向けられ、閉じていた目を開けた。

目の前にいたはずの江沢さんの姿はすでになく、あるのは色とりどりの美しい結晶が並ぶ店。そこには杖を握った30代半ばぐらいの女性が佇んでいた。頭上にある名前はカナだ。

「並んでます並んでます。すみません集中してたもんで」

ぼくの答えに鼻でため息をつくようにしてから手で肩を揉み始めた。

「まったく、いきなり冒険者が数千人も集まったかと思えば復活結晶を買っていくだなんて腰抜けばかりだね」

「ふつうは買わないの？」

「金がないのよ。買えるのは有名な冒険者ぐらいよ。なににあんたらときたら誰が出資してるんだか小切手で買っていつちやってまあ情けない」

小切手？　なんだそのセレブ専用夢アイテムは。アイテム欄にそんなのあったかな。

メニューを開いてアイテム欄を見てみると、……あった。

重要アイテムのインデックスを開いたらそこにちゃんとあった。説明文には「借金を増やす代わりにそれと同額の買い物ができると書いてある。ちなみに”譲渡不可””ドロップ・盗む無効””制限有り”と書かれている。

「どうせあんたも小切手で復活結晶だろ。はやく出しな」

頭で念じるとあっさりと白い小切手の容姿が右手に収まる。

真っ白なその紙の真ん中の空白には支払額、その下に氏名を書くのだろう。

たったそれだけのことで死亡によるゲームオーバーの危険性を躲せるのだ。安い買い物である。だが……

「ぼくには、できない……っ」
「は？」

借金は本当に嫌いなのだ。

それでもぼくは顔が広い。広い故にいろいろな人の人生を見てきた。

その中で幾人かが人生を投げ出したこともあった。大半の理由は

借金だ。

自身が責任をもつて借りたのにもかかわらず返却を放棄し人生すらも投げ出す。そうしたくなる心情と返却できない理由も十分に理解はできるのだが納得はできない。

だから借金というものを絶対にしないと心に決めていたばかりとしては帰還借金をかぶせられた現時点ですら唾を吐きたい気分なのに、更にそれを上乘せするなどできようはずがない。

だけどなあ、命あつての物種だしなあ。それでも自らの信条を曲げることはできな　　うう、くう……はっ！　　名案が浮かんだっ！

「お姉さん。まけにまけてください！」

「アホかあんたは」

駄目だった。いや、あきらめるなほく。まだまだ値引き交渉は始まったばかりだ。

「お姉さんってホント可愛らしいですよね！」

「白々しいわ！」

ものすごく怒鳴られた。理由がわからないのでとりあえず無視し続ける。

「肌に出てきた皺を見事に隠しながらも化粧していることを感じさせないそのテク。顔を表面上だけでも美しく整えておきたいといういじらしい乙女心。そして年甲斐もなく魔女っ娘ローブを身に着ける少女のような心」

「ちよっと待ってなさい！　大魔法であんたを焼き殺してあげるか

ら三分待つてなさい！」

言葉を発するたびに顔が烈火のごとく苛立っていくのは気のせいだろう。

「なによりその手です」

杖を握って青い魔法陣みたいなものを宙に展開させた彼女の右手を握って掌を開ける。

「あっ！」

そこには幾筋ものあかぎれが有り、ささくれた肌が余計に痛々しい。

あかぎれは紅い皮膚の下を露出させており、中指の第二関節付近にあるそれは一際大きく、曲げるたびに痛いだろう。

カルさんが手を離させようと暴れる。

「女性の手は不用意に触るもんじゃ」

「誠実に一生懸命働く人でなければこんな手にはなりません。そういう働きをする人は得てして清らかな心の持ち主です。辛いこと、大切なことを知っているが故に他者を労るような優しい心の持ち主になる。ぼくはそういう人が好みです」

そう言つとカルさんは先までの烈火の如き赤さとは違う乙女が恥じらうような赤色で顔を染めて動きを止めた。

そして先までの直球的な口ぶりとは似ても似つかぬもごついた口

調で話す。

よし、あと一步だ！

「そ、そんな、わたしには愛する夫がい、いるのよ。それにわたし
たち親と子ぐらい歳の差もあるし」

「だから値引きしてください！」

「……………」

あれ？ なんでだろう。ものすごく冷たい視線で睨まれている。
なにか失言でもしたのだろうか。

「ふんっ！」

「ぐはっ！」

杖のフルスイングがどてっばらにぶち込まれた。痛い。

当たった瞬間にHPが半分以上削れた。これで会心の一撃でも出
てたらゲームオーバーだったよ。

「なかなかあなたは天然らしいわね」

「？ まあ人工物じゃないけど」

「……………ぷっ、はは、あははははは！」

意味が分からなかったのとおりあえず思ったことを返したのだが、
なにやらツボに入ったらしい。おかしそくに顔を笑みにして大声で
笑っている。

「あー、あなたは笑わかしてくれるね」

「どういたしまして」

ふふ、今日もまた褒められた。さすがぼくである。誰からも褒められるいい子ちゃんの鏡だ。

ぼくが照れる姿がよほど可愛らしいのかカルさんはまたも笑う。

「負けたよ負けた。値引きしてあげるわよ。えーと名前は一樹ね。覚えとくわ」

「ありがとうございます！」

諦めぬ精神がようやく実を結んだ瞬間だった。超嬉しい。これで借金せずに済む。

わっくわっくしているぼくに向けてカルさんが右手を上げると「インベストゲイション」と唱えた。

すると右手から青い光がほとばしり僕の体をなめまわすように駆けずり回っていった。

「ふーん。レベルは3ね」

「レベルって関係あるの？」

おそらく今のはレベルを調べる魔法なんだろう。といってもアイテムを売るのにいちいち相手のレベルを調べる意味が分からない。

「復活結晶は売る相手のLv×10000ラスって相場が決まっているのよ。まあ、今回だけはサービスしたげるから安心なさい。貧乏人君」

非常にありがたいお言葉だが最後の言葉はいらなと思う。

カルさんだからよかったものを自分の好きな子に言われでもしたら「この甲斐性なしが！」と罵られているように思ってしまう。さすがにそれはぼくでも精神的ダメージがでかいだろう。

「それじゃあ出血大サービスということで半額の半額、7500ラ
スで譲ってあげるわ。さ、出しなさい」

「……………21ラスしかないんだけど」

非常に言い出しづらかった。事実、言った瞬間に般若のような形
相に変貌した彼女の顔はできれば一生見たくないくらい怖かった。

だって豹変したんだもん。カメレオンの擬態なんて目じゃないぐ
らいの変化速度だったよ。髪なんか焔の如く揺らいでるし。

とりあえずこれは何か言わねばと思い、先ほど情報収集している
際に聞いたアイテムを差し出した。

「これで一先ずお怒りをお沈めくださいませ！」

大雨で押し寄せる川の氾濫を止めてもらおうと神に捧げものをす
る農民のように腰を低くしてアイテムの全てを差し出した。

「あら」とカルさんが言ったかと思うと差し出したアイテムの一つ
である白い玉”ゴブリンの誇り”を手に取って驚いた。

「へえ、あなた運がいいのね。これだけでも5000ラスの価値が
あるわよ」

そのほか十数点に及ぶアイテムを確認するように見ていく。

「なんだ。ギリギリ7500あるじゃない。もく、あやうくキレてヤっちゃうところだったわよ」

その”ヤっちゃう”の”ヤ”が”殺”なのか”犯”なのか非常に気になる場所だった。どっちでも全力で抵抗することには変わらないけど。

「じゃあ借金しないでOK？」

「OK、OK。それじゃ、はい」

戸棚に置かれていた結晶を量の手で抱えて手渡される。

復活結晶。手に余る程度の大きさの透明なクリスタル。しかしただのそれと違うのは中心から放たれる淡い紅の輝きだ。その輝きは命の代替物としての威厳を見せつけるように美しい。粗く削られた宝石のような形をしているにもかかわらず目を引き寄せてしかたない。

それをしばし見つめたあとインベントリにしまいメニューで確認する。

【復活結晶】 10

分類：回復クリスタル

効果：死亡した場合、結晶の奇跡の御業によって拠点で復活し、碎ける。

特殊：譲渡不可、ドロップ・盗む無効、購入額は購入者のLv×10000、重複所持不可

備考：中央国に存在する神の御業により復活できる。

1か月に一度すべての町へと届けられる。

「ごちゃごちゃといろいろ入っていたアイテム欄が一扫された一っだけとなった。綺麗好きとしては何とも良い状況だ。」

「そういえばアンタ、武器を何にも持ってないじゃない」

「フフツ、漢らしいでしょう」

「カッコつけて死ぬのはバカのことだよ」

「うぐっ」

あまりに正論過ぎてぐうの音も出ない。

だってしょうがないじゃないか。木の枝は使えないし、木蓋は落としてちゃったし、ゴブリンを倒したら棍棒も砕け散っちゃうしで装備を手に入れる機会がなかったんだ。金も今完全に素寒貧だし。

「良かったらだけど旦那の昔の装備を持ってきな」

「いいですか！」

「ああ、いちおう手入れはしてあるが如何せん古くてね。だけど無いよりやましだろ？」

もちろんである。

素手でモンスターと戦おうとするなどバカを通り越して愚か者のことである。まったく命は粗末にするもんじゃないというのに、嘆かわしい。

店の奥から持ってきてくれた装備は少し年期を感じさせる鉄の剣と皮の籠手だった。

剣はシンプルな両刃で刀身50センチほどだ。持ち手の下が丸く膨らんでいてすっぱ抜けにくくなっている。片手で存分に振るえる重さと長さであるため扱いやすそうだ。

ローマ帝国時代の剣闘士や兵隊が似たような剣を使っていたはず。たしか名前は……

【グラディウス】 2

補正：STR+7 , DEX+7

特殊：なし

備考：片手でも扱いやすい剣。その昔、剣奴隷たちに好まれた武器
weight:15

装備しようと思った瞬間、手からグラディウスが消え、腰の後ろに鞘が付けられる。その中に剣が収まっていた。次いで腕に籠手が付けられた。

防御力はあまり高くなさそうだが命を守る防具が一つ身に付いたことがとても頼もしく思える。

皮の籠手は手の甲まで覆ってくれるものなので指先の細かい作業の邪魔にはならなさそうだ。うん、頼もしい。

「あとはもう少しマシな服でも着れば冒険者としても様になるってもんだよ」

「それはもうチヨイお金がたまってからで」

プレイヤーである6000万弱の者たちで現在まともな装備をしている者なんてほとんどいないだろう。だからこの装備でも十分すぎるくらいだ。

「何から何までありがとうございました」

「いいんだよ。昨日から夜通し目が死んでる輩ども相手に商売した疲れがアンタを相手にして吹っ飛んだよ。お金さえあれば結晶を売ってあげるから、いつでもいらっしやい」

いい人と知り合えた出会いに感謝しながら結晶屋を去った。

さあ、情報収集もまだ済んだとは言い辛いけど、トップランナーたちとレベル差が開きすぎるのはあまりにマズイ。

展開によっては弱者は虐げられ、強者が独裁を敷くかもしれない。もしそうなったとき、最低限抵抗できるだけの力を持つておいた方がいい。無茶しない程度にレベルを上げておかねば。

ああ、由水さん。早くオペレートに戻ってきてくれないかなあ。

荒んだ心を潤してくれる彼女の声が待ち遠しかった。

13) 情報収集(後書き)

ようやくここまでたどり着けました。もうそろそろで主人公の面目躍如なシーンがやってまいります。

これでようやくタダの変態主人王から脱却できます。変態はないけどね。

今回も読んでいただいた皆様方、どうもありがとうございます。

PVも10000を超えて作者は狂喜乱舞しております。これからもウィゾールをよろしく願います。

10/24 グラディウスの刀身を70 50センチに変更しました。

刀身70センチってとてもではないが腰裏に結び付けられる長さじゃない。

14 待ちわびた声と目標（前書き）

最近になってようやくエディターの進化を発揮できるようになってきた。こんなに便利だったんだなあ。と感心する毎日。

14) 待ちわびた声と目標

「スマアアアアシュ！」

ギアアアアアツ！

とあるゲームであれば「会心の一撃！」のテキストが表示されるだろう見事な角度で踵がゴブリンのこめかみに直撃する。

たぶん今のはリアルだったら人間でも殺せるだろう。

斜め上から叩き落とした踵がゴブリンに当たっても勢いを落とすことなく地へと吸い込まれ、下に倒れたゴブリンの頭を踏み砕く前に透明になって砕け散った。

【ゴブリンの宝物】 1

「よっしゃ、これで100ラスゲットだぜ」

ゴブリンが落とすアイテムの中でも【ゴブリンの誇り】に次いで換金額の高いアイテムだ。久しぶりの登場だったので思わずガッツポーズ。

それをインベントリにしまい、右手を前に掲げて「エネミーサーチ」と呟く。

視界の隅でMPバーが2減ったことを確認しながら頭にフワッと描かれた周辺状況に思考を寄せる。

開けた草原地帯なので目を凝らせば肉眼でも確認できるのだが、こちらの方が正確に相手の状況がわかるし、モンスターは唐突にポップすることがあるのでこちらの方が便利なのだ。

人が多い。半径100メートルほどの範囲でありながら周辺にはすでに5人も人がいる。

おかげでモンスターを発見するのも一苦勞である。しかもプレイヤーたちの心もだいぶ荒んでいるのか、ぼくが遭遇した敵を横取りされたことも1度や2度ではない。まあ気にしないことにしたけど。

現在のレベルは1上がって4。2時間粘ってこれだけしか上がらないのだからかなり非効率である。

しかし文句を言うわけにもいかない。この非効率さのおかげでぼくは安全に戦えるのだから。

「た、たすつ、ぎゃああアアアアアアアアア！」

噂をすれば影。

ぼくが一人だと安全にレベル上げをできない原因がまたも現れ、一つの命を刈り取った。

「き、キラーベアだ！ 逃げろッ！」 「キャアアア！」

そう、ぼくが少なくとも4度は殺されたモンスター、キラーベアだ。

コイツは数人が協力して戦っても倒せないほどに強く、一人の敵

を殺すとその死体を森へと持ち帰る習性がある。

復活結晶を買わなかったのだから人物がぐちゃぐちゃな死体となり血で地面を染めながらひきづられていく姿はかなり衝撃的だ。

そして復活結晶を持っている人物が殺された場合、死体は広場に転送されるので新たな獲物を求めてさまよいだすのだ。故に殺人現場の近くに居合わせると次のターゲットとして選ばれる。

だから奴を発見したら皆全力で逃走するのだがボーナスの半分をSPDに振っているほうが逃走劇の最後尾になることはない。

もしイの一番にターゲットとして見初められたとしても全力で逃走すれば誰かに奴をなすりつけられる段階までSPDが上がっているからだ。

実際、狙わずして一回それをやってしまった。犠牲になったのはエルフの少年だった。

ゴブリンアーチャーを相手に手間取っていたエルフの少年は周囲への注意を欠き、周りが熊の接近から逃げていたの知らなかった。

熊に追われるべくも必死だった。ただ一直線に逃げるしかできなかったのだ。逃走ルートを考えてる暇などなかった。結果、モンスターをなすりつけることになってしまった。

振り返らず走ったその背後から聞こえた負の絶叫が忘れられない。

しかしそれで悩むようなことはない。ここで固まって戦っている人たち全員が熊を他人になすりつけることを狙って固まっている

に決まっているのだから。

そう、この集団は鱒が天敵からの生存率を高めるために群れるのと同じ意味を持った承諾なき群れなのだ。

現在、熊に襲われている誰かがいるのは100メートルほど離れた地点だ。

とぼつちりを受けないように周囲を警戒しながら幾ばくか移動する。

「邪魔、だっ」

移動途中に現れたゴブリンをグラディウスの一刀で息を断つ。

ギイイ！

クリティカルが出たことを表す白い光がゴブリンの傷口を抉る。

短い断末魔を耳にしながら一瞬にして碎け散る。ドロップアイテムを即座に回収して立ち去る。

ウィゾールでのダメージは相手の部位のどこを狙うかで変わってくるようだ。急所を狙えばそれだけダメージが増える。そして何%かの確率で部位関係なくダメージが増えるクリティカルが出るようだ。

数百メートルほど離れ、視界を広くとる。

視界に映るのは数人のキャラクターたちのみ。どうやらキラーベ

アーをまけたようだ。

その事実にあ堵のため息をつこうとしたとき、頭に物音が響き、恋しかった声が聞こえた。

『大丈夫ですか一樹』

「うん、なんとか無事に生きてるよ。それよりも由水さんの方こそ大丈夫なの。かなり大変だって聞いてるけど」

彼女の声は焦ってこそいなものの、ぼくを心配してくれてる意思がありありと伝わった。つい最近知り合っただけなのにここまで心配してくれるのはひとえに彼女の性格ゆえだろう。

『大丈夫、とはとても言えませんが混乱もしばらくすれば収まります。ですから安心してください』

ゆっくりと相手に言い聞かせるように伝えられる言葉。しかし、そこはかとなく嘘の響きがあった。

おそらく外での混乱の影響は大きく、立ち直るのに多大なる労力と時間を要するのだろう。もしかしたら立て直すこと自体が不可能なのかもしれない。

心配させじとああ言ったのだろう。

「わかった。じゃあオペレーターお願いします」

「お任せください」

だから受け止めておく。言われたことをそのままに。

「ぼくが外のことを心配したところでもできない。だったら一刻も早くここを出ることに徹するべきだ。」

会話中でも関係なく湧くモンスターを「美女との戯れ中にフザケンナ！」と心で毒づきながら倒し、とりあえずの現状と情報収集で知り得た全てを彼女に伝える。

「把握しました。次はわたしの番ですね」

一つ目に伝えられたのはゲームオーバーになった際の症状。

「どうやら脳に障害を引き起こさせ、新生児と大差ない思考しかできない状態にされるらしい。えげつない。」

二つ目はゲームに関するすべてのデータ情報を記録した全媒体の紛失について。

加崎たちゲーム主要製作人たちはデスゲーム開始前にイベント、アイテム、モンスター、ありとあらゆるデータを記録した全ての媒体を抹消していったのだ。

「これは彼女たちクラスター社ですら今後のゲームの展開がわからないことを示している。」

「闇の中を手探りで進むようなことになってしまい申し訳ありません。わたしたちオペレーターの最大利点が消え失せてしまいました」

「呟くその声は暗い。だが、ぼくとしてはそんなことは加崎がまかり通すと思っていなかったのでショックの一つもない。」

「しょうがないよ。それにぼくは説明書も攻略本も読まずにゲームする派だから問題ナッシング！」

「……ありがとうございます」

三つ目はぼくたち30名のモニターたちについて。

「警察側から正式にあなた方への捜査協力申請が下りました。一応は任意となっています」

プレイヤーを帰還させるために警察が判断した行動をとってもらえるプレイヤーが必要なのだろう。すでに海外で数名のモニターが警察の指揮下に入っているそうだ。しかしそれは……

「由水さんには悪いけど断っておいてくれない」

「大丈夫です。すでに断っておきました」

驚きを禁じ得なかった。彼女の立場としては多くのプレイヤーたちを救うための選択肢を選ばざるをえないはずなのに。

「警察に協力するということは危険が蔓延る前線で矢面に立つことを意味します。わたしはそれを一樹に強いれるほど冷酷な人間ではありませんよ」

そうなのだ。皆が帰還できるように先導するということは自らが他よりも早く多く情報を収集し、力を蓄えねばならない。

そして目立つことをするということは恨みも買いやすい。

広場で加崎が言っていた『人を呪わば穴二つ』の言葉の通り、恨みを買えばプレイヤーたちからの制裁は避けられないだろう。

「一樹はわたしが全力でサポートします。ですから安心してください」

「うん。頼もしいよ」

それから数分後、

「まずはキラーベアーを倒しましょう」

「無茶言っなっ！」

突然言われたその言葉に反論を力強く叫んだ。

奴には何度も殺されたのだ。正直言ってレベルが10、20になっても一人では殺せる気がしない。それをレベル4で殺せというのはいくらなんでも無茶ぶりすぎる。

「確かに今のあなたとキラーベアーとでは蟻と象ぐらい力の差があります」

「ぐっ、なんかそう例えられると悔しいというか」

「ですが勝てないわけではありません」

その時の由水さんの声は暗いものでも、明るいものでもなかった。ただただ冷静で先を見据えた、まるで軍師が策を思いついた時のような深みある声だった。

「得てして、効率の良い倒しかたとはヤラシイものなのですよ」

14) 待ちわびた声と目標(後書き)

文体が落ち着きません。何分初めての作品なのであっちへフラフラこっちへふらふらしております。なにとぞご容赦くださいませ。

PS) 所謂いえばジャンルのSFってScience Fictionの略なんですね。友人に聞かれた時、自信満々にScience Fantasyって言っちゃいました。

ごめんなさいN君。今度ジューズおごるから許して。

15 (熊狩りの始まり) (前書き)

トラウマを植え付けてくれたあの憎き熊の討伐に向かいます。

15) 熊狩りの始まり

NAME ; 一樹
LV ; 4
JOB ; 盗賊
TITLE ; 束縛されぬ囚人
BADST ; Pain?
STATUS
体力 HP 110 / 110 武器 ; 「剣」グラ
デウス 魔力 MP 92 / 92 防具 ; 「胴」麻の
服 (DEF + 3) 攻撃力 STR 19 (+7) 「腕」皮
の籠手 (DEF + 10) 持久力 VIT 25 「足」麻
の靴 (DEF + 3) 敏捷 SPD 40 (+2)
知力 INT 14
精神 MND 22
器用 DEX 28 (+12)
運 LUC 41 (+5)
ボーナス 0

これが現在のステータスだ。うむ、我ながら素晴らしいステータスである。幸運、敏捷が間違いないくトップクラスだ。これだけならレベル8の先頭集団にも負けぬだろう。

「相変わらず知力に成長がありませんね」

「わはははははっ、頭など二の次よ！」

『バカですか？ バカでしたね申し訳ありません。とりあえず脳筋なのはわかりました。それよりも称号の能力を見せてもらえますか』

要望に応えるために称号欄を開く。

【束縛されぬ囚人^{プリズナー}】

入手条件 ：ログアウト不可能状態になる

上昇ステータス：LUC+5、SPD+2、DEX+2

備考 ：広く果てなき独房で、どこまでも自由に生きつ

づけよ

「すごいよね。運と敏捷の両方が上がるんだよ！ もう最高だよ！」

『あなたはもう少しプライドというものを……いえ、無駄ですね。忘れてください』

なにかを諦めたような声。むう、何がいけなかったのだ。

謎を抱えながらブドウジュースの入った木のジョッキを持ち上げて飲み干す。

ぼくが座っているのは広場幾つもの机を置いた酒場だ。酒場と言っても幾種ものドリンクを置いているので客の中には子供も多い。それに開放的な場所だけあってか定番の難癖をつけてきそうな人間はほとんどいない。なかなかいい場所だ。

ぼくがこの場所に居座って約3時間。目当ての人たちは未だに姿を見せない。

その間ずっとジュースを飲んで暇をつぶしているので体を揺らす

たびに胃の中からタプンタプンと聞こえてくる。このまま目当ての人物がこなければ水風船になってしまいそうだった。

「あゝあ、早く来てくれないかなあ。キラーベアー討伐パーティー」

十 十 十 十 十

さかのぼること4時間前。

「わたしがテスターとしてウィゾールをプレイしたとき、キラーベアーを倒して終了しました」

「マジで！？ 何レベルで倒したの？」

「4人パーティーの28レベルです」

遙か遠い実力者たちの話であった。レベル差が2倍どころか7倍差とありえねえ。しかも1人じゃなくて4人って。あの熊どんだけ強いんだ。とてもじゃないがゲームバランスが狂ってると思えん。

「ウィゾールはリアル志向ということで弱いモンスターの中に若干の強いモンスターも徘徊している仕様になっています。フィールドはこの程度ですが、ダンジョンになるともっとひどいことになりますよ」

「どれくらいひどいの？」

「レベル差100ぐらいあります」

「ヒドイ、酷すぎるっ！ 鬼畜とかってレベル超えてっぞ！」

絶対製作者側にゲームバランスを考える気などなかったに違いなし。てゆーかあったとかほざくなら一発殴らせる。

『本題に入りますと、今のあなたがキラーベアーを倒すと10以上レベルが上がるはずです』

「つまりは周りから大きくリードできる、ってこと？」

『その通りです。そして現状、できるのはあなたただけだろう倒し方があります。わたしを信じてもらえますか？』

「当然」

女の子から信じてほしいと言われて続く言葉が信じられないのは「この書類にハンコを押して欲しい。絶対に迷惑はかけないから」と「べ、べつにアンタのことなんて全然好きなんかじゃないんだからね！ 本当よ！」の二つだけである。それ以外は即決即断。首肯するだけである。

「ふふっ、即答なんですネ。僅かですが嬉しいですよ」

「どういたし……はっ！ もしかしてぼくに惚れちゃっ」

「それはないのでご安心を」

「……………さいですか」

否定が早すぎる。せめて最後まで言わせてほしかった。ぼくの割れ物注意なガラスのハートが傷ついちゃう。

地面に丸を幾つも書きだしたぼくを無視して由水さんは作戦を話し出す。

「倒し方はいたって簡単。大自然の掟に従います。必要なのは幾つかのアイテムとスキルと操作技術と高い敏捷、そして運です」

「最後の2つはまるであつらえたかのようにぼく向けだね」

「いえ、全てがあつらえ向きです。一樹の操作技術はわたしが保証します。おそらくですが幼少から何かしらのスポーツをやっていた

のではないですか？」

なるほど。どうやら嫌々やらされていた武術が役に立っているらしい。どこことなく複雑な気分である。

「まあ、この体にだいが慣れてきた今なら大抵のことはなんとかいはけるよ」

しかし、利用しない手はない。あるべきものは使い切り、最大限に活かすのが当然だ。それに

「何でも言ってよ。漢^{かん}として期待に答えなくちゃね」

男の子とは気になる女性の前では無駄にカッコつけたがるものなのだ。

十 十 十 十 十

エプロンと後ろで結んだ長いポニーテールが可愛いウエイトレスさんのリンネちゃんと話をするついでに6杯目になるブドウジュースを頼もうとしたとき、彼らは現れた。

鎖帷子を身に着け、腰に剣を佩いたヴァイキングのような恰好をした女デーモンと男ドワーフの2人、杖を抱えたエルフの少女と青年、軽装で身を固めた男ビースター。そしてなにより目を引くガチガチの防具と大盾で身を固めた青い羽の生えたドラグーン。

ドラグーンの顔はフルフェイスの兜で覆われており、顔を見るこ

とはできない。そのためか頭上にHPバーを確認することはできないのだが、その上にあるはずの名前は全くの空白になっている。

顔と名前を覚えることには一級品のぼくだが、さすがに一目見ただけで物腰の全てはわからない。だから彼が誰なのかは想像もつかない。

しかし見事にヒューマンをのけ者としたパーティーである。なにか、そんなに人間を止めたかったのかお前ら。

まあ、それは置いて。ぼくの直感を信じるならばデーモン、ドワーフ、ドラグーンの三人はウォーリアー。エルフの少女がウィザードで男がプリースト、ビースターは同業者でシーフと言ったところか。

なんとというか恐ろしく前衛過多なパーティーである。間違いなく熊の猛攻を確実に防ぎ、魔法を叩きこむために結成されたパーティーだろう。

お目当ての人物たちが現れたので、ぼくもようやく行動を起こせる。

「お出かけですか？　一樹さん」

と思ったときに件のリンネちゃんが声をかけてくれた。ぼくより頭一個分小さい身長から上目づかいで見てるそのクリクリの瞳が保護欲を駆り立てる。思わず悪い男の人にひっからないように鍵の付いた部屋に閉じ込めて保護したくなる。

「そうだよ、ちょっと外に行ってモンスター倒してくるよ」

「頑張ってくださいね。帰ったらぜひ店に寄ってってください。サービスしますから」

「えっ！ お酌とかお姫様抱っこか膝枕とかそっというのはありですか！」

「あはは、レベル1000までいけたらもっとすごいサービスまでしてあげますよ」

「俄然やる気が出てきた！」

レベルを1000まで上げる目標が生まれた。これは必死に上げなくては。

『情熱を燃やさないください。暗に断られてるんですよ』

由水さんが何やら言っているがそんなはずない。レベル1000まで上げればきつとしてくれるに違いない。

膝枕以上の外国式ハグとかホッペにチューとか手を恋人つなぎとか、もうすごいことをやらしてくれるに違いない。ん？ なんか思考が風俗にはまるエロおやじみたいになってる気がする。さすがにそれはマズイ。改めなくては。

『それよりも、討伐隊が行ってしまいますよ』

「うおっ、それはヤバい。じゃアリンネちゃんまたあとで寄らせてもらっよ」

「はい、お待ちしております」

今回、由水さんが提案してくれた作戦の第一ポイントは”誰かが弱らせた熊を倒す”というものだ。

現状、トップランナーですらレベルが8ぐらいなので、マトモな方法では奴には勝てない。ということは無謀にも奴に刃向かう者たちは全滅か撤退かのどちらかの道を辿る可能性が非常に高い。彼らが消えたあとに残った熊と戦えば幾分か戦闘が楽になるはずだ。

だからぼくたちはまず、その無謀なパーティーを探すこととした。そして今はその後ろを100メートルほど距離を開けて歩いている。

彼らもぼくの追跡に気付いているだろうが一人ということもあって気にしないことにしたようだ。こちらとしてはありがたい。

さすがにこの距離では彼らの会話を拾うことができないが、彼らの行動で大体の力関係が分かった。

おそらくリーダーはドラグーンだ。そして歩き方や腕の動かし方、首や腰の曲げ方、そういった細々とした挙動を見るに女だろうと予測がついた。

そして彼女と仲がいいのがウイザードの少女エルフだ。彼女に顔を向けるときだけゆったりとした挙動で振り向いている。あれは心を許した相手にのみ見せるものだろう。

残りの人たちはたいした繋がりはないように見えるが真剣に熊を倒そうと考えていることはここからでも窺える。

シーフは一定時間ごとに手を掲げ、エネミーマーチを繰り返している。ウォーリアーの

2人は話しながらも鞘に置いた手を動かさない。

全員が全員戦闘準備は万端であった。

と、そこにとうとう奴が現れた。

「戦闘用意！」

リーダーに向いている大きな声が平原で厳かに響き渡り、全員が即座に武器を構えた。

彼らから数十メートル離れた茂みから熊が現れ、車のような速度と巨体で疾走する。

ビースターは弓をインベントリから取り出すと間髪入れずに矢を放った。矢は黄色の光を描きながら迫りくる熊の顔面へと直撃した。

グウアア！

矢は頬のあたりに突き刺さった。が、僅かに吼えただけで奴の突撃は止まらない。それどころか戦意を煽り、殺意を助長させたように見える。

身を竦ませたくなるほどの殺気を流れ出る血以上にふりまきながら迫る殺人熊。その突撃線上に仁王立ちしたのはあのドラグーン。

鉄の大盾の底を地面が揺らぎそうな勢いで叩きつける。

「打ち合わせ通りに！」

叫ぶと同時に周りの者たちが散らばる。彼女の付近に残ったのは魔法使い職であろう2人だけ。その2人はドラグーンの守りを信頼してか杖を宙に浮かせたまま動かない。

前に突き出した手の先で宙に浮いた杖が真ん中を中心にくるくると両端で円を描き続ける。口は動いてないが、おそらく魔法を使う予備動作なのだろう。

熊の接近をもとめせず不動で立ち続けるドラグーン。彼女を信じて魔法を発動しようとする2人のエルフ。そして間合いを計っていつでも支援できるようにしている残りのパーティーメンバー。

なるほど、彼らはなるべくしてウィゾールでのトップランナーの座にいるのだろう。

デスゲーム開始からたった2日しかたつてない現在。あれだけの動きができるのは努力や深い思慮の面もあるだろうが、才能や適性といった面も非常に大きいように思える。

さほど親しくない者たちでもあれほどの連携が取れるのは人としての性格が優れているのか、何かしらの心得があるのかのどちらかだろう。

エルフの少女が回る杖を掴み天へと掲げる。

赤い輝き彼女を中心に広がり、宙に人頭大の火の玉が3つ浮かび上がる。天に掲げた杖を熊へと向けるとそれらは矢の如き速度で襲いかかった。

初撃は太い右足に撃ち落され、地面で爆音を立てる。地面が黒く

しかしHPにさしもの変化もなければ怯むわけでもない。さすがはレベル差が20以上もあるだろう敵というべきか。

再び熊の腕が振り上げられた時、散らばっていた仲間たちの援護攻撃が入った。

鉄の剣を振るって横からウォーリアーの2人が注意を逸らしにかかる。

漫画やアニメのように一刀両断とはいかなかった。せいぜいがメリツと刃がわずかにその身に食い込む程度。

だが熊は刹那的な生き方をよほど好むと見える。痛みを与えてきた男二人に報復するのを優先目標としたのか彼らへと振り向く。それが仇となった。

まるで吸い込まれるかのように見事な軌道を描いて矢が熊の濁った瞳へと突き刺さった。

ガアアアアアアアアアアアアアアアア!

矢の来た方に視線を向ければ弓を構え、優雅な残身に浸っているビースターがいた。

赤い血がかつて正常な目があった場所から矢を伝ってポタリと地を濡らす。

『あれはシステムのアシストを大幅に超えています。おそらく現実でも弓を嗜んでいたのでしょうか』

20メートル先にあるビー玉程度の動く熊の瞳を一発でピンポイントに狙い撃つなどカッコよすぎるぞ。この時代錯誤のジャパニーズ侍め。

しかし、これはひょっとして初のキラークーベアー討伐が完遂されるのか？

自分が出る幕もなく終わってしまうという予想に”あっさりとういゾールはクリアできるのでは”という期待と”自身の出る幕はない”と言われているような僅かながらの悔しさが胸を満たした。

15) 熊狩りの始まり(後書き)

あと数話で第一章を終了させていただきます。

感想で意見いただきました人物紹介に閉じましてはその時に同時掲載させていただく所存であります。今しばらくお待ちくださいませ。

製作者たちが酔って作ったとしか思えないアレなゲームバランスのなか、一樹はどうするのか。こつこ期待……………してくれると嬉しいです。

16) 蟻と象の力の差(前書き)

書きたかったところk t k r!!

16) 蟻と象の力の差

『そろそろ撤退するはずですよ。そうでなければ決壊しますね』

無情に告げる由水さんの言葉通り、目の前で繰り広げられる戦闘は熾烈を極めながらも止めを刺すに至らない。

キラーベアーを相手取り、6人パーティーは必死の奮闘を見せていた。

ドラグーンが一步も引かぬ防衛を見せて仲間を守り、ウォーリアの2人とシーフが気を引き続ける。そして決定打として放つ少女エルフの魔法と仲間の治療に専念する青年エルフ。

あれから10分以上もの攻防。善戦したと言ってなんら文句は出ないだろう。

キラーベアーのHPを半分ほど削りきり、未だ誰一人として死んでいない。称賛されてしかるべき結果だ。惜しむらくはレベルがあと10もあれば止めを刺し切れたことだけだろう。

あの冷静に敵の動きを見切り一瞬の判断に身を任せるリーダーのドラグーンは撤退の機を見失うことはないだろう。だとすれば……

ふと、視線の先に2体のゴブリンを捉えた。どうやら漁夫の利を狙っているのか弱った彼らを襲おうとしている。このままでは1分もしないうちに接触するだろう。チャンスだ。

「由水さん、出ます」
『武運を祈ります』

短く言葉を交わし、隠れていた茂みから全力で飛び出し、彼らを襲撃しようとして近づいていたゴブリンに奇襲をかける。

後背からの刺突。グラディウスがズプリとゴブリンを串刺し、薙ぐ。一体が燦然と砕け散り、それに気づいた二体目が振り返るのは遅すぎた。

薙いだグラディウスの刃がゴブリンの首筋をあっさりと切断する。

ギャグのように軽く吹き飛んだゴブリンの頭は切断されて尚意識があるのか叫んでいた。その叫び声で彼らパーティーはぼくの位置に気付き、彼らの優秀なリーダーは即断した。

「撤退、ソイツになすりつけて！」

わーお。狙ってやったことと言えど、ここまで明確に言われると結構くるものがある。というか一切悩むそぶりを見せなかったところに尊敬すら覚える。

他のパーティーメンバーも行動は迅速で熊と自分たちの逃走経路の間にぼくが挟まるようにして脱兎のごとく逃げ出した。同業者のビースターに至っては足を引っ掛けて転ばせようとしてきた。

恐ろしい連中である。ちゃんと躲したけどね。

「貴方に恨みはないけど、自分にも落ち度があったと思ってちょうだい」

それだけ言い放つとドラグーンは装備のほとんどをインベントリへと仕舞い込み、兜に隠れていた素顔を晒した。

鮮やかなブロンド　ノルティックブロンドの女性だった。耳のあたりから生えた角がアクセントとなつてツンとした表情に磨きをかける綺麗な容姿だった。

彼女は背中に生えた羽をはばたかせ空を舞い、仲間の後を追っていった。これで現場に残つたのはぼくと熊だけ。

推理漫画で無人の館に数人で閉じ込められるより性質が悪い。なぜなら居合わせる目の前の熊は推理漫画の犯人のようにアリバイや証拠の紛失に精を尽くそうとしないからだ。ただひたすらに殺すことだけを考えている。

ウアアアアアア

呻くような低い声が涎を垂らす小汚い口から洩れている。

そこに並んだ凶悪な歯並びも血の付いた爪と歴戦を漂わせる傷も最初に会った時の熊と相違ない。大きな違いは殺意に満ちていた濁った瞳の一つが減り、矢に変わったことぐらいだろうか。

「さあ、お前の相手はぼくに変わった。体に矢を刺すファッションを楽しんでるところ悪いが、死んでくれよ」

ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!

人語を解さずとも挑発されたことは理解できたのか怒りの咆哮を

放ち、隻眼の瞳から言いよのない殺意を放つ。失われた瞳から流される血の量が増えたのがこちらの恐怖を煽ってくれる。

しかし、引くわけにはいかない。強くならねばならないのだ。シイナや源ちゃんを見つけ、守れるほどに強くならなくてはならない。だから勝たねばならない。

「今度はぼくが殺してやるよ」

『蟻が象に勝つためにまずすることは数を増やすことです』

そう言われてとることにした策が討伐隊を熊に当てて、弱ったコイツを狙うこと。

そして2つ目に言われたことを実践するためにグラディウスを握った右手でフィンガースナップをする。

メニューを即座に開き、アイテムを呼び寄せる。どうやらメニューを開くフィンガースナップは音が鳴らなくてもも親指と中指をこするだけでいいようだ。しかしメニューは必ず視界の中央を陣取るので戦闘中に開くのはかなりリスクである。色設定で青透明に変えられるからいいものをメニュー越しを見渡せない色であつたら最悪である。

「っと、あぶなっ」

接近してきた熊が前肢を叩きつけるようにしてのしかかってきた。それを間一髪のところまで避ける。

これで一回圧殺されたのだから同じ手は二度と喰らうものか。

地を踏みしめ一定の距離を置いて熊の背後に立つ。

『キラーベアーは前、横、斜め全てに攻撃できる攻撃バラエティーの多い強敵です。しかし後ろだけは距離を置けば安全域となります』

視界にぼくを捉えようと必死に体を回すがあいにくとその速度は遅い。短い四肢が不便そうだな短足熊め、ぼくの長い足が羨ましかろう。

僅かながらの優越感に浸りながら右手に取り出した試験管の栓を引き抜いて体に悪そうな深すぎる緑の液体をグラディウスにたっぷりとかける。

空となった試験管を地に投げ捨て、グラディウスを逆手に持ち変える。

体の回転にもたつく熊の背後から切りかかる。ギチツとした感触が刃から伝わる。

思った以上に固い毛皮だった。先ほどのパーティーがこれより長い刃を力の限り振るってもたいした傷をつけれなかったのが痛いほど実感できる。

っと、ゆっくり実感に浸っている暇はなかった。

サイドステップをすると同時に熊は後ろへと跳ねた。ズシンと地を揺らすほどの重量を四肢で支える。ようやく捉えた、と言わんばかりに獰猛な口を舌なめずりしている。

舌打ちを打つ。さすがにずっと後ろをとって一方的に攻撃し続けるとはいかないようだ。

僅かな希望を抱いて熊のHPバーを見るが変わった様子の一つもない。先は長そうだ。

睨み合いが始まることはなく奴の方からスグに仕掛けてきた。初動からスピードMAXをたたき出す驚きの瞬発力を駆使した突撃。それをSPDに頼り切った身の軽さですんでのところを回避。交錯する一瞬で逆手に握った刃を奴に掠らせる。

HPゲージに変化は……ない。これは本気で気長な勝負になりそう
うだ。

この作戦の要ともいえる第二ポイント。それは、

『もし、蟻が数を増しても象に勝てないのなら、毒を用いるまでです』

ウィゾールでの状態異常成功率はアイテムごとの能力と敵の耐性、そして使用者と相手のLUCが大幅にかかわってくるらしい。そのためレベル差が大きすぎるとまず成功しない。

だが、極端なまでにLUCへとステータスを振り分けているばくならば成功する確率はプレイヤーの中でもダントツに高いはず。

そしてジョブ【シーフ】が覚えられるスキルには【状態異常成功確率アップ】と【状態異常強化】がある。

残ったスキルポイントを全てつぎ込み、それぞれLv.1とLv.5のスキルを手に入れた。そして肝心の毒は店で購入。剣にぶつかけた試験管の中身がそれだ。

【毒液Lv.5】 5

分類：特殊ポーション

効果：一定時間、塗りつけた物に毒属性を付与する。

レベルが上がるほどダメージと成功率が増す。

特殊：なし

備考：HPを地味に削る毒の原液。取り扱い注意。絶対に飲むべからず！！

Weight:1

めちやくちや高かった。なるべく成功率を上げたかったのでけちけちせずに最高レベルの物を買ったのだが、お値段なんと3000ラズ。

これのおかげでまたもぼくの財布は素寒貧だよ。

「やばっ！」

熊が体を横にしての体当たりモーションへ移行していた。面積が

ウィゾールは開発当時、あらゆる問題を抱えていた。それはユーズの立場からですら難しいと思わせる問題点だった。

たとえば初期ステータスはどのようにするか。あまりに強すぎると現実の体とのギャップが激しくなると最初はまず動かせない。逆に平均より弱すぎると煩わしさに不満を抱く人が出てくる。

これに関しては高校生男女の平均的な能力ということで決着がついた。そしてレベル100まではゆつくりとした成長補正をかけることでその体に慣れさせるのだ。そうすることでプレイヤーは仮想の体を手足のように動かせるようになってくる。

といっても最初は困難を極めるのは確かだ。事実テストとしてウィゾールをプレイした由水も普段とは違う体の感覚に非常に戸惑い、最初はどこに躓くでもなく転倒を繰り返していた。苦勞するということだけで不便というわけではないのだが、まるでゴム人形に意識が乗り移ったような奇妙な感覚がしてうまく動かせもしなければ、素直に刺激を受け取ることも難しいのだ。それは他のテスターたちも同意見だった。

仮想の体と自分の意識をすぐに馴染ませられるのはスポーツや武術を真剣に取り組むことなどによって身体管理、鋭敏な感覚性を手にした者ぐらいだ。少なくともその仮想の体と自分の意識が完璧に馴染むのは平均168時間は必要だろうと結論が出されていた。

つまるところ、いくら痛みレベルをいきなり10にしたところで不慣れなうちはゴムを通して伝わるような痛みになり、現実のそれとは程遠いのだ。

しかし由水が一樹に感覚に関する感想を聞いた時、彼はこう言っ

た。

「情けないことにけっこう息が上がってる」

由水は最初に聞いたとき「ああ、この子は鍛えてるんだな」程度にしか思っていなかった。しかしその考えは次のセリフと初死亡の時の感想で吹き飛んだ。

「現実の疲労感と全然変わらないよ。正直なところ現実も何かのゲームなのかと勘違いしちゃいそうならいの再現度」

「骨が砕けて、地面と熊の腕で臓器がサンドされてぐちゅぐちゅって潰される感覚までイヤにリアルなんだよ。しかも血が口までせり上がってくる気持ち悪さまで表現されてるんだから性質が悪いよ」

一樹は現実と全く変わらぬと思えるほどにリアルな感想を口にしたのだ。

そして自らを一撃のもとに粉碎する敵を目の前にしても全く怖じ気づかずに立ち向かう胆力。なにより天賦の才とすら思える尋常ならぬ反応速度。

ドラグーンの人物も相当に規格外な存在であったが一樹の行動もまた並大抵の人間にできる反応ではない。

相手を倒して勝つ。というのは違う、殺す感覚を伴うウィゾールでの戦いは、体験したことがない者にとっては刺激が強すぎる。

本来であれば血など流れず、死ねば透明になって碎けるだけのはずなのに、なぜか今はリアリティーを追求し死ぬまでは生き物のように血を流す。

そんなアンリアリティーな環境に居合わせ、生と死の境を彷徨い歩くような戦闘をしているにも拘らず、彼の反応は常に冷静且つ迅速だ。

怒りしキラールベアーの剛腕を数センチ差で躲し切り、潰された右の死角へと移動して時間を稼いでいる。

先刻の体当たりに関しても、上に躲すなどという反応を常人が咄嗟に下せるだろうか。いや、不可能だ。あれは日常的に体を動かすことに長けた者の発想だ。

腕が振り切られる瞬間まで目を離さず全てを見切る鋭き瞳と紙一重で躲し切る体捌きは素人な由水の目には玄人と区別がつかない。

一樹、あなたは一体、どんな人生を歩んできたの？

そんなうすら寒い疑問が心に根付く。しかし同時に言い知れぬ感動も湧き起っていた。

彼なら、彼ならば。誰よりも早く果てなき自由を冠するウィゾールの頂点へと辿りつき、全てを圧倒し、全てのプレイヤーを救い出してくれるかもしれない。そして彼をそこまで導くのは……

そんな暗いとも、明るいとも取れるような思考が胸を占めていった。

16) 蟻と象の力の差(後書き)

主人公、変態だけど只者ではないです。変態だけどね!!
ご都合すぎる。と言われるかもしれないませんがそこは勘弁してください。お願いします。

皆様のおかげで小説を読もうランキングSF編、日間と週刊に乗るようになりました。キヤー嬉しい!

今日なんて8位です8位! すごく嬉しいです。

だから調子にのって一位の人はどれくらい一日でポイントを得てるのかなと思っただけで見てみたら、

1位 超凄い御方 1315pt

8位 私 20pt

.....()ポカーン

まさに言葉通り桁違い。しかも二桁WWW

所詮井の中の蛙でした(´・`・´)シヨポーン

蟻（小さき者）の毒（前書き）

パソコンしながら机で寝てしまった。投稿遅れて申し訳ないです。

蟻（小さき者）の毒

「はあ、はあ、あかつ　　っう、ひゅうっ」

持ち前の優れた動体視力のおかげで現実の体にかなり劣るこの体でも何とか熊の攻撃を躲し続けられている。しかし事前に由水さんから指摘されていた懸念事項である持久力。VITは予想通り全然補えない。

息はとめどなく口から洩れつづけ、肺は先ほどからずっと限界を訴え続けている。体が休め休めと脅迫するかのように汗は止めどなく流れ、鼻先から滴る感覚がどうしようもなく鬱陶しい。しかも目に入った時は最悪だ。一度それで反応が遅れてしまった。

何とか爪が頬を掠るだけで済んだが、HPは1/4も削られ鋭い刃物で肌をパツクリと裂かれたかのような痛みが走った。それだけならいいものを裂かれたように感じた肌は裂かれておらず、血が流れないことが普段の感覚をさらに狂わせる。こうなるぐらいなら流れてくれた方が幾分マシだ。

そしてどうやら痛みとHPの消費量は比例していないようだ。おそらく攻撃が当たった場合、HPに攻撃力分のダメージが追加されるのだろう。

インベントリから購入しておいた【キュアポーションLv.1】を取りだし、試験管の蓋を親指でキュポンと抜き、体に悪そうな青色の液体を口にする。

薬品くさい味が舌を汚染していくようだった。しかも息が荒い今、僅かな粘性が喉を通り咽むせそうになる。しかしそんな余計な動作をできるほど余裕ある体力をしていないので気合で抑え込む。

なんとなく”とある回復薬”をラスボス前の主人公に99本も一気飲みさせたことを申し訳なく思えてくるほどだ。しかしこれで遅々とした速度でHPは回復していくはずだ。

空となった試験管を熊の残った隻眼に向けて投擲する。

そのおかげで攻撃モーションに入っていた腕をわざわざ防御に向けてくれた。僥倖僥倖。

勝負を始めてそろそろ3分が経つだろうか。それともまだ1分と経っていないのだろうか。わからない。

いつもと疲労具合が全くといっていいほど違うので時間の感覚も狂う。

油断につながらないように敵のHPバーは毒らせて以降覗いていないから、計る術もなければそんな暇もない。

おかげで果ての無いマラソンをやらされている気分になってくる。しかも敗北という途中リタイヤがあるマラソンである。

敵の爪が目の前の地面に叩きつけられて飛び散る土の欠片と腕の振りで生まれた風圧が頬を打つ。砕ける土塊つちくれと吹き荒れる風圧がぐちゃぐちゃになるほどの体を容易に想像させる。

いくら大層な目的があろうとも根本的な恐怖が人から無くなるこ

となどありえない。もし在り得るならばそれは恐怖を押し隠す死にたがりの愚か者だ。そしてぼくは生きたがりの臆病者。

しんどい。辛い。熱い。苦しい。怖い。恐ろしい。

肉が噛み砕かれ体が欠損する文字通り身が削られるような痛み。押し掛かれ、骨・肉・臓器全てをミックスされるように圧殺される痛み。戦車の如き巨体で轢かれ紙片のような命も残さしてくれない強暴さ。怖い、恐ろしい。

恐怖と体力の両方からか足の踏ん張りが次第に効かなくなってきた。ちよつとした拍子に滑らせて転んでしまいそうだ。くそっ、こんな麻の靴ではなく、裸足になるべきだった。

猛る敵の殺意に体力がじわじわと奪われていき、肺と心臓がろっ骨を突き破って外まで飛び出しそうなほどに暴れ狂っている。

襲いくる乱舞の如き爪の嵐。戦車の如き突進。天井が落ちてくるかの如き体重が乗った押し掛かり。

全てが全て致命傷。まともに喰らえば即死決定。

余裕など一瞬もあるはずない。目の前の敵に全神経を集中して拳動の一つから筋繊維一本を観察し予備動作の全てを見逃さない。といても教わった武術で相手として想定されているのは人間なのだ。熊など想定外もいいところだ。まともな考えができる人間なら猟銃を持つてくる相手である。

「ぜえっ、かはっ、はあ、じっはっ」

いくらでもあるはずなのに酸素がうまく取り込めない。いつもより少ない肺活量にどうしようもない苛立ちが募り、もっと大きな口が欲しいと無駄に願う。

戦う最初にあれだけ偉そうに言ったくせに、今は無様に荒い呼吸を繰り返して足取りも現実の自分を見る影はない。

酸素の不足が視野狭窄を招き、反応の低下を呼び起こす。

熊がその巨体で地面を抉るたびに土煙が立ち上がり、荒く息をする口の中へと侵入する。ざらつく不快な感覚が気持ちを乱し、貴重な唾液の水分を奪っていく。

酸素が欲しい。水が欲しい。安全が欲しい。勝利が欲しい！

シンドインダヨ。ツラインダヨ。クルシインダヨ。ハヤクオワラセタインダヨ。ダカライイカゲン、イイカゲン

「いい加減、死んでくれっ！」

瞬間、足元が揺らいだ。いつの間にか石が雑居する足場となっていて、その一つに足を取られたのだ。

しまったっ！

踏ん張ろうと足を動かすが、体力尽き、弱った現在の足腰では崩れゆく体重を支えることなどできようはずがなかった。

ゴツゴツとした硬さが体を打つ。リアルと何ら変わらないその痛みがひどく憎たらしい。

骨と肉が砕き潰される不快しか生まない音が響く。

それから【怪我・左手】の状態異常アイコンが隅に浮かび、温かみのあるヌルリとした水ともノリとも違う液体が全身に降りかかった。

突き出したナイフは全体重をかけて押し掛かってきた熊の喉元にズブリと差し込まれ、滝のように血を流している。そして奴が振るった右前肢はぼくの顔を僅かに掠り、そのまま起き上げるための支えとした左手を上から踏み砕いてくれた。

左手を潰されたのに痛みがないことを不思議に思ったのも束の間。

どうやら痛み の伝達速度は音よりも遥かに遅いらしい。

「ああ、あ、ああ、！」

声にならない悲鳴が喉からひり出され、激痛に目を力強く閉じて歯を顎が砕けんばかりに食いしばる。

砕けた痛む左腕に体重をかけることなどできず、突き立てたナイフで体重を支えようとした。しかしそれも無理となった。

パキイイイイイン。

熊の体がロックアイスのように透明となり、ヒビが入って砕け散った。欠片の全てが降りかかり、ぼくの体を埋め尽くさん勢いだっ

た。
パキンパキンと耳元で反響する音は非現実的で実感が中々伴わな

かった。

欠片の全てが地に落ち、煙と化して宙に溶けていったとき、心を高ぶらせるBGMが鳴り響き、テキストがポップされた。

「レベルが上がりました。称号【孤高なる一匹狼】を獲得しました。」

『すごい。すごいですよ一樹！ まさに天才というほかありません』

テキストを3度ほど見返し、由水さんの祝福の声が聞こえてからようやく状況を理解できた。そして続けて込み上げてくるのは当然、達成感だった。

「かった、かった、勝つ、っああ！」

ガッツポーズをとろうとしたところに再び激痛に襲われた。

『怪我の状態異常をもたらす攻撃を受けたのです。治療しないと痛みが続くことになりますよ』

その言葉を聞いて一目散にキュアポーションを取りだし、薬品くさい液体をまた口にする。形容しがたい不快感が喉を通る瞬間が何とも言えない。

これであと数分もすればHPは回復しきり、綺麗なままなのに痺れたように動かず、肉と骨が砕けるような鈍痛を生み続けるだけの左手も改善されることだろう。

HPバーに目をやってみれば残りの数値は、あれ？ だいぶ残ってる。掠っただけでHPが1/4も削れたのだから。瀕死でも不思議では、ってそうかレベルが一気に上がったからか。

ステータスが上がったのだなという更なる証拠を得て、大きな安堵の息を吐く。。

恐れが消え去り興奮が沸き起こったことで、どうしようもないほどの疲れが肩にのっかかってきた。

「はあああ、疲れたあ」

『お疲れ様です一樹。今日は十分すぎるぐらいの成果を得ましたから早く町に帰って休みましょう』

疲れた心を優しく癒してくれる由水さんの声が天使のお迎えのようだった。天国が彼女の声で満たされているなら閻魔王の閻魔帳に書かれたばくの悪行を改竄かいざんしてでも天国に行きたくなくなるぐらいの癒し度合である。

いかな、疲れすぎて例えまで訳わからんことになってきてる。HPが回復するまでステータスでも弄ってるかな。

そう思って開いたステータス画面はドエライことになっていた。

NAME：一樹

LV　：27

JOB　：盗賊

TITLE：束縛されぬ囚人

BADST：Pain？

STATUS

体力 HP 695 / 800

武器；

「剣」グラディウス

魔力 MP 644 / 644

防具；

「胴」麻の服(DEF+3)

攻撃力 STR 88 (+7)

「腕」皮の籠手(DEF+10)

持久力 VIT 140

「足」麻の靴(DEF+3)

敏捷 SPD 176 (+2)

知力 INT 61

精神 MND 114

器用 DEX 166 (+12)

運 LUC 179 (+5)

ボーナス 115

ステータスが軒並み八倍ぐらいになってるんだけど。ていうかSPD、DEX、LUCの飛び抜け感が半端ないんだが。さすがヒーマンのシーフ。手先が器用でスバシツこく、幸運でいらっしやる。

まさにぼくの理想形である。あとはちょちょいとボーナスをSPDとLUCに振り込んでおけば完ぺ

「ちょっと待ってください。またあの二つにつき込むつもりじゃないですよね？」

「え？ そのつもりだけ？」

頭の中に頭を抱える由水さんの悩ましげな吐息が聞こえた。悩ましげな吐息ってなんかセクシーな感じがするよね。

うん、さてボーナスを

『一樹はどのような考えがあつてそうしようと思つているのですか』
冷たく、そして暗に咎めるような口調だつた。

今まで怒鳴られたことはあつたが今のように心がビクつきそうな咎める口調ははじめてだつた。

このボーナスの振り方でぼくがどのような役回りをできるのかわずと決まつてくる。つまりは重要な選択なのだ。彼女は心配の意味を込めて今の言葉を言つたのかもしれない。

だからこそぼくも無い頭で真剣に考えた結論を述べた。

「ぼくは他のプレイヤーたちよりも由水さんの存在で優位に立つてる。だから誰もパーティーには入れてくれないと思う」

紅音さんに教えてもらったことだ。そしてそれが事実であることは結晶屋で出会つた江沢さんの反応を見ればまず間違いないだろうこともわかつた。

多くの人は自分より優れた者を見れば嫉妬してしまう。そしてつい手を出すことだつてある。そんな手を出される存在に手を差し伸べる者は奇特なのが世界というものである。

これはかなり手痛いことだ。先のドラグーンのパーティーのように手練れが6人も集まればレベル差が20以上ある敵だろうと決壊することなく互角並に戦える。しかし一人ではよほど綿密な計画と

運、何より相性が良くなければまず不可能だ。そして一つの失敗が生死を分ける。

あまりにリスクだ。多くの失敗の度に復活結晶を買っていたのでは借金は返せないだろうし、それどころか増えていくことになるだろう。

ではどうすればいいか。

「だからぼくは一つの進路を考えた」

ぼくの考えた進路。それは”自分ひとりだけで勝てる敵とだけ戦える能力値を目指す”というものだ。

今回の戦いで確信したのだが、SPDを極端に上げれば強いモンスターと言えど引き離すことが可能だ。そしてLUCが高ければ状態異常にさせることも容易い。

つまり状態異常のエキスパートとなって、勝てる敵とだけ戦い。勝てない敵からは全力で逃走をする超変則戦闘キャラを目指すというものだ。

当然のことながら常道を離れるということはリスクの方が大きい。先の考えの通りに助けてくれる仲間はいないから失敗すればまず即死は免れない。速さを生かすためにドラグーンのような重装備できないからだ。

それに定番の魔法しか効かない敵が出れば完全にお手上げ。

しかしリスクの代わりに絶大なメリットが二つもある。経験値とお宝だ。

由水さんに聞いた話ではパーティを組んで敵を倒せば経験値が人数分に分割されるそうだ。しかし一人ならば当然そんなことはない。まあ効率はそりゃ悪くなるけどもさ。

そしてスキルを取得しようとしたときに気付いたのだが、シーフには”鍵開け”スキルがあるのだ。当然ながらダンジョンなりなんなりに宝箱があるのだろう。それを独り占めできるのだ。おいしいことこの上ない。

何より、ぼくは最大目的としてシイナと源ちゃんを探すために早く他の町へと移動したい。そうなるとパーティーには加わりづらい。

222

「まあ、こんな感じで長々と説明したけど、ぼくはこの道を歩もうと思う。そのために逃げる力のSPDとLUCにボーナスを注ぎ込もうと思ってる」

『……………』

すぐに返事は来なかった。脳内の痛いほどの沈黙が重苦しい。

どのような返答があるだろうか。否定されるだろうか、それとも肯定してくれるだろうか。その疑問ばかりが無言の脳内で論議される。

最悪、オペレートから降りられるかもしれない。

不安ばかりが募っていく。

『安心しました』

ところが、嬉しいことに帰ってきた言葉は穏やかなものだった。

『ただ考えなく気分で振り分けるつもりだったのならば警察に任せようかとも思いましたが。それだけの考えを持っているならわたしも全力を尽くします』

「はあ、よかったあ。見限られるかと思ったよ」

本当にホツとした。由水さんの声じゃなくてムサイおっさんがオペレートでもするようになればぼくの青春は灰色どころか奈落の底状態である。

『しかし、一樹の目指す道は面白そうですね』

どんなところが？ と尋ねると。

『毒を扱い、勝てない敵からは逃げる。まさに卑劣外道の戦い方ではありませんか。作品の世界ではまず主人公の座は在り得ませんね』
語尾に「ふふっ」と付け加えながら軽やかに言うてくれる。しかし言われた本人としてはかなり衝撃的事実だった。

「ぬおおおおおおおっ、そうだったあああああああああ！」

ということはないか？ ぼくはこれから強いやつからはトンヅラ、

勝つ方法はもっぱらチマチマした攻撃や毒を使った外道な方策。

………やばい。これはマジでやばい。

現世の好漢たる源ちゃんはおそらくゲームの世界でも好漢でありつづけているだろう。いや、間違いなくなっていることだろう。それなのにぼくは好漢ではなく真逆の悪漢のような戦い方とは、之如何に！

くすんくすん。ぼくだってヒューマンでシーフじゃなかったら戦闘の花形たる魔法使いとか戦士とかになって誰にも負けないくらい活躍するんだからな。絶対なんだぞ。くそつくそつ。

今から戦士や魔法使いに転職しようとも運の半分以下しかない攻撃力と知力ではどうしようもないのである。

『今更悔やんだところでどうにもなりませんよ。さあ、手も治ったことですし、町に帰りましょう』

うっ、このメタメタに傷ついてひび割れしまくった心を癒してくれるのは由水さんの声だけである。

『ウィゾールのド外道を目指しましょうね』

「うわあああああああああああ！」

救いは何処にもなかった。ウィゾールのゲーム以上に現実残酷であった。

数分クヨクヨしたあと、ヒューマン&シーフを選んだ悔恨はボinasを使い切ることですっぱりと忘れ去った。

いや、ほんとボinasを使うたびに幸運が増えていく感触は超ステキ。なんだか神社でお賽銭をどんどん投げ入れるような言い知れぬ幸福感であった。

とりあえずビジュアル的にド外道な戦い方ができる能力を目指すことにした。ぼくは町へと帰ることにした。

「おっと、これを忘れちゃいけなかった」

キラーベアーのドロップアイテムである右前肢一本やら爪やら牙やらだ。単品でもかなりの威圧感がある。

これに一度以上圧殺、噛殺、轢殺された身としては中々感慨深いものがある。というかトラウマで体が震えてくる。

「これって右手を当ててインベントリって言えば仕舞えるの？」

『はい、重量が100以内であれば大丈夫ですよ』

確認を取り、とつと仕舞おうことにした。ぼくはそれに右手を置いて

「インベ　ッ！」

ゾクリッと嫌な感覚が背筋を駆け上った。その予兆が後方から迫る風切り音だということに気が付いたのは直後だった。

自身の反射神経と瞬発力の全てをにかけて横に逃げようとしたとき

には遅かった。劇的に上昇したSPDをもつてしても間に合わせるのは不可能なほどに。

「づああ！」

左腕に灼熱の痛みが生まれる。おまけに異物感まである。

異変の元凶は二の腕の中央あたりから正面に向けて突きぬけていくほどの血で紅く濡れた鉄の矢じりが付いた矢のようだった。

「どこからと射られたんだ」と思い、スキル”エネミーサーチ”を発動する。これを使えば半径百メートルは確認できる。そして現実での弓の基本射程距離はその圏内だ。よほど規格外の能力持ったモンスターでもない限り、まず間違いなく見つかるはずだ。

しかし期待は予想外の結果で裏切られた。

『一樹っ、どうしましたか！』

「3……4、いや6人か。囲まれてる。しかも相手に攻撃された」

脳内に描かれたイメージには6つの光点が存在し、固まっている三つの光点はゆっくりとこちらを目指してきており、残りの3つはぼくを取り囲むようにして散らばっている。そのうちの1つは後方20メートルあたりで動こうとしない。おそらくこれが矢を射った張本人だろう

この陣形は見たことがあった。しかもついさっきだ。

目の前のアイテムの主を倒そうと頑張っていた綺麗な金髪のドラグーンがリーダーを務めるパーティー。その陣形そのままだった。

「初めまして、と言っべきかしらね。一樹くん」

なだらかな坂となっている頂上の向こうから最初に顔を出したのは予想通り鮮やかな金髪の持ち主だった。

17、8歳程度に見える艶美な容姿に湛えた微笑みは何処か経験の浅い年相応な女性らしさを演出しつつも底知れぬ何かを感じさせる。

湛えた微笑みは慈愛や優しさと言ったものとは根本から違う、相手を押さえつけて何も言わせなくする微笑みだ。

怖い。これは熊とはまた違う恐怖を与えてくれる少女だった。

彼女の後ろから現れたエルフの少女と青年の顔を見れば一目瞭然。平穩に話し合おうなどは一片も考えていない。ただ一方的な話し合いをする気がありありと伝わる、強者が弱者を見る目だった。

『プレイヤー同士での殺し合いはいくらでもできますよ』

こんな時に頭で響いたのは由水さんの美しい声ではなく、ヤラしげな笑みを浮かべた加崎が言ったあのセリフだった。

蟻（小さき者）の毒（後書き）

あとほんの数話で第一章が終了します。で、現在第二章を書いている途中であります。なので一章が終わったらしばらく充電期間をいただきます。

構成自体は決まっているので楽しみにしてくれてる方々は気長に構えていただけるとありがたいです。

誤字脱字、ちょっとした感想。なんでもいいのでおまちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4551x/>

The World With All ウィゾール

2011年10月26日03時06分発行